

愛知文教大學論叢

第 26 卷

愛 知 文 教 大 學

目 次

論文

『君の臍臓をたべたい』考(1)	江口直光	1
ヨーガ的身体論の資料： 『六輪解説 (Ṣaṭcakranirūpaṇa)』試訳(3)	遠藤 康	19
プログラマーのリスクリングに関する一考察	早川 渡	45
「とまる」の多義分析	梶川克哉	59
翻訳 サマセット・モーム「とっておきのランチ」	川口淑子	77
キャリア科目における PBL の実施	小川現樹	85
研究室ノート		105

『尾張年中行事絵抄』に見る近世尾張名古屋の色彩	内田吉哉	一 (134)
-------------------------	------	---------

『君の臍臓をたべたい』考 (1) ¹

江口 直光

I

2015年に刊行された作家、住野よるのデビュー作である小説『君の臍臓をたべたい』は大きな反響を呼び²、2022年10月までに累計発行部数300万部を突破したという³。短期間のうちにメディアミックス展開も盛んに行なわれ、刊行の翌年に発表された漫画版（桐原いずみ作画、2016～2017年月刊誌連載の後、2017年に単行本化）とオーディオブック版（オーディオブック配信サービスFeBe）に続き、小説と同じタイトルをもつ実写映画（月川翔監督、2017年7月28日公開）とアニメ映画（牛嶋新一郎監督、2018年9月1日公開）が相次いで制作・公開されてともにヒット作となり⁴、「“キミスイ”現象」という呼称も生まれた。ヒットの要因として、猟奇的な連想を呼び起こすに足る印象的な表題、重病のヒロインと男性主人公をめぐる純愛物語という予想を抱かせつつ、それを裏切るプロットなどが挙げられるが、大衆的な恋愛小説の見かけをとりながら、人間関係や死生観をめぐる哲学的省察がちりばめられている点もまた特徴的である。

先行研究としては、小説版（以下【小説】と略記）については土田（2020）、西貝（2023）があるほか、実写映画版（以下【映画】と略記）とアニメ映画版（以下【アニメ】と略記）の映像言語を比較考察した藤津（2023）が

短いながら説得力豊かである。しかし、『君の膵臓をたべたい』とほぼ同時期にアニメ映画と小説が公開・刊行されて大ヒットとなった『君の名は。』（新海誠監督／著、アニメ映画・小説ともに2016年）と比べると、本格的な論考は限られている。以下では、【小説】と【映画】を哲学的見地から比較検討するとともに、【小説】から【映画】へのアダプテーションの特質を明らかにしてみたい。

II

ストーリーの骨格は【小説】と【映画】で同一であり、以下のようにまとめられる。高校生の志賀春樹はある日、病院で1冊の文庫本を拾う。「共病文庫」と題されたその文庫本は、クラスメイトの山内桜良がひそかにつづる日記帳で、そこには膵臓の病気のために自分は余命わずかと書かれていた。こうして、春樹は桜良の家族と医師以外に彼女の秘密を知るただ一人の人物となった。桜良はさまざまな機会に春樹を無理やりつき合わせる。外向的な性格でクラスの人気者の桜良と、なるべく他者と関係を持とうとしない内向的な性格の春樹というように二人の性格は正反対だが、春樹は桜良と接するうちに、次第に桜良に対して心を開いていく。桜良の死後、春樹は「共病文庫」に記された桜良の手記を読み、大きく胸を揺さぶられて号泣する。

このようなストーリーが、桜良の死後、春樹の視点から過去のできごととして語られ、生前の桜良と春樹の交流が杵物語として描かれる点も【小

説】と【映画】に共通である。他方、【小説】では語り手の春樹も高校生であるのに対し⁵、【映画】では桜良の死の12年後、国語の教師となった春樹が語り手となる点が顕著な相違点である。また、【小説】では春樹の一人称視点が貫かれているが、【映画】では桜良の親友で桜良の生前は春樹に対して陰悪な態度をとり続けた恭子の現在の視点が挿入される点も、【小説】と異なっている⁶。

【映画】の冒頭、教師になって6年、母校の高校に国語教師として勤務して1年になる春樹は、老朽化のため取り壊されることになった図書館の蔵書整理を教頭から依頼され、気乗りがしない様子のまま引き受けざるをえなくなる。図書館に足を踏み入れた春樹は桜良と過ごした日々を思い返し、図書委員の男子生徒、栗山に桜良との思い出を語っていく。【映画】で桜良が初めて登場するのは、図書館に入った春樹の回想においてである。春樹が書架に並んだ書籍の背に貼られたラベルに指を這わせていると、突如「クイズ、135.5のサ」という桜良の声が聞こえてくる。続いて書架に並ぶ書籍のすき間から、タイトルと著者名を隠して1冊の本の表紙を掲げる彼女の姿が映し出され、小走りに通路の奥に向かった後に手前を振り向いて再び別の書架の背後に隠れる（04:25～04:40）⁷。ヒロインである桜良はこのようにして観客に紹介されるのだが、まずは【小説】には含まれていないこの場面の意義について考察してみたい。

第一に、これは図書館に足を踏み入れたことに触発されて春樹の脳裏に蘇った桜良の最初の姿と声であるという点で重要である。さらに、この場面の意義は、桜良が出すクイズの答えと密接にかかわっている。クイズの

答えは【映画】の中で明言されないが、映像で示される本の表紙ジャケットから、フランスの作家・思想家ジャン=ポール・サルトル (1905 - 1980年) の著作『実存主義とは何か』の邦訳書であることがわかる (サルトル 1976)。この書籍は、サルトルが 1945 年 10 月 29 日にパリで行なった講演をもとにして翌年に出版した『実存主義はヒューマニズムである』をはじめとして、サルトルの複数の文章を収録した日本独自の版である。分量・内容の両面からその中心を占める『実存主義はヒューマニズムである』(以下、『実存主義』と略記) は、第二次世界大戦直後の当時、ネガティブなイメージで見られていた「実存主義」というレッテルをサルトルが積極的に引き受け、自身の思想的立場を一般向けにわかりやすくマニフェストふうに説いた著作だが、その内容は『君の脾臓をたべたい』の【小説】と【映画】双方を読み解く手がかりとなっている。

III

『実存主義は』において、サルトルは人間という存在の真理として「実存は本質に先立つ」というテーゼを掲げている。たとえば、ペーパーナイフには封書や書籍の袋とじを開封するという性質があり、これはすべてのペーパーナイフに普遍的に妥当する「本質」である。ペーパーナイフはこの「本質」に即して製造され、現実の存在、すなわち「実存」となる。しかるに、神による人間の創造という観念が成り立たなくなった近代以降の

人間にはこのような「本質」を想定することができず、したがって「実存」が「本質」に先立つのである（サルトル 1976, p.39-42）。

このテーゼに照らして、春樹と桜良の人物像を考察してみよう。春樹は読書、とくに小説が好きで、図書委員として図書の整理に従事している。小説は著者によってストーリーが決められていて読むたびに変化するようなことはなく、図書の整理はあらかじめ定められた分類番号に従って行なわれる。つまり、春樹が好むのは固定化され、秩序立てられた世界であり、そこには刻々と移り変わる「実存」ではなく不変の「本質」への志向が伺える。このように「実存」ではなく「本質」を重視する傾向は、春樹の人間関係の築き方からもみてとれる。「名前を呼ばれた時に、僕はその人が僕をどう思ってるか想像するのが趣味なんだよ」（p.207）と述懐する春樹は、相手が自分に対して抱いているイメージを想像し、それを自分の本質規定として受け入れることにより、頭の中で人間関係を完結させようとしている⁸。桜良に「自己完結」と評される⁹この傾向にもやはり、「実存は本質に先立つ」ではなく、むしろ「本質は実存に先立つ」という原理との親近性が認められる。なお、人間が他者から「まなざし」を向けられ、評価されることによって個々の人間が持っている諸可能性を奪われ、特定の意識に固定されてしまう状況をサルトルは「他有化」と呼び、『実存主義は』に先立って1943年に刊行した彼の哲学的名著と目される『存在と無』第三部においてそのメカニズムを詳細に分析している（サルトル II 2007, p.92~218）。

他方、桜良は春樹と対照的に、人間関係を一定の状態に固定して一義的に把握することは不可能であり、そのように不確定な人間関係を結ぶこと

こそが生きることであるという見解を表明する。【小説】でも【映画】でも、入院中の桜良は、君にとって生きるとはどういうことかと春樹に問われ、次のように答える。

「自分たった一人じゃ、自分がいるって分からない。誰かを好きなのに誰かを嫌いな私、誰かと一緒にいて楽しいのに誰かと一緒にいて鬱陶しいと思う私、そういう人と私の関係が、他の人じゃない、私が生きてるってことだと思う」(p.223)。

「自分一人じゃ、生きてるってわからない。そう、好きなのに嫌い。楽しいのに鬱陶しい。そういうまどろこっしさが、人とかかわりが、あたしが生きてるって証明だと思う」(1:16:04～1:16:32)。

他者との関係におけるアンビバレンスにむしろ積極的な価値を認める桜良のこの発言は、固定された確実性を否定するという点で、「本質」ではなく「実存」を重視することと相通じている¹⁰。

さて、サルトルによれば、「実存は本質に先立つ」以上、人間はみずから主体的に生きる「自由そのもの」の存在である。だが、人間は自由と引き換えに「自分のなすこと一切について責任がある」のであり、これをサルトルは「人間は自由の刑に処せられている」と表現している(サルトル 1976, p.51)。

『実存主義は』の第二のポイントであるこの自由な選択と責任の関連性もまた、『君の臍臓をたべたい』に取り入れられている。桜良の家を訪ねた春樹は桜良との気まずいできごとの後、帰宅しようとするが、土砂降りの雨の中、桜良のモトカレである学級委員長とトラブルになり、殴られて路上に倒れてしまう。春樹を追って家の外に出た桜良が事態に気づき、血を流してずぶ濡れになった春樹を介抱して家に連れ戻す。病院で偶然出会った自分ではなく、君を本気で想ってくれる人と残り少ない人生を過ごしたほうがいいのではないかと春樹に、桜良は次のように応じる。

「違うよ。偶然じゃない。私達は、皆、自分で選んでここに来たの。君と私がクラスが一緒だったのも、あの日病院にいたのも、偶然じゃない。運命なんかでもない。君が今までしてきた選択と、私が今までしてきた選択が、私達を会わせたの。私達は、自分の意思で出会ったんだよ」(p. 197)。

「違う。違うよ。偶然じゃない。流されてもいない。私達はみんな、自分で選んでここに来たの。君と私が同じクラスだったのも、あの日病院にいたのも偶然じゃない。運命なんかでもない。君がしてきた選択と、私がしてきた選択が、私達を会わせたの。私達は、自分の意思で出会ったんだよ」(58:48～59:55)。

このやりとりがなされるのは【小説】では桜良の部屋、【映画】では玄関という相違はあるが、そこに至るまでのプロセスは共通であり、発言の趣旨も同一である。ここで桜良は運命あるいは必然も、偶然も否定し、春樹と自分の出会いが自由な意思による選択の結果であり、それゆえこの出会いに責任を負わねばならないと主張している。これに対し、桜良のこの発言を引き出した春樹の問いかけは、自由と引き換えに負わねばならない責任の放棄にほかならない。

さらに、人間は誰でも他者とともに世界に存在している。【小説】において桜良は次のように述べる。

「私の心があるのは、皆がいるから、私の体があるのは、皆が触ってくれるから。そうして形成された私は、今、生きてる。まだ、ここに生きてる。だから人が生きてることには意味があるんだよ」(p.223)。

したがって、人間が自由な主体として何らかの行動を選択する際には、必然的に他者をも関わり合いにすることになり、自分だけでなく他者に対する責任も担わねばならない。これが、「アンガジュマン」という『実存主義は』の第三のポイントである。「アンガジュマン」という語は一般に、政治的な活動や社会運動への参加という意味で用いられることが多いが、ここでは他者の生に主体的にコミットすることを意味している。桜良が春樹に、自分だけの世界に閉じこもるのではなく、他者ともっと会話を交わし、積

極的に関係を築く必要性を訴えるのは、この「アンガジュマン」の思想にかかわっている。

『君の膵臓をたべたい』は、春樹がサルトルの実存主義にもとづく人間関係のレッスンを桜良から受ける物語であると言っても極論ではないだろう。

IV

『君の膵臓をたべたい』のプロットの勘所が読者／観客の予想を裏切る桜良の死であることに、おそらく異論はあるまい。膵臓の病気のために余命を宣告されている桜良は、膵臓の病気ではなく通り魔による殺人の犠牲となって命を落とすのである。この展開は【小説】、【映画】、【アニメ】のすべてに共通である。ここにも、サルトルの実存主義哲学との密接な連関をよみとることができる。

サルトルは大著『存在と無』の第四部において、豊富な実例を交えて「死の不条理な性格」(サルトル III 2008, p.263)を論じている。それによれば、人間にとって死は生の終着点のような必然のできごとではなく、偶然的で突発的な事実であり、どのような死も、たとえ事前に宣告されていようとも、生に対する不測の決定的な妨害であるという。

「まさに、死の特徴は、それを何時何時^{いついつ}のこととして期待している人々を、期限以前に、つねに襲うことができるということである」。(サルトル III 2008, S.270)

この記述はまるで桜良の死を念頭に置いてなされたものであるかのよう
に思われるほど、『君の臍臓をたべたい』のプロットに即している。桜良が
臍臓の病気ではなく通り魔殺人によって命を落とすという展開は、たんに
意外性を狙ったアイデアというにとどまらず、実存主義的な死の不条理性
を可視化する装置となっている。

死がこのような性質のものである以上、死の時期や質の差異を取り沙汰
することに意味はない。【小説】においても【映画】においても、いつどの
ように死ぬかにかかわらず一日の価値は誰にとっても同じという認識が表
明されているのは¹¹、死をめぐるこのような洞察とかかわっているとみな
しうる。桜良の春樹への次の発言も同様である。

「どうせ君も死ぬんだよ。天国で会おうよ」(p.76)

「どうせいつかはみんな死ぬんだし、ほら、天国で会おうよ」(25:40～
25:46)

サルトルによれば、みずからの生を主体的に終わらせようとする自殺も、
死の不条理性を無効にすることはできない。行為の意味は将来のみが与え
ることができるのだが、自殺は将来をみずから断ってしまうからである。
したがって、「自殺は、私の人生を不条理なものなかに沈没させる一つの
不条理である」(サルトル III 2008, p. 280)。【小説】には、桜良が春樹と連
れ立ってホームセンターへ行き、自殺用にふさわしいロープを求めて店員
を困惑させるというエピソードが登場する。その際には、春樹も桜良の言

動に合わせて店員に向かって軽口をたたいている (p.35~38)。自殺を冗談の対象として軽視するようなこの扱いには、かえって意味のある自殺はありえないということを際立たせる効果があると言えるだろう。

「死は、あらゆる意味を人生から除き去ることしかできない」(サルトル III 2008, p. 280 傍点ママ)。死後において死者の人生に意味づけすることができるのは、他者しかいない。だが、それはもはや死者自身にとっての意味ではなく、他者にとっての意味である。これをサルトルは、人間が他者との関係において蒙らないわけにはいかない「他有化」のひとつのあり方と捉えている。生きている間は、他者の「まなざし」にさらされて「他有化」を蒙ったとしても、それを否定することは可能である。だが、死後は他者による「他有化」を否定したり拒んだりすることはできない。「死の事実は、(中略)他人の観点に究極の勝利を与える」(サルトル III 2008, p. 289 傍点ママ)。

このようにサルトルは死者の人生に対する他者による意味づけを冷徹に捉えているが、それは死後に残された人々にとって悲しみや喪失感を克服し、日常を回復して人生を送り続けるために重要なプロセスである。【小説】では、春樹は「共病文庫」に桜良が記していた彼女の遺書に従って、恭子と友達になろうとする。その努力は実を結び、桜良の死の1年後、春樹が恭子とともに桜良の墓参りをする場面で物語は幕を閉じる。【映画】では、「君、教師になりなよ (中略) だって教えるのうまいし」という入院中の桜良にかけられた言葉 (1:02:39~1:02:44) を受けて、春樹は実際に教師になっている。そして、桜良が隠していた遺書を12年ぶりに発見して目を通

すと、遺書に記された桜良の意向に従って、結婚式に臨もうとしている恭子を結婚式場に訪ね、恭子宛の桜良の遺書を渡すとともに「僕と友達になってもらえませんか」と声をかけて頭を下げ、恭子の同意を得る (1:43:00～1:46:05)。教師としての自信を失っていた春樹はこうして前向きな気持ちを取り戻し、用意していた退職願を破り捨てる (1:44:19～1:49:20)。このように【小説】でも【映画】でも、桜良の死後、春樹が彼女の死を自分なりに意味づけることによって変容・成長を果たす姿が描かれており、死後の「他有化」は肯定的なものとして捉えられている。

V

次に、【映画】における映像表現の特質に触れておこう。

第一に、先行研究 (藤津 2021) においてすでに指摘されているが、階段と桜良を組み合わせたショットの印象的な使用が挙げられる。IVで挙げた「どうせいつかはみんな死ぬんだし、ほら、天国で会おうよ」(25:40～25:46) という桜良の言葉は、「君はさ、本当に死ぬの？」という春樹の問いに続く二人のやりとりを締めくくっているが、校舎の屋上で展開されるこの場面で、桜良はゆっくりと塔屋の階段を上り、その最上部で青空を背景にこの言葉を発する一方、春樹は同じ場所にとどまって桜良を見上げている (24:31～26:00) (藤津 2021 p. 2)。階段が死＝昇天のイメージと結び付けられていることは明白である。それは、後半で恭子と春樹が同じ校舎の屋上で言葉を交わす際には、二人とも塔屋の階段を上らないことによって裏

打ちされる (1:06:05～1:07:34)。

階段は同時に、春樹と桜良の、生と死の埋めることのできない距離のメタファーにもなっている。Ⅲで挙げた桜良の家での場面において、病院で偶然出会った自分ではなく、君を本気で想ってくれる人といたほうがいいのではないかと口にする春樹は、玄関の土間に立っていて玄関に上がらないのに対し、春樹の言葉を否定して自分たちが出会ったのは二人の意思による選択の結果だと応じる桜良は、土間より一段高い玄関の上がり框に立っており、この場面の最後には玄関の奥にある階段の最下段に座る (58:27～59:55) (藤津 2021 p. 3～4)。ここでもやはり、階段は死=昇天および距離と関連づけられている。

階段は【映画】の末尾でも重要な役割を果たすように思われる。Ⅳで挙げた結婚式場の場面、タクシーでかけつけた春樹は、入口脇の階段に注意を向ける。その後、春樹は新郎の一晴¹²に連れられてウェディングドレスを身にまとい控室で待機している恭子のもとに向かうが、春樹が階段にしきりに注目していたことから、階段を上って恭子と対面することが暗示されている。階段によって隔てられた桜良に近づけなかった春樹が、最後には階段を上って恭子に近づくのだとすれば、これによって距離の克服が暗示されていると言えるだろう。

第二の特質は、背景が明るい逆光気味のショットの多用である。それらのショットにおける背景からの光には、今は亡き桜良および彼女の思い出を聖化する後光のような趣が認められ、またそれは桜良の人生の春樹による死後の「他有化」が融和的なものであることともかかわっているだろう。

第三に、【映画】には春樹と桜良をはじめとして二人の人物による対話の場面が多く含まれているが、それらに古典的な切り返しショットはあまり用いられていないことが挙げられる。同じ方向を向いて対話を交わす二人を正面あるいは背後からとらえたショット、どちらか一方を斜め前方からとらえたショット、あるいは切り返しショットに近い構図がとられて人物が静止していても、カメラがゆっくり動いていることが少なくない。こうした対話の描き方によって、正面からぶつかる論争という性格は薄れ、逆光気味のショットの多用と同様、ソフトで融和的なムードの醸成という効果をもたらしている。

VI

以上のように、『君の臍臓をたべたい』の作品世界は、サルトルの実存主義哲学に立脚して構成されている。【小説】では明示されていないこの思想的基盤を、【映画】では桜良が出すクイズとして顕在化させている。このようなアダプテーションは、類例のないユニークな試みであると評せるだろう。またこの作品では、死と生の絶対的な隔たり、および死後の他有化というサルトルの死生観を枠組みとして受け入れながら、死後の他有化を肯定的に捉えなおすことによって死と生の絶対的な隔たりの克服が試みられていると言えるが、【映画】は映像表現上の工夫によってこの試みを補強している。

なお、『君の臍臓をたべたい』における間テキスト性としては、サルトル

の実存主義哲学だけでなくサン＝テグジュペリの『星の王子さま』が重要である。『星の王子さま』はサルトルの実存主義哲学と対照的に【小説】【映画】【アニメ】のすべてにおいて作品名も明示されているが、その意味づけは三者三様である。この問題については、今回はほとんど触れることのできなかった【アニメ】の映像表現・技法の特質も含め、稿を改めて考察してみたい。

参考文献

A. 一次文献

- ・住野よる著『君の臍臓をたべたい』（文庫版）（双葉社、2017年）
- ・月川翔監督『君の臍臓をたべたい』（DVD）（東宝／博報堂 DY ミュージック&ピクチャーズ、2018年）
- ・J-P.サルトル著（伊吹武彦他訳）『実存主義とは何か』増補新装初版（人文書院、1996年）
- ・ジャン＝ポール・サルトル著（松浪信三郎訳）『存在と無 — 現象学的存在論の試み』全3巻（筑摩書房、I II：2007年、III：2008年）

B. 二次文献

- ・海老坂武著『実存主義とは何か — 希望と自由の哲学』（NHK出版、2020年）
- ・熊野純彦著『サルトル — 全世界を獲得するために』（講談社、2022年）

- ・滝口アキラ著『『君の臍臓をたべたい』 最大の謎は XX が一切登場しないこと！ その理由とは？』(2017年)
<https://cinema.ne.jp/article/detail/40092> (最終アクセス：2023年9月1日)
- ・土田知則著『他者の在処 — 住野よるの小説世界』(小鳥遊書房、2020年)、第1章『『君の臍臓をたべたい』 — 僕とは正反対の彼女』
- ・中所聖一著「サルトルにおける〈死〉と〈偶然〉のモラル」、関西大学フランス語フランス文学会編『仏語仏文学』20号(2003年)所収
- ・西貝怜著「分からない他者をめぐる名前の詩学 — 住野よる『君の臍臓をたべたい』論」、中央学院大学現代教養学部編『中央学院大学現代教養論叢』第5巻第2号(2023年)所収
- ・藤津亮太著『『天国で会おうよ』と『もっと人と接しなさい!』…アニメ『君の臍臓をたべたい』 “僕”と桜良はなぜ電柱の左側にいたのか』(2021年)
<https://bunshun.jp/articles/-/47324> (最終アクセス：2023年9月1日)
- ・堀田新五郎著「20世紀精神史における『実存』の境位」、奈良県立大学研究会編『奈良県立大学研究季報』第21巻(2010年)所収
- ・無署名「映画『君の臍臓をたべたい』は実存主義映画か？」(2018年)
<https://shkemok3.hatenablog.com/entry/2018/02/13/231001> (最終アクセス：2023年9月1日)
- ・無署名「映画『君の臍臓をたべたい』最後まで主人公の名前が出てこない理由は？ 初めのシーンに伏線…？ キミスイを深く考察！」(2020年)

<https://filmaga.filmmarks.com/articles/65587/>（最終アクセス：2023年9月1日）

- ・無署名『『君の臍臓をたべたい』ネタバレ！タイトルの意味とは？』（2023年）

<https://eigahitotobi.com/article/72306/>（最終アクセス：2023年9月1日）

-
- ¹ 本稿は、愛知文教大学人文学部における3,4年次必修科目「アカデミアゼミ」において筆者が2022/2023年度に担当した渡邊明日香さんの研究と、それに関して他のゼミ参加者を交えて行なったディスカッションに触発されたものである。渡邊さん、およびゼミ生のみなさんに感謝する。
 - ² 版元である双葉社のホームページには、「2016年年間ベストセラー」1位（単行本フィクション・日販調べ）、「2016年本屋大賞」2位、「2017年年間ベストセラー【文庫】第1位（出版販売会社調べ）などのデータが挙げられている。<https://www.futabasha.co.jp/introduction/2015/kimisui/>を参照（最終アクセス：2023年9月1日）。
 - ³ <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000328.000014531.html> を参照（最終アクセス：2023年9月1日）。
 - ⁴ とくに実写映画は興行収入35億2000万円を突破し、2017年の邦画実写2位を記録したという。<https://eiga.com/news/20200804/1/>を参照（最終アクセス：2023年9月1日）。
 - ⁵ 【小説】は1から10までの数字を付された章からなり、第1章の前にプロローグに相当する数字なしの章が置かれている。このうち、プロローグと第8章以降が桜良の死後にあてられており、プロローグは桜良の死の2日後、第8章は11日後、第9章は第8章の翌日、第10章は桜良の死の1年後に設定されているが、過去形と現在形を混在させる文体が【小説】全体に区別なく用いられていることもあり、春樹による語りの現在が正確にいつであるのかは必ずしも明確でない。
 - ⁶ やはり高校のクラスメイトであった一晴（【小説】では固有名なし。春樹と桜良との関係がクラスで取りざたされるようになってからも、他のクラスメイトと異なり当初から春樹にわだかまりなく接し、折に触れてガムを勧めてきた男子生徒）と結婚することになっている恭子が、街中で春樹の姿を目にしたたり、桜良が自分たちの結婚を祝福してくれるだろうかと一晴に問いかけたりする場面が挿入されている。

-
- 7 本稿では、【小説】および【映画】の該当箇所を示す際に、それぞれ参考文献 A に挙げた【小説】文庫版のページ数、あるいは【映画】の DVD の冒頭からのランニングタイムを本文中の括弧内に記す。
- 8 西貝 (2023) が詳述するように、【小説】では春樹のこのような傾向に即して、他者が春樹に対して用いる呼称に、当該人物が春樹に対して抱いていると春樹自身が想像するイメージに応じて、【仲良しくん】、【目立たないクラスメイト】といった特徴的な名前の表記法が用いられている。これに伴い、【小説】では春樹の氏名は第 8 章で明らかになるまで、不明にされている。なお、【映画】ではこのようなシステムはとられておらず、春樹の姓である志賀はすでに冒頭で示されている。
- 9 【映画】でも春樹は桜良に「自己完結」と評されるが、この評言を誘発する春樹の言葉は「僕は人に好かれようが、嫌われようが、気にしないし」であり (1:08:29~1:08:32)、【小説】とは異なる趣旨になっている。
- 10 【映画】では、桜良が整理した図書の分類番号がめちゃくちゃだと非難する春樹に、「がんばって探して見つけたほうが嬉しいでしょ、宝探しみたいで」と桜良が反論する場面が設けられ (13:46~13:59)、「実存」と「本質」をめぐる二人の志向の対照性が際立たされている。
- 11 【小説】では、「ねえ、君はさ (中略) 本当に死ぬの?」という春樹の問いかけに続く春樹と桜良のやりとりの後、物思いにふける春樹の口に出さない述懐として、誰もいつか死ぬようには見えないことがすなわち、「誰の今日の価値も同じということなのかもしれない」という認識が示される (p.74~76)。
【映画】では、残り少ない命を自分と一緒に過ごすのではなくもっと大切なことに使わなくてよいのかと問う春樹に対して、桜良は「そっちこそ、やりたいことしなくていいの? もしかしたら明日突然君が先に死ぬかもしれないのに」と答え、近くで起きた通り魔事件を報じる新聞の紙面を見せたうえで、「あたしも君も、一日の価値は一緒だよ」と一連のやりとりを締めくくる (14:12~14:33)。
- 12 注 6 を参照。

ヨーガ的身体論の資料:『六輪解説(Śaṭcakraṅirūpaṇa)』試訳(3)

遠藤 康

1. はじめに

本稿は、16世紀インド・ベンガル地方のシャクタ派タントラ行者ブールナーナンダ Pūrṇānanda (Avalon 1964, xiii-xiv) による『六輪解説(Śaṭcakraṅirūpaṇa)』をハタ・ヨーガ的身体論の資料とすべく試訳研究するものであり、既刊の拙稿「ヨーガ的身体論の資料:『六輪解説(Śaṭcakraṅirūpaṇa)』試訳(1)」(遠藤 2004)、『同(2)』(遠藤 2022)に続く。諸般の事情により研究は遅々として進まず、また筆者の理解がおぼつかない箇所も多々存する。またもや完結しない不完全な形ではあるが、続く部分を少しでも提示したい。

本稿でも既刊拙稿と同様、3種類の刊本を用いて作成したサンスクリットテキストを提示し、試訳を示す。使用したテキストは略号とともにあげる次の3種である。

- A *The Serpent Power: Being the Śaṭ-Cakra-Nirūpaṇa and Pādukā-Pañcaka*. Arther Avalon. 7th ed. Madras: Ganesh & Co., 1964.
- T *Shatchakra-Nirūpaṇa and Pādukāpanchaka* (Arthur Avalon ed., Tantrik texts vol.II). Ed. by Tārānātha Vidyāratna, revised by Pañchanāna Bhattāchārya. rpt. of 3rd ed. (Calcutta 1941, 1st Calcutta 1913). New Delhi: Aditya, 1987.
- C *Pūrṇānanda's Śrītatvacintāmaṇi*. Ed. by Bhuvanmohan Sankhyatirtha and Chintamani Bhattacharya. rpt. (1st, Calcutta 1936). Delhi, Motilal: 1994.

テキストの作成方針も既刊拙稿と同じく、A本を基本とし、適宜T本とC本による修正を加えた。異読は詩節テキストごとに注記し、注釈書の記述が異読検討の資料となる場合には併記したが、rya や rva を ryya や rvva とするなどの正書法上の違い、変則的サンディー表記および複合語

中に用いられるハイフン、引用符については注記していない。

注釈書と略号も、同じく次の通りである。

ŚAP Kālicarana 作 Ślokārthaparīṣkarnī.

ŚCBhT Śāṅkara 作 Śaṭcakrabhedatīpṇāṇī.

ŚCV Viśvanātha 作 Śaṭcakravivṛtti.

既刊拙稿(遠藤 2004, 69)でも記したように、これらの注釈書はいずれも上記 A 本、T 本に含まれ、また A 本は T 本初版(1913 年)に基づき作成されたとされるが(Avalon 1964, iv, Emeneu 1967, 307)、読みが異なる場合もある。異読注記および試訳注記の両方において、注釈書は、特に記さない場合 T 本のテキストを用いた。注釈書刊本の別を記す必要がある場合には、注釈書略号の後に(A)、(T)という刊本の略号を付記した。

試訳に際しては、既刊拙稿同様、Avalon の英訳を参照したが、注釈書、特に ŚAP にしたがった場合も多い。ŚAP の読解に際しても Avalon による英語抄訳を参照した。諸詩節の主題を明確にするため<…>として示した部分は T に記される主題区分である。本稿では、眉間にあるアージュニャー・チャクラ(ājñācakra)に関する残りの詩節である第 35～第 38 詩節と、アージュニャー・チャクラより上部にあるとされるマハーナーダに関する第 39 詩節までのテキストと試訳を示す。

2. 『六輪解説(Śaṭcakranirūpaṇa)』本文(vv.35-39)および試訳

<アージュニャー・チャクラに存する聖音オームの本質的形態(ājñācakrasthapraṇavasvarūpam) >

tadantaś cakre 'smin nivasati satataṃ śuddhabuddhyantarātmā¹

praḍīpābhajyotiḥ praṇavaviracanārūpavarnaṇaprakāśaḥ /

tadūrdhve candrārḍhas tadupari vilasadbīndurūpī makāras

tadūrdhve² nādo 'sau bala³-dhavalasudhādhārasaṃtānāhāsī // 35 //

1. C śuddhabuddhāntarātmā, ŚCV śuddhabuddhaḥ śuddhasvabhāvaḥ sa

cāsau antarātmā ceti saḥ. 2. C tadādye, ŚAP kecit tu tadādye nādo 'sāv
iti paṭhanti. 3. C rasa-, ŚCBhT jalasya jalakaṇṣasya dhavalāmṛtaśreṇir
iva hāso dīptir yasyeti sa tathā, ŚCV vanetyādīnā / vanam jalam tadvad
dhavalavarnaḥ yaś ca pīyūśādhāraś candraḥ tatsamūhahāsī tadadhikaśukla
iti bhāvah.

この輪においては、その〔三角形の〕内部に¹⁾、清浄な覚知である
内的アートマン (śuddhabuddhyantarātman)²⁾が、常に存している。〔そ
れは〕灯火の輝きのような光であり、聖音オーム (praṇava) を形成す
る形の字音の輝きである³⁾。その上部に半月 (candrardha) が、その上
に、輝く点 (bindu) の姿をした ma 字 (makāra) がある⁴⁾。その上部
に⁵⁾、あのナーダ (nāda)⁶⁾がある。〔それは〕風 (bala)⁷⁾の白色と甘
露の貯蔵所〔である月〕とから伸びる〔光〕を凌ぐ。(35)

<アージュニャー・チャクラにおける聖音オームのヨーガの説明 (ājñā-
cakre praṇavayoganirūpaṇam) >

iha sthāne līne susukhasadane cetasi puram
nirālambam baddhvā paramagurusevāsuvīditām /
tadabhyāsād¹ yogī pavanasuhrdām paśyati kaṇān²
tatas tanmadhyāntaḥ pravilasitarūpān api sadā³ // 36 //

1. C sadā 'bhyāsād, ŚCV sadābhyāsād. 2. C kalās, ŚCBhT kalām paśyati,
ŚCV kalāḥ paśyati. 3. C padān, ŚCBhT padān sthūlān rūpān paśyati.

ヨーガ行者は⁸⁾、最高の師への師事により良く理解された、〔認識〕
対象のない身体 (pur)⁹⁾を閉じた後、非常な安楽の居所であるこの場
所〔アージュニャー・チャクラ〕において、そ〔の聖音オーム〕の修
習によって意識が〔聖音に〕溶け入る場合、その後、そ〔の聖音オ
ームの基体である三角形〕の内部の中間〔すなわち空間〕に、風を友
人とし輝きを放つ姿である火花を、常に見る。(36)

<アージュニャー・チャクラにおけるパラマシヴァ神の存在描写 (ājñā-
cakre paramaśivasthitivarṇanam) >

jvaladdīpākāraṃ¹ tad anu ca navīnārkabahula-
prakāśaṃ jyotir vā gaganadharaṇīmadhyamilitam /
iha sthāne sāksād bhavati bhagavān pūrṇavibhavo²
vyayaḥ sāksī vahneḥ śaśimhirayo³ maṇḍala iva⁴ // 37 //

1. ṢCBhT jvaladdīpākārān iti.
2. T pūrṇavibhavo.
3. T śaśimhirayo.
4. ṢCBhT vahni-śaśi-mihirāṇāṃ maṇḍalam iva prakāśate, ṢCV ity ata āha
-- rāhur iti / yathā ambaragato rāhur na drśyate kintu śaśisūryayo
maṇḍalam eva drśyate.

そして〔ヨーガ行者は、火花を見た〕その後¹⁰⁾、新しい〔朝の〕
太陽ように多くの輝きを持ち、空と地との中間に起こる、〔すなわち
ムーラーダーラ・チャクラからサハスラーラ・チャクラまでの間にあ
る¹¹⁾〕燃えている灯火の形の光をもまた見る。この場所において、
〔サハスラーラ・チャクラにある〕火と月と太陽の領域においてと同
様に¹²⁾、不滅であり、〔すべてのものの〕目撃者である、力に満ちた
聖なるお方〔パラマシヴァ神〕¹³⁾が、顕現する。(37)

<アージュニャー・チャクラにおけるヨーガにより氣息を捨てること¹⁴⁾

の結果 (ājñācakre yogena prāṇatyāgaphalam) >
iha sthāne viṣṇor atulaparamāmodamadhure
samāropya prāṇaṃ¹ pramuditamanāḥ prāṇanidhane /
paraṃ nityaṃ devaṃ puruṣaṃ ajaṃ ādyaṃ trijagatāṃ
purāṇaṃ yogīndraḥ praviśati ca vedāntaviditam² // 38 //

1. C, ṢCBhT prāṇāṇ.
2. ṢCBhT vedāntavihitam.

氣息が停止した時 (prāṇanidhane) 〔すなわち死の時〕¹⁵⁾、こころ喜
ばしくある (pramuditamanas) 優れたヨーガ行者 (yogīndra) は¹⁶⁾、こ
〔のアージュニャー・チャクラ〕にあるヴィシュヌ神 (viṣṇu) ¹⁷⁾の無

比で最高な甘い歓喜の場所に、氣息（prāṇa）を上昇させ（samārop-ya）¹⁸⁾、永遠で神祕的¹⁹⁾であり、不生にして〔地・中間・天という〕三世界（trijagat）²⁰⁾の始源（ādyā）であり、〔また〕原初のものであり²¹⁾、そしてヴェーダーンタ〔すなわち天啓聖典〕により知られる、至高（para）のプルシャ（puruṣa）に入る²²⁾。

＜アージュニャー・チャクラの上に、マハーナーダ²³⁾を見ることの結果
（ājñācakrordhve mahānādarśanaphalam）＞

layasthānaṃ vāyos tadupari ca mahānādarūpaṃ¹ śivārdhaṃ
sirākāraṃ² śāntaṃ varadam abhayaṃ³ śuddhabuddhiprakāśam /
yadā yogī paśyed gurucarāṇayugāmbhojasevāsuśīlas
tadā vācāṃ siddhiḥ karakamalatale⁴ tasya bhūyāt sadaiva // 39 //

1. ŚCV mahānandam ityādinā / mahān ānando yatra taṃ mahānandasva-
rūpaṃ. 2. C śivākāraṃ, ŚAP athavā śivākāraṃ iti. 3. ŚAP abhaya-
varadam. 4. C karatalakamale.

そして²⁴⁾そ〔のアージュニャー・チャクラ〕の上に²⁵⁾、氣息の帰滅の場所（layasthāna）²⁶⁾であり、シヴァ神の半身〔であるシャクティの姿であり〕（śivarddha）²⁷⁾、犁の形をして（sirākāra）²⁸⁾ ²⁹⁾、静寂で、望みを叶え（varada）畏れを無くし³⁰⁾、清浄な覚知の輝きを持つ、マハーナーダの姿（mahānādarūpa）を、師の蓮華の如き両の御足への崇拜によって優れた行いを有するヨーガ行者が見るであろう時、その時には、彼〔のヨーガ行者〕の蓮華のような手のひらにおいて、言葉の成就（vācāṃ siddhiḥ）³¹⁾が、必ず常に、あるだろう。（39）

（未完）

注

- 1) ŚAP: asmin cakre tadantas tasya pūrvoktatrikoṇasyāntaḥ madhye* [p.38, 1.21], * ŚAP(T) pūrvoktatrikoṇasyāntamadhye を ŚAP(A)により修正,

(「その内部に (tadantas)」、すなわち「その」とは前に述べられた三角形であり、[その] 内部に、つまり中央に。).

- 2) ŚAP は śuddhabuddhyantarātmā の語を注釈していないが、ŚCV を参考にして「清浄な覚知である内的アートマン」と訳した。ŚCV が注した詩節テキストは śuddhabuddhāntarātmā であつたと思われるが、ŚCV は śuddhabuddha と antarātman を同じものと解釈している： antāntarātmā astīty āha — śuddhabuddhetyādinā / śuddhabuddhaḥ śuddhasvabhāvaḥ sa cāsau antarātmā ceti saḥ / [p.89, ll.21-22], (内的アートマンがあるということ。「清浄で覚醒しており (śuddhabuddha)」などにより [詩節作者は述べる]。「清浄で覚醒している」とは清浄な本質であり、それでありそしてこの「内的アートマン」であるというのがそれなのである。). ŚCBhT は śuddhabuddhyantarātman を「清浄な覚知を持つ者の内的アートマン」と読む： śuddhabuddhīnām antarātmasvarūpaḥ / yad vā śuddhair janair* avagato 'ntarātmā asya / [p.38, l.28-p.39, l.23], * ŚCBhT(T) śuddhajjanair を(A)により修正, ([オームの形の文字の輝きは、) 清浄な覚知を持つ者たちの (śuddhabuddhīnām) 内的アートマンという本質を持つ。あるいは、清浄な人たちにより獲得された内的アートマンが、これの [姿] である。). しかし、内的アートマンがあるのは清浄な人だけであるとも思われないので、「清浄な覚知である内的アートマン」とした。Gupta は、アージュニャー・チャクラの中の三角形内部には、炎として視覚化される純粋な知性 (pure intelligence) があるとするが (Gupta 1979, 174)、ここに述べられる śuddhabuddhi がそれなのかもしれない。ただし、詩節 39 では、マハーナーダ (mahānāda) も、清浄な覚知の輝きを持つ (śuddhabuddhiprakāśa) と述べられる。
- 3) ŚAP: asmin cakre tadantas tasya pūrvoktatrikonasyāntaḥ madhye* yaḥ praṇavaviracanārūpavarnaprakāśaḥ praṇavasya viracanārūpenā 'kārokārayoḥ sandhiyogena yas trayodaśasvarasadrśavarnaprakāśaḥ satataṃ nivasati sa śuddhabuddhyantarātmā ity anvayaḥ / [p.38, l.21-p.39, l.7], * ŚAP(T) pūrv-

ktatrikoṇṣyāntamadhye を ŚAP(A) により修正, (「この」「輪においては」、「その内部に」、すなわち「その」とは前に述べられた三角形であり、〔その〕内部に、つまり中央に、「聖音オームを形成する形の字音の輝き (praṇavaviracānārūpavarṇaprakāśa)」が、すなわち聖音オームを形成するものとして、a 音 (akāra) と u 音 (ukāra) の連声結合による (sandhiyogena) 第 13 母音 [au 音の字] に似た文字の輝きが、「常に存している」のであり、それは「清浄な覚知を持つ者の内的なアートマン (śuddhabuddhyantarātman) なのである」。以上が〔詩節の語の〕 連関である。).

- 4) 「輝く点 (bindu) の姿をした ma 字」とは鼻音化符号である半月点の点である (Avalon 1964, 403, note1 参照)。ŚAP: tadurdhve candrārddhas tadupari vilasadbindurūpī makāra iti / tena tādr̥ṣavarṇopari arddhacandrabinduyogena prakṛtapraṇavasvarūpaḥ* paryavasyati / [p.39, ll.8-10], * ŚAP(A) prakṛtapraṇvasya rūpaḥ, (「その上部に半月が、その上に、輝く点 (bindu) の姿をした ma 字 (makāra) がある」と。それ故に、そ〔の第 13 母音文字〕に似た文字の上部に、半月と点を配置することにより、真の聖音オームの本質的形態 (prakṛtapraṇavasvarūpa) が完成するのである。).
- 5) ŚAP: kecit tu tadādye nādo 'sāv iti paṭhanti, tadādye bindurūpimakārasyādye*¹ iti vyākhyāyanti ca / tad asat / “tadupari vilasadbindurūpī makāra” ity anena makārādye nādaprapṛtau punas tadupādānaṃ vyartham syāt / paran tv asau nādaḥ praṇavaghaṭakībhūtanādātirikto bhidyamānaparabindor avayava-viśeṣaḥ praṇavordhve varttate / [p.39, ll.13-16], *¹ ŚAP(A) bindurūpī makārasyādye, (しかし、ある者たちは〔その上部に、あのナーダがある〕ではなく、)、「その先頭に、あのナーダがある (tadādye nādo 'sau)」と読み、「その先頭に」とは点 (ビンドゥ) の姿をした ma 字の先頭にであると (bindurūpimakārasyādye iti) 説明する*²。それは正しくない。「その上に、輝く点の姿をしたマ字がある」というこ〔の文〕が

〔詩節で既に述べられている〕から、ma 字の先頭でナーダが得られるのであれば、再びそ〔のナーダ〕に言及するのは、不適切になろう。しかしながら、あのナーダは、聖音オームの部分構成するナーダとは異なっており、分離されている至高のビンドウ (bhidyamāna-parabindu) の特殊な部分 (avayavaviśeṣa) として、聖音オームの上にあるのである。)*² 名詞 ādya の処格 ādye の意味を正確には理解できなかったが、Avalon (1964, 403) は「～の下に」と解している。

- 6) ŚAP: tadurdhve nādo 'sāv iti praṇavordhve 'vāntaranādo 'stīti / [p.39, l.10], 「その上部に、あのナーダ (nāda) がある」とは、聖音オームの上部に中間的なナーダ (avāntaranāda) が存するという意味である。。「中間的なナーダ」の意味はよく理解できないが、後の第 39 詩節で言及されるマハーナーダ (mahānāda) と比較すれば、宇宙開展の次元において下位のナーダであることが述べられていると思われる。後注 23 参照。ŚCBhT: etena ājñākhyapadmasyopari praṇavaprakārasiddhiḥ, tasyopari asau nādo vakrākṛtiḥ / [p.39, ll.24-25], (これにより、アジュニヤーという蓮華の上の、聖音オームの様態が成立する。その上に、曲がった形の (vakrākṛti) 「あのナーダがある」。).

ナーダ (nāda) とは音、音の響きという意味の言葉であるが、詩節においては直前に言及され点・滴を意味する語ビンドウ (bindu) とともに、Hoens によって次のように説明される。タントリズムは物質的な宇宙開展が音声的次元での開展と対応すると考える。この開展の最初の段階は、聖音オーム (Om) の根源的構成要素により説明される。その構成要素の一つがナーダであり、Andre Padoux の *Palore* (p.51) によれば、これは最初の音の共鳴、純粹な音声エネルギーの極めて微細な状態である。これはシヴァ神から放射されるとする文献もあるが、後代のテキストは、通常、シヴァとの接触によりシャクティから出るとする。次の構成要素がビンドウである。これは純粹で根源的な発話 (pure primordial speech) の、極度に凝縮された「滴」であ

り、点または満月で象徴される。ビンドウとナーダは、音声・発話の開展と実在の開展にとっての決定的要素として、通常組み合わせで扱われる。しかしこの主題は、文献の叙述や研究者の理解に相違があり、ややこしい (Hoens 1979, 93-94)。

また、クンダリーニを上昇させるヨーガとは、宇宙の根源的原因から諸原理が開展分化し、その結果として現象化した自身を、開展とは逆のプロセスをたどって分化を解消し、根源的原因へ回帰させようとする実践なのであるが、Gupta はこの回帰過程が、アージュニユー・チャクラに関する微細な音声の次元では、昇順に配置された鼻音 (anusvāra)、反響を表示する三日月 (ardhacandra)、Rodhinī または Bodhinī という bindu、そして nāda により表現されると説明している (Gupta 1979, 177)。

- 7) baladhavala を baladevasya dhavalam と注釈する ŚAP にしたがって、bala を風 (baladeva) と訳した。Monier-Williams のサンスクリット語辞典によれば baladeva は、ヴィシュヌ神の白髪から生まれたとされる、クリシュナの兄の名前でもある。詩節テキストの注に示すように、この bala-の個所には、rasa-の他に jala-, や vana- など、白色を形容する数種の語としての異読がありそうである。
- 8) ŚAP は、この詩節をヨーガ実践を示すものとして以下のように説明する: yogī janah puram baddhvā kutukenā 'ntahpuram samrudhya tatprakāreṇā 'ntahpurarodhakāraṇībhūtayonimudrām baddhveti yāvat / tena puḥśabdena*¹ yonimudrā lakṣyate / tanmudrām baddhvā iha sthāne ājñācakre tad-abhyāsāt tasya praṇavasya punaḥ punaś cintanāt tatra cetasi praṇavacaturdikṣu līne sati tatas tadanantaram tanmadhyāntaḥ praṇavādhāratrikonaṃmadhye antar antarikṣe pavanasuhrdām vahnīnām kaṇān vahnikaṇavajjyotiḥsphulingān paśyati, teṣām mānasapratyakṣo bhavatiṭy arthaḥ / atra purabandhanaṃ vinā manasaḥ śuddhasthairyaṃ na sambhavaṭy ataḥ puram baddhveti uktam / [p.39, 1.21-p.40, 1.7], *¹ ŚAP(A) pūḥśabdena, (「ヨーガ行者」である人

は、「身体 (pur) を」「閉じた後 (baddhvā)」、すなわち、熱意を持って内的な身体 (antaḥpur) を抑制してから (saṃrudhya)、〔つまり〕その方法により、内的な身体 (pura) を抑制する原因となるヨーニ・ムドラーを行なってから (baddhvā)、というほどの意味である。その〔城砦の意味をも持つ〕「身体 (pur)」という語により、ヨーニ・ムドラーが間接的に示されるのである (lakṣyate)。そのムドラーを行ってから、「この場所において」、アージュニャー・チャクラにおいて、「その修習により」、すなわち、その聖音オームを何度も何度も瞑想することにより、「意識 (cetas) が」そこに、聖音オームの四方に、「溶け入る場合」、「その後」、その直後に、「その内部の中間に (tanmadhyāntar)」、つまり聖音オームの基体である三角形の内部にある「中間に」、空間に、「風を友人とする (pavanasuhṛda)」、火の「火花 (kaṇa) を」、すなわち火花の如き光のきらめきを「見る」。それら〔の火花〕に対して、〔眼ではなく〕意による直接知覚が生じる、という意味である。ここでは、身体 (pura) の抑制なしでは意の清浄な安定状態は生じないというこの理由で、「身体を」「閉じてから」と述べられたのである。). ŚAP: athavā puram khecarīmudrām baddhvetv arthaḥ / tayāpi*² manasṭhairyam bhavati / [p.40, ll.18-19], *² ŚAP(A) tathāpi, (あるいは、「城砦〔すなわち身体〕に (puram)」「ケーチャリー・ムドラーを「行なってから (baddhvā)」という意味である。それによっても意の安定が生まれる。).

- 9) ŚAP は nirālamba-pur を次のように注釈する： puram kimbhūtām ? nirālambām nirgato 'valambo manaso viṣayasambandho yayā tādr̥śīm ity arthaḥ / [p.41, ll.8-9], (どのような「身体 (pur) を」というのであるのか？「対象のない (nirālamba) 〔身体〕を」である。それによって (yayā)*¹、対象 (avalamba) が、つまり意の認識対象との結合が、無くなった (nirgata) という、そのような〔身体〕をという意味である。), *¹ 一応訳文は付したが、yayā という具格が何を意味しているのか筆者にはよく

理解できなかった。一方、*ŚCV* は *nirālamba* を特定のムドラーの名称とする： *nirālambām iti tadvakṣyamāṇām / ṭīkākāradhṛtatantre — tyajet śaithilyam āngānām nāsāgre ropayed dṛsau / mukhaṃ vivṛṇuyāt kiñcid dantair dantān na saṃspr̥šet // rasanām antarā kuryād anaṅge dhārayen manaḥ / iyaṃ sā paramā mudrā nirālambeti pañcamī // iti // iha sthāne*^{*2} *evaṃ mudrām baddhvā sadābhyāsād dhṛtapavanāt pavanasuhṛdām vahnīnām kalāḥ paśyati /* [p.90, l.30-p.91, l.5], ^{*2} *ŚCV(A)* *iha iti / iha sthāne*, (「〔認識〕対象のない〔城砦すなわち身体〕を」とは、注釈者が保持するタントラ (*ṭīkākāradhṛtatantra*) ^{*3}において述べられるであろうそれを〔ということ〕である。「四肢の緩みを捨てるべし、両の視線を鼻先に置くべし、顔を少し見せるべし、歯で歯に触れぬようにすべし、舌を内部にあるようにすべし、空間 (*anaṅga*) において意を瞑想すべし。これが、その最高のムドラーであるニラーランバーという第 5 である」と。〔ヨーガ行者は〕「この場所において」このようにムドラーを行い、「常に」氣息を保持した「修習をすることから」、「風を友人とする」火の「小部分を」見る。), ^{*3} *ṭīkākāradhṛtatantra* とは、*ŚCV* の作者 *Viśvanātha* が所持するなんらかのタントラ文献を指すと推察したが、正確には理解できなかった。

- 10) *ŚAP: tad anu vahnikaṇadarśanam anu darśanānantaram jyotiḥ paśyatīty arthaḥ /* [p.41, l.15], (「その後に (*tad anu*)」とは火花を見ることの後にということであり、〔その〕視覚の直後に「光を」〔ヨーガ行者は〕見るという意味である。)
- 11) *ŚAP: gaganadharaṇīmadhyamilitam iti / gaganam “tadūrdhve śāṅkhinyā nivasati śikhare śūnyadeśe prakāśam” ity anena pradārśitaśāṅkhinīnāḍyūrdhvasūnyarūpagaganam dharaṇī mūlādhārasthadharāmaṇḍalam tadubhayor madhyamilitam, mūlādhārādisahasrāraparyantavyāptam jyotir iti viśiṣṭārthaḥ /* [p.41, ll.16-18], ^{*} *ŚAP(A)* *vikāśam*, (「空と地との中間に集まった (*gaganadharaṇīmadhyamilita*)」と〔述べられる〕。「空 (*gagana*)」と

は、「それらの上部、シャンキニー脈管の頂点の空虚な場所に、〔千枚の花弁を持ち〕輝く〔蓮華が〕存する(Śaṭcakranirūpaṇa 40)」というこ〔の詩節〕によって説示されたシャンキニー脈管の上の空虚な空間である。「地(dharaṇī)」とはムーラーダーラ〔・チャクラ〕(mūlā-dhāra)にある地の領域(dharāmaṇḍala)である。それら両者の「中間に起こる」、すなわち〔根底部の〕ムーラーダーラ〔・チャクラ〕から〔頭頂部の〕サハスラーラ〔・チャクラ〕まで広がり存する光であるというのが、詳述された意味である。). ŚCBhT: tatraiva gagana-dharaṇībījayor madhye sthitam jyotir āste / gaganadharaṇīmaṇḍalayor antaḥ-sthitam tadbījam iti yāvat / [p.41, ll.23-24], (まさにそこにおいて、空と地の二つの種子の中間に、存在する光がある。その種子は、空と地の領域の内部に存在するというほどの意味である。).

- 12) 「火と月と太陽の領域においてと同様に」と訳したこの箇所は、テキストの異読注記に記したように注釈書が用いたテキストの読みが異なる可能性があるが、T本、A本、C本ともに maṇḍala iva とする点では相違がない。ここではその読みで注釈を行う ŚAP にしたがって、サハスラーラ・チャクラにある火・月・太陽の領域においてと同様に、と解した。ŚAP: ājñācakre sahasrāravat paramaśivasthitim āha - iha sthāna iti / [p.41, l.20], (アージュニヤー・チャクラに、サハスラーラ〔・チャクラ〕と同様に、パラマシヴァ神が存在することを〔作者は〕述べる、「この場所において」と。), drṣṭāntam āha — vahner ityādi / yathā 'rkendvagnimaṇḍale bhagavān vartate tathā 'trāpīty arthaḥ / arkādi-maṇḍale bhagavato 'vasthānaṃ prasiddham / yad vā — vahni-śaśi-mihira-maṇḍale sahasrakamalasthārkendvagnimaṇḍale yathā caṇakākāreṇa bhagavān vartate tadvad atrāpīti / sahasradale 'rkendvagnimaṇḍalāni*¹ pradarśayīsyante / [p.42, ll.24-27], *¹ ŚAP(A) sahasrakamalasthārkendvagnimaṇḍalāni, (〔作者は〕喩例を述べる、「火の」と。太陽と月と火の領域に聖なるお方が存在するように、同様にここにもまたいる、という意味である。

太陽などの領域に聖なるお方がいることは確立している。あるいは、火と月と太陽の領域に、〔すなわち〕千〔の花弁を持つ〕蓮華に存する太陽と月と火の領域に、ひよこ豆の様相で聖なるお方が存在するように、そのようにここにもまた〔存する〕ということである。千の花弁を持つ〔蓮華〕における太陽と月と火の領域を、我々は後に説明するであろう。). *ŚCBhT*: vahni-śāsi-mihirāṇām maṇḍalam iva prakāśate, atyarthatejomayatvāt [p.41, ll.26-27], ([そのお方は] あたかも火と月と太陽の領域のように輝く。途方もない光からなるからである。). *ŚCV*: nanu sarvavyāpītvād aparicchinnasya īśvarasya katham paricchitti-sthāne*2 abhivyaktir ity ata āha — rāhur iti / yathā ambaragato rāhur na drśyate kintu śāsisūryayor maṇḍalam eva drśyate tathāyaṃ cidātmā evambhūtakarmaviśeṣakaraṇād atraiva sāksād bhavati / [p.91, ll.8-10], *2 *ŚCV*(A) paricchinnasthāne, ([反論] すべてに偏在するものだから限定されていない自在神に関して、いかにして〔あるもの〕 限定された部分である場所における顕現があるのか。〔答論〕それゆえに〔作者は述べるのである、〕「ラーフの」と。空を移動するラーフは見えないが、月と太陽の円盤だけが見えるように、同様にこの精神を自体とする〔自在神〕は、そ〔の月と太陽〕のような優れた行いをなすので、まさにここにおいて「顕現する」のである)。

- 13) 「聖なるお方 (bhagavat)」を明確にパラマシヴァ神 (paramaśiva, 至高のシヴァ) と表現するのは、3種の注釈書のうち *ŚAP* だけであり、*ŚCBhT* は bhagavat と述べるのみ、*ŚCV* は īśvara と言い換える。なお、C 本に含まれる校訂者の注釈でもパラマシヴァ神とされ、Gupta (1979, 174) もアージュニャー・チャクラ上部のこの場所にはパラマシヴァ神がいると説明する。 *ŚAP*: ājñācakre sahasrāravat paramaśiva sthitim āha — iha sthāna iti / bhagavān paramaśivaḥ iha sthāne sāksād bhavati svayaṃ varttata ity arthaḥ / bhagavantam viśeṣayati — pūrṇavibhava ityādi / pūrṇaḥ svātmani paripūrṇaḥ sṛṣṭikartṛtvādyāśeṣayogyatārūpavibhavo yasyety

arthah / athavā vibhavo 'nantasṛṣṭiprapaṅcasamudāyah, pūrṇaḥ sarvavyāpakatvena sthitas tādrśo vibhavo*¹ yasmād ity arthaḥ / “yato vā imāni bhūtāni jāyante yena jātāni jīvanti yat prayanty abhisamvīsanti” ti śruteḥ / yad vā — vibhavo vibhutvaṃ, pūrṇaḥ sarvavyāpakatvena sthitas tādrśo vibhavo yasyety arthaḥ / yad vā — pūrṇatvaṃ phalānupahitaviṣayitānāspadecchākatvaṃ tādrśo vibhavo yasyeti nigūḍham / ātmātirikta-vastūnām anityatvād ākāśādīnām vibhutvaṃ na sarvakālavāpakam iti viśeṣaḥ / [p.41, l.20-p.42, l.8], *¹ ŚAP(A) tādrśavibhavo, (アージュニャー・チャクラに、サハスラーラ〔・チャクラ〕と同様に、パラマシヴァ神が存在することを〔作者は〕述べる、「この場所において」と。「聖なるお方」、パラマシヴァ神が、「この場所において」「顕現する (sākṣād bhavati)」、自ら存在しているという意味である。聖なるお方を詳述する、「力に満ちた (pūrṇavibhava)」と。自己の本質において、宇宙創造者性に始まる全ての能力*² という形での力 (vibhava) が「満ちている」、完全に満ちている、そういうお方という意味である。あるいは「vibhava」とは、無限である宇宙創造と多数の現象世界展開であり、〔それは〕全てに広がるものとして存在する、「満ちている」、そのような「世界展開 (vibhava)」が、そ〔のお方〕からあるという意味である。「あるいは、そこからこれらの諸存在が生まれ、それにより諸生類が生き、それに入り没入するというもの」(Taittirīya-upaniṣad 3.1) という天啓聖典から〔知られる〕。あるいは、「vibhava」とは偏在すること (vibhuta) であり、〔それは〕全てに広がるものとして存在する、「満ちている」、そのような「偏在 (vibhava)」がそ〔のお方〕にあるという意味である。あるいは、満ちていること (pūrṇatva) とは、結果と関わらず、また認識主体の地位を希求しないこと (phalānupahitaviṣayitānāspadecchākatva) であり*³、そのような「力 (vibhava)」がそ〔のお方〕にあるというのが、隠された〔意味〕(nigūḍha) である。アートマンと異なっている諸事物は無常なのだから、虚空などが持つ偏在性は、

全ての時間に拡がるものではない。これが〔聖なるお方との〕違いである。)*² Avalon (1964, 408)によれば、宇宙に関する創造者性・維持者性・破壊者性という力である。)*³ 意味がよく理解できないが、Avalon は、その願望が結果によって揺り動かされない者、いかなる目的にも執着せず、そのあり方は我々には測り知れない者、限定（マーヤー）に従属しない者と説明する (Avalon 1964, 408 n.3.)。ŚAPはこの後、『ニルヴァーナ・タントラ』を教証としてアージュニャー・チャクラにパラマシヴァ神が存することを述べ、さらにその形態はシヴァ神とシャクティ女神が半月点 (candrabindu) の点であることを、次のように述べる： atrānyoḥ śivaśaktyor māyābandhanācchādanena makārātmārūpaparambindurūpeṇa*⁴ sthitir bodhyā / tad uktam ājñācakram upakramya — utkalādimate 'traiva caṇakākārarūpiṇī / sṛṣṭiṃ karoti bhūtāni atra sthitvā sanātānī // iti / atra caṇakākārarūpaḥ paramaśivaḥ sadā vartate / utkalādimate tu — atra sthitvā sṛṣṭiṃ karotīty arthaḥ / [p.42, ll.18-23],

*⁴ ŚAP(A) -parabindurūpeṇa, (ここでは、これらシヴァとシャクティ両者は、マーヤーの束縛による覆いである、ma 字の形を持つ最上の点（ビンドゥ）の姿で存在していると理解されねばならない。それが、アージュニャー・チャクラ〔の説明〕を開始した後に、述べられた。ウトカラ等の考えでは、まさにここで静止した後に、ひよこ豆の形の姿である永遠の女神 (sanātānī) が、創造を行う、諸存在を〔作る〕、と。ここには、ひよこ豆の形でのパラマシヴァ神が常に存在している。一方、ウトカラ等の考えにおいては*⁵、ここで静止した後に創造を行うのだ、という意味である。)*⁵ 出典および utkala が何者なのかはわからなかった。Avalon も、二つの部分が固く結びついているひよこ豆は合一したシヴァとシャクティの比喩的形象であり、その殻がマーヤーを象徴すると解説する (Avalon 1964, 35)。

- 14) prāṇatyāga は「死」をも意味し得る (Apte 1957, 1127, Monier-Williams 1899, 705)。

- 15) ŚAP は prāṇanidhane を「氣息が無くなる時 (prāṇaviyogakāle)」と注するが(次注 16 参照)、この prāṇaviyoga にも死の意味がある (Apte 1957, 1128)。ŚCV は、prāṇanidhane を「死の時 (maraṇakāle)」と注する。Avalon (1964, 411) も「死の時 (at the time of death)」と訳す。
- 16) ŚAP は詩節の要旨を次のように述べる: asyārthaḥ — yogīndro janaḥ prāṇanidhane prāṇaviyogakāle pramuditamanā ātmānandena hr̥ṣṭacittaḥ san iha ājñācakre viṣṇor bhagavataḥ sthāne upadarśitabindurūpe prāṇaṃ samāropya athavā tadbindau prāṇaṃ samāropya prāṇanidhane sati paraṃ puruṣaṃ praviśatīty anvitārthaḥ / [p.43, ll.6-9], (次の意味である。「優れたヨーガ行者 (yogīndra)」であり、「氣息が停止した時 (prāṇanidhane)」、つまり氣息が無くなり〔死ぬ〕時 (prāṇaviyogakāle)、「こころ喜ばしく (pramuditamanas)」、自我に関する喜び (ātmānanda) によって心が歓喜しつつある人は、「ここにおける (iha)」、アージュニャー・チャクラにおける「ヴィシュヌ神の」、つまり聖なるお方 (bhagavat) の「場所に (sthāne)」、すなわち既に教示された点の姿を持つもの (bindurūpa) に、「氣息を」「上昇させ (samāropya)」、あるいは、その点 (bindu) に「氣息を」「上昇させ」、「氣息が停止した」〔すなわち死んだ〕時、「至高の」「プルシャに」「入る」。以上が、〔語を〕連関させた意味である。)。ŚCBhT は次のように述べる: viṣṇor atulaparamāmoda-madhure iha sthāne yogī prāṇaviyogasamayē* prāṇān manas ca samāropya prakṛṣṭamuditamanāḥ san paraṃ puruṣaṃ eva praviśati / nirvāṇamuktīm prāpnotīti śeṣaḥ / [p.43, ll.24-26], *ŚCBhT(T) prāṇaviyogasamayēyogasamayē を(A)により修正, («ヴィシュヌ神の」「無比で最高な甘い歓喜の」「この」「場所に」、ヨーガ行者は、氣息が無くなる時に、「氣息を」そして意 (manas) を「上昇させ」、非常にこころ喜ばしくありつつ、他ならぬ「至高の」「プルシャに」「入る」。〔そして〕涅槃である解脱 (nirvāṇamukti) を獲得すると補完される。))。
- 17) 前注 16 に記したように、ŚAP は、「ヴィシュヌ神」を「聖なるお方

(bhagavat)」と注釈する。その神格の「場所 (sthāna)」は「既に教示された点の姿を持つもの (upadarsītabindurūpa)」と説明するので、これは第 35 詩節に述べられる、アージュニヤー・チャクラ内部の三角形の上にある聖音オームの鼻音化符半月点 (candrabindu) 部分の点と解される。また、第 37 詩節に対する ŚAP は、注 13 で示したように「これらシヴァとシャクティ両者は、マーヤーの束縛による覆いである、ma 字の形を持つ最上の点の姿で存在している (anayoḥ śivaśaktyor māyābandhanācchādanena makārātmarūpaparambindurūpeṇa sthitir)」(p.42, ll.18-19) とし、またこのシヴァとシャクティは、両者が固く結びついた「ひよこ豆の形でのパラマシヴァ神 (caṇakākārarūpaḥ paramaśivaḥ) である」(p.42, l.22) とすることから、ŚAP はこの第 38 詩節の「ヴィシュヌ神」を、「聖なるお方 (bhagavat)」すなわちパラマシヴァ神と理解していると思われる。Avalon もまた ŚAP の訳において Viṣṇu である Bhagavat を Parama-Śiva とする (Avalon 1964, 411)。

- 18) ŚAP はこの実践を次のように説明する : tad ayam viṣṇoḥ sthāne prāṇā-ropanaparakārah / prāṇaviyogakālaṃ jñātvā brahmaṇi līno bhavāmīty ānandītanā yogāsanam āsīnaḥ san kumbhakena vāyuṃ saṃrudhya hr̥disthaṃ jīvātmānaṃ mūlādihāram ānīya gudam ākuñcyā yathoktavīdhānena kuṇḍalinīm utthāpya mūlādibrahmarandhrāntaṃ taḍidākāram ānandaṃ kuṇḍalinīmayāṃ sūtrarūpaṃ nādaṃ dhyātvā prāṇarūpaśvāsaṃ paramātmakahaṃsaṃ* tan-nāde vilāpya jīvena saha cakrabhedakrameṇā ”jñācakram ānīya tatra sthitāyāṃ kuṇḍalīnyāṃ sthūlasūkṣmakramāt pṛthivyādīpapañcasamudāyaṃ vilāpya tāṃ punar jīvātmanā saha tatra sthita-śivaśaktimaya-bindunaikībhāvam āpādyā tiṣṭhet; tato brahmarandhrabhedena dehaṃ tyaktvā brahmaṇi līno bhaved iti / [p.43, ll.14-20], * ŚAP(A) prāṇarūpaśvāsaparamātmakam haṃsaṃ, (故に、ヴィシュヌ神の場所へ氣息を上昇させるあり方は、次のようになる。氣息が無くなる時〔すなわち死期〕を知った後、「私はブラフマンに帰滅するのだ」と〔考えて〕心が喜ばしくなった者は、

ヨーガの体位をとって座しつつ、クンバカ調息法によって呼吸を止め (vāyumaṃ samrudhya)、心臓に存する個我(jīvātman)をムーラーダーラ〔・チャクラ〕に導いて、肛門を締め、説示された方法に従ってクンダリニーを上昇させる。その後、根底〔すなわちムーラーダーラ・チャクラ〕に始まりブラフマンの穴を上端とする、稲妻のような形象の歓喜であり、クンダリニーから成り糸の姿であるナーダを冥想し、氣息という姿の呼吸(prāṇarūpaśvāsa)であり、最高我であるハンサ〔の真言〕(paramātmakahaṃsa)を、そのナーダに帰滅させ、個我(jīva)と一緒に、チャクラ貫通の次第によって(cakrabhedakrameṇa)アージュニャー・チャクラに導く。その後、そこにおいて留まっているクンダリニーに、粗大なものから微細なものへという順で、地に始まる現象世界の集合(prapañcasamudāya)を帰滅させ、さらに、そ〔のクンダリニー〕を、個我とともに、そこにおいて、存在するシヴァとシヤクティからなる点(sthita-śivaśaktimaya-bindu)と一体の状態にして〔行者は〕存するであろう。その後、ブラフマンの穴を貫通することにより(brahmarandhrabhedena)身体を捨てて、〔ブラフマンに〕帰滅するであろう。以上である。).

- 19) ŚAP: devaṃ sṛṣṭisthitipralayaīḥ kṛīḍantam / [p.43, 1.10], (「神的」、〔すなわち宇宙の〕創造・存続・帰滅によって戯れる〔ものである〕。).
ṢCBhT: dīvyatīti devam / [p.43, 1.26], (輝くので「神的」である。).
- 20) 「三世界(trijagat)」を、Avalon は、Gāyatrī 真言の vyāhṛti、すなわち bhūḥ bhuvah svah の三界であるとするので (Avalon 1964, 412, n.2)、それにしたがった。サンスクリット語辞典は jagattraya を天・地・地下とする (Apte, 722, Monier-Williams, 408)。
- 21) ṢCBhT: purāṇaṃ sṛṣṭisthitipralayakāraṇam [p.43, 1.27], (「原初のもの」、すなわち創造と存続と帰滅の原因であり…).
- 22) ŚAP は、第 38 詩節の注釈の最後に、アージュニャー・チャクラの姿を次のようにまとめている: tad ayaṃ mahāvākyaṛthanirṇayah / ājñā-

cakram dvidalaṃ śukravarnaṃ karbūvarṇa*¹-hakṣa-dvayayuktapatram /
karṇikāyāṃ cakrādhiṣṭhātrī hākinī śaktiḥ śuklavarnā raktaṣaḍvaktrā trinetrā
śāḍbhujā varā-bhayākṣamālā-kapāla-ḍamaru-pustaka-dharā śuklapadmopari
sthitā / tadūrdhve trikōṇe itaralingaḥ śuklavarnō vidyudākāraḥ / tadūrdhva-
trikōṇe praṇavākṛitir antarātmā pradīpābhajyotih / tasya caturdikṣv antarikṣe
jyotiḥsphuliṅgabimbair veṣṭito jvaladdīpasadr̥ṣena svatejasā mūlādi-
brahmarandhrāntaparakāśakaḥ / tadūrdhve sūkṣmarūpaṃ manaḥ / tad-
ūrdhve candramaṇḍale hamsakroḍe paramaśivaḥ saśaktika iti // iti śaṣṭha-
prakaraṇam // 38 // *² [p.43, l.21-p.44, l.7], *¹ ŚAP(A) karburavarna-,
*² ŚAP(A) saśaktika iti // 38 // iti śrīpūrṇānandayativiracitāyāṃ śrītattva-
cintāmaṇyantargataṣaṭcakravivaraṇaślokaṛthaparīṣkāriṇyāṃ śaṣṭhaṃ pra-
karaṇam, (さて、以下が長大な〔詩節の〕文章の意味に関する結論で
ある。アージュニャー・チャクラは、二枚の花弁を持ち、白色で、金
色の(karbūra) *³ ha と kṣa の二つ〔の文字〕が付いた花弁を持つ。花床
においては、白色で、赤い六面に三眼を持ち、六つの腕に与願印と施
無畏印、数珠、カパーラ（頭蓋骨の杯）、ダマル太鼓、経典を保持す
る、チャクラの主 (adhiṣṭhātrī) たるハーキニー・シャクティが、白色
の蓮華の上部に存している。その上部にある三角形には、白色で稲妻
の姿であるイタラ・リングがある。その上部の〔別の〕三角形には、
聖音オーム (praṇava) の形であり灯火の輝きのような光である内我
(antarātman) がある。そ〔の聖音オーム〕の四方の空間に、光のきら
めきの投影 (jyotiḥsphuliṅgabimba) により包まれた、燃えている灯
火に似た自身の炎を伴う、根底〔のチャクラ〕に始まりブラフマンの
穴まで続く光るもの (mūlādibrahmarandhrāntaparakāśaka) がある。その
上に、微細な姿の意がある。その上部の月の領域にあるハンサ鳥の胸
に、シャクティを伴ったパラマシヴァ神がいる。以上、第6章。),
*³ Avalon (1964, 413, n.1) は、「karbūra は白、そしてまた色とりどり
をも意味する」と注する。第32詩節参照。

- 23) マハーナーダ (mahānāda) とは、注 6 においても簡単に触れた、音声次元での宇宙開展の微細な段階のひとつを示す言葉である。Gupta は、ヨーガ実践による根源的原因への回帰過程に関連してこの微細な音声の諸段階を説明しているが、以下にそれを少し簡略にして示したい。ヨーガ行者はアージュニャー・チャクラにおいて、顕現する音声の最後のものとして純粋な bīja-mantra [Om など] を経験し、その後非顕現な音声である bindu の領域を過ぎると、原因である音声、nāda の領域に入る。この原因である段階 (kāraṇāvasthā) は、行者の神秘的身体のアージュニャー・チャクラとサハスラーラ・チャクラの間にあると考えられている。個我は微細な身体をアージュニャー・チャクラに残し、原因である身体 (kāraṇa śarīra)、プラクリティ (prakṛti) に帰入する。個我は最終的にサハスラーラにおいて至高のエネルギーに帰入するのだが、それに至る二つのチャクラの間の領域は、音声的そして現象的な展開物が次第に融合していく八段階に区分される。1) 三日月、2) bodhinī あるいは rodhinī と呼ばれる bindu、3) nāda、これはシヴァとシャクティの結合した形とされる、4) 犁の形の mahānāda (至高の nāda) あるいは nādānta (nāda の終局)、5) śakti (Śaṭcakranirūpaṇa はこれを承認しない *Serpent Power*, p.140)、6) vyāpikā-śakti、これは曲がった線であるとされる、7) samanī-śakti と 8) unmanī-śakti である。これら 8 つは、縦に序列的な順序にあると考えられている。unmanī は、字義としては心を超えていること (beyond mind) を意味するが、瞑想体験のこの段階ではヨーガ行者が心的なすべての制限 (all limitations of the mind) を超えるということを表している (Gupta 1979, 177)。
- 24) この詩節を、ŚAP は次のような文章で導入する： idānīm ajñācakro-rdhve sahasradalakamalādaḥsthānavartti-kāraṇāvāntaraśarīraṃ nirūpayitum icchann āha — layasthāyaṃ vāyor iti / [p.44, ll.8-9], (今や、アージュニャー・チャクラの上であり、千の花弁を持つ蓮華の下の場所に存してい

る、原因となる中間的身体 (kāraṇāvāntaraśarīra) を説明しようと欲して、〔作者は〕述べる、「氣息の帰滅の場所を」と。ŚAPはこの詩節への注で、明確に八段階ではないが、三日月から unmanī にまで言及するので、原因となる中間的身体 (kāraṇāvāntaraśarīra) とは、前注 23 に記した Gupta (1979, 177) の言うアージュニャー・チャクラとサハスラーラ・チャクラの間にある領域を指している。Avalon はこの領域を原因となる身体 (causal body, kāraṇa-śarīra) の居所とし、そこにあるものとして bindu, bodhinī, nāda, mahānāda または nādānta, vyāpikā, samanī そして unmanī の 7 つを挙げて Varunāvālī-rūpā Viloma-Śaktis と呼んでいる (Avalon 1964, 140-141)。

- 25) ŚAP にしたがってアージュニャー・チャクラの上とした: tadupari ājñācakrordhve mahānādarūpaṃ mahānādasya svarūpaṃ paśyet [p.44, ll.11-12], (「その上に」、すなわちアージュニャー・チャクラの上に、「マハーナーダの姿を」、マハーナーダの本質的形態を「見るであろう。）。しかし、ŚCV はナーダの上とする: tadupari pūrvoktanādopari / cakārāt nādasyāpi layasthānam / [p.91, l.16], (「その上に」とは、前述のナーダの上ということである。「そして」という語があるから、〔その場所は〕ナーダにとってもまた帰滅の場所なのである。)。ŚCBhT は明確ではなく、氣息の帰滅する場所の上としているように見える: layasthānam iti / etat sthānaṃ vāyor virāmabhūtam / tadupari mahānādarūpaṃ yogī jano yadā paśyet ... [p.44, ll.26-27], (「帰滅の場所を」と〔作者は述べる〕。この場所とは、「氣息の」停止した〔場所〕 (virāmabhūtam) である。「その上に」「マハーナーダの姿を」「ヨーガ行者」である人が「見るであろう時」…)。
- 26) ŚAP: nādaṃ viśeṣayati — layasthānaṃ vāyor iti / atra mahānāde vāyor layaḥ, yasmād utpattis tatra layaniyamāt / [p.44, ll.13-14], (ナーダを詳述する、「氣息の帰滅の場所を」と。ここに、マハーナーダに、氣息が帰滅する。そこから生起するというその場所への帰滅が原則だからであ

る。).

27) ŚAP: śivārddham iti / śivasyā 'rddhanārīśvaratvāt tadarddham śaktis tad-rūpaṃ nādam ity arthaḥ / [p.44.1.21], (「シヴァ神の半身を」と〔述べられる〕。シヴァ神はアルダナーリーシュヴァアであるから、その半身とはシャクティであり、そ〔のシャクティ〕の姿であるナーダをという意味である。). ŚCBhT: śivadevyor arddham aṅgasvarūpaṃ* yasya, hara-gauryātmakatvāt / [p.44, 1.28], * ŚCBhT(A) arddhāṅgasvarūpaṃ, ([シヴァ神の半身をとほ] シヴァ神と女神の両者の「半分である (arddham)」身体の特質 (aṅgasvarūpa) を持つものをということである。[それは] シヴァ神とパールヴァティー女神の結合を本質としているからである。). ŚCV: śivārddham śivāyā arddham śivasyākāram arddhanārīśvaram ity arthaḥ / [p.91, 1.19], (「シヴァ神の半身を」とは、シヴァ神妃 (śivā) の半分〔の姿〕というシヴァ神の姿を、つまりアルダナーリーシュヴァアをという意味である。).

28) sira という言葉は sira (犁) という言葉と同じく lāṅgala (犁) を意味すると ŚAP は説明する。この sira も lāṅgala も英語では plough とされるので、牛馬などに引かせる農耕具であり、手に持って使うシャベルのような道具 (鋤) ではない。アジアの犁の形態を比較分類した応地によれば、「インド犁」と分類される犁の特徴は、犁床 (りしょう：地面に接する部分で、その先端に土を掘り起こす犁先 [すきさき] が付く) と犁身 (りしん：犁の胴体部分) と犁柄 (りへい：犁のにぎり木) が一本の部材からなり、犁を牛馬に連結させる長い部材である犁轆 (りえん) が犁身から伸びるものであるが、その形にはヴァリエーションがあり、またインド亜大陸全体を見れば使用される犁はそれに限られない (応地 1987, 181-182, 187, 191-197)。したがって、ここで言われる「犁の形」が具体的にどのようなものであるかは、判断し難い。

29) sirākāram に代わる śivākāram という読みについて、注釈書は次のよ

うに述べる。ŚAP: athavā — śivākāram iti / tena śivaśaktimayo 'yaṃ nādaḥ / tad uktam prayogasāre — nādātmā prabuddhā sā nirāmayapadomukhī / śivonmukhī yadā śaktiḥ pumrūpā sā tadā smṛtā // iti / ata eva “tasyā eva śakter nādabinduḥ sṛṣṭyupayogāvasthārūpāv” iti rāghavabhāṭṭenāpy uktam / anyatra — sā tattvasamjñā cinmātra-jyotiṣaḥ*¹ sannidhes tadā*² / vicikīrṣur ghanībhūtā kvacid abhyeti bindutām // iti / tathā śrīmadācārya-vākyam — “nāda eva ghanībhūtaḥ*³ kvacid abhyeti bindutām” iti / atra sakalavacanaparyālocanayā śaktir eva nādabindurūpenā 'virbhūtā suvarṇa-kūṇḍalam iva / nādabinduḥ punar ekākāraiveti*⁴ niṣkarṣaḥ / [p.45, ll.3-12], *¹ ŚAP(A) cinmātrā jyotiṣaḥ, *² ŚAP(A) tathā, *³ ŚAP(A) ghanībhūya, *⁴ ekākāra eveti と読む, (あるいは「シヴァ神の形である (śivākāra) [マハーナーダ] を」と [いう読みもある]。それにより、このナーダはシヴァ神とシャクティ女神からなると [理解される]。『プラヨーガサーラ (Prayogasāra)』には次のように述べられる。「ナーダを本質とし、覚醒したシャクティ女神は、欠点のない完全な状態に近づく。シヴァ神に近づく時、その時そ [の女神] は男の姿を持つと伝承される*⁵。」まさにこれゆえに、「そのようなシャクティにだけ、創造に適した状態であるナーダとビンドウがある」とラーガヴァッタ (Rāghavabhāṭṭa) により述べられたのである。別の場所には「原理と呼ばれるそれは、精神のみである光の接近により、その時、変異しようとし、濃縮され、その場合はビンドウの状態 (bindutā) に近づく」と述べられる。同様に偉大なる師*⁶のお言葉も「ナーダこそが、濃縮され、その場合はビンドウの状態に近づく」とある。これについて、すべての言葉を考察してみれば、シャクティこそがナーダとビンドウの形で、あたかも金からできる装飾品のように、顕現するのである。さらに、ナーダ・ビンドウはまさに同一の形であると帰結される。), *⁵ Avalon 1964, 417, n.5 参照, *⁶ Avalon は Śaṃkarācārya とする (1964, 418, n.1). ŚCBhT: śivo hakāras tadākāram / [p.44, ll.27-28], ([シヴァ神の

形を持つものをと、] シヴァ神は ha 音であり、その形を持つもの
という意味である。).

- 30) ŚCBhT: varān dadāti abhayam api / [p.44, 1.28-p.45, 1.27], ([そのマハー
ナーダは] 望みを叶え、畏れを無くしもする。).
- 31) ŚAP は「言葉の成就 (vācām siddhiḥ)」を文章に関する成就 (vākya-
siddhi) とする [p.44, 1.13]。Avalon は発話の力すべて (all powers of
speech) と注する (Avalon 1964, 415, n.1)。

参考文献

- Apte, V.S. 1957 *The Practical Sanskrit-English Dictionary*. Rev. Enl.ed.
Poona (rept. Kyoto: Rinsen, 1992).
- Avalon, A. 1964 *The Serpent Power: Being the Śaṭ-Cakra-Nirūpaṇa and
Pādūkā-Pañcaka*. 7th ed. Madras: Ganesh & Co.
- Emeneu, M.B. 1967 *A Union List of Printed Indic Texts and Translations in
American Libraries*. American Oriental series, 7. rpt. (1st New Haven, 1935)
New York: Kraus Reprint.
- Gupta, S. 1979 “Modes of Worship and Meditation”, in Gupta S., D.J.
Hoens and T. Goudriaan, *Hindu Tantrism* (Handbuch der Orientalistik, zweite
Abteilung, 4 Band, 2 Abschnitt). Laiden / Köln: E.J.Brill.
- Hoens, D.J. 1979 “Mantra and Other Constituents of Tantric Practice”, in
Hindu Tantrism (See Gupta 1979).
- Monier-Williams, M. 1899 *A Sanskrit-English Dictionary*. Oxford:
Clarendon Press (rept. Tokyo: Meicho Fukyukai, 1986).
- 遠藤 康 2004 「ヨーガ的身体論の資料：『六輪解説(Śaṭcakrani-
rūpaṇa)』試訳（1）」『愛知文教大学論叢』7 卷。
- 2022 「ヨーガ的身体論の資料：『六輪解説(Śaṭcakrani-
rūpaṇa)』試訳（2）」『愛知文教大学論叢』24 卷。
- 応地利明 1987 「犁の系譜と稲作」渡部忠世（編）『アジア稲作文

化の生態基盤—技術とエコロジー—（稲のアジア史（普及版）第1
巻）』所収，小学館（初版1987，普及版1997）.

プログラマーのリスクリングに関する一考察

早川 渡

1. はじめに

令和4(2022)年11月10日、岸田文雄総理(以下、総理)は、総理大臣官邸で第12回新しい資本主義実現会議を開催し、企業間の労働移動の円滑化・リスクリング・構造的賃金引上げについて議論が行われた。総理は、リスクリングのための支援制度を総合政策の中に盛り込む考えを表明した。総理は、「人への投資」と「企業間の労働移動の円滑化」のために、受け入れ企業への支援や、リスクリングから転職までを一気通貫で支援する制度といった施策を新設・拡充したいと考えている。

経済産業省では、リスクリングを通じたキャリアアップ支援事業費補助金(一次公募)に関し、51件の事業を採択し、キャリアアップ支援事業費補助金(二次公募)に関し、36件の事業を採択した。「リスクリングを通じたキャリアアップ支援事業」の三次公募を行っている。

事業内容は以下の通りである。

本事業は、リスクリングと労働移動の円滑化を一体的に進める観点から、在職者が自らのキャリアについて相談できる「キャリア相談対応」、それを踏まえてリスクリング講座を受講できる「リスクリング提供」、キャリア相談及びリスクリングを踏まえた「転職支援」までを一体的に実施する体制を整備します。

IT業界において特にプログラマーを対象としたリスクリングについて考えていくこととする。日本ではIT技術者不足が叫ばれる中どのような方向性でリスクリングが進められるかについて考察をしていくこととする。

2. プログラマー

どのような職種、分野で活躍できる種類があるかを確認した。

「プログラマー」とは、コンピューターを動かす「プログラム言語」を用いてさまざまなシステムやソフトウェアを作るための「プログラミング」を行う仕事です。プログラマーが作成するシステムやソフトウェアはさまざまな場所で使われています。物流システムや金融システムといった企業が使用するシステムのほか、テレビやスマートフォン、Youtube やゲームなどのスマホアプリ、電子レンジなど、身のまわりのあらゆる場所でプログラムが活用されています。一般的には、システムエンジニアがシステムやアプリケーションの仕様書や設計を行い、それに基づいてプログラマーがプログラミングを行います。プログラムの導入や分析などを行うこともあります。

Web系…ショッピングサイトやデータベースの構築など

組み込み、制御系…電子レンジや炊飯器などの家電製品のほか、テレビ、スマートフォンなどの機械を制御するプログラムなど

パッケージアプリケーション系…PC で使用するアプリケーションなど

社内システム系…自社システムの構築や運用など

設備制御系…交通機関、工場、研究室といった、設備に関する制御など

オープン、オンライン系…ネットワークで Web 関連のシステムを開発し、サーバーのシステムを構築するなど

汎用系…クレジットカード、金融機関のシステムで使われるメインフレームの開発など

通信系…ルーターやモデムといったネットワーク機器をはじめとした、通信関連のプログラムなど

3. リスキリング

ことばの意味を確認し、各種業界での状況を見ていくこととする。リスキリングについては以下のように表現をしている。

リスキリングとは

リスキリングとは、業務において必要なスキルを獲得することを指します。欧米では2016年頃から取り組まれており、日本においては政府がリスキリングへの取り組みを呼びかけている状況です。

リスキリングはデジタル分野での学び直しと考えられがちですが、デジタル分野に限らず市場のニーズあるところに学びの対象があります。近年ではGX（グリーントランスフォーメーション）の普及に伴い、「グリーンリスキング」が注目されており、欧州では石油や電力などのクリーンエネルギー分野におけるリスキリングも推進されています。

リスキリングとは

リスキリングとは「新しい仕事・職務に移行するためのスキル習得」を意味します。

DX（デジタルトランスフォーメーション）やAIに代表される新しい潮流。これまでのビジネスのルールや常識を塗り替えるインパクトを持つ変化にどのように対応するのか？

その一つの手段としてリスキリングが注目されています。

リスキリングとは、新たな分野や職務にて新しいスキルを習得することを指す用語です。業構造の変化や人材不足、人的資本経営へのシフトや自律的なキャリア形成など、ビジネス環境が変化したことによりリスキリングの注目度が高まってきました。

しかし、海外に比べると日本企業のリスキリング浸透度は高くありません。そのような状況を受け、国としてもリスキリングの推進に力を

入れはじめています。

ここでポイントをまとめると、業務において必要なスキルを獲得すること、新しい仕事・職務に移行するためのスキル習得、新たな分野や職務にて新しいスキルを習得することというように、新しいスキルを習得することとなる。

3-1. リスキリングの状況

前述した「リスキリングを通じたキャリアアップ支援事業費補助金」に関して以下の事業（一次公募 51 件、二次公募 36 件、計 87 件）が採択されている。

（一次公募）51 件の事業を採択

- 1 株式会社アイデミー
- 2 アデコ株式会社
- 3 株式会社ウィルエージェンシー
- 4 株式会社エス・エム・エス
- 5 株式会社エスワイシステム
- 6 株式会社エヌ・エフ・ユー
- 7 株式会社エンファクトリー
- 8 株式会社ガイアックス
- 9 株式会社キャリアステーション
- 10 キャリアバンク株式会社
- 11 株式会社キャリアプラス
- 12 キャリアフラッグ株式会社
- 13 キラメックス株式会社
- 14 キラメックス株式会社
- 15 コードキャンプ株式会社

- 16 株式会社コトラ
- 17 株式会社コネクト
- 18 株式会社さくらコミュニティサービス
- 19 ショウヨウ株式会社
- 20 株式会社ジンジブ
- 21 スキルアップ AI 株式会社
- 22 株式会社ディンプル
- 23 デジタルハリウッド株式会社
- 24 パーソルキャリア株式会社
- 25 パーソルテンプスタッフ株式会社
- 26 株式会社バリュー・スタッフ
- 27 ピーシーアシスト株式会社
- 28 ヒートウェブ株式会社
- 29 株式会社プロシーズ
- 30 ポート株式会社
- 31 株式会社ボテパン
- 32 マイキャリア株式会社
- 33 マンパワーグループ株式会社
- 34 レバレジーズメディカルケア株式会社
- 35 株式会社ワークポート
- 36 川相商事株式会社
- 37 一般社団法人福祉キャリアセンター
- 38 株式会社明光キャリアパートナーズ
- 39 株式会社 D4c アカデミー
- 40 株式会社 div
- 41 株式会社 iDA
- 42 Institution for a Global Society 株式会社
- 43 株式会社 MAIA

- 44 株式会社 SAMURAI
- 45 株式会社 TechBow1
- 46 株式会社 TIMERS
- 47 株式会社 TOASU
- 48 株式会社 ToBe キャリアパートナーズ
- 49 株式会社 UZUZ
- 50 一般社団法人 Work Design Lab
- 51 WorX 株式会社

(二次公募) 36 件の事業を採択

- 1 アデコ株式会社
- 2 株式会社ウィルオブ・ワーク
- 3 株式会社大原キャリアスタッフ
- 4 株式会社オープンループパートナーズ
- 5 株式会社キャリア
- 6 株式会社九州インターメディア研究所
- 7 ケイ. イー. シー. 株式会社
- 8 行知学園株式会社
- 9 株式会社スタートアップテクノロジー
- 10 株式会社スタッフサービス
- 11 スマイル・ステーション株式会社
- 12 株式会社セキショウキャリアプラス
- 13 一般社団法人全国メディケア・海外事業協議会
- 14 株式会社ソフトキャンパス
- 15 株式会社タイミー
- 16 株式会社デイトラ
- 17 株式会社トゥーマップ
- 18 株式会社バリュー・スタッフ

- 19 ヒューコムエンジニアリング株式会社
- 20 ヒューマンリソシア株式会社
- 21 株式会社フォワード
- 22 有限会社マーケット・エンジニア
- 23 株式会社明光キャリアパートナーズ
- 24 株式会社ユーユーワールド
- 25 株式会社ライフシフトラボ
- 26 株式会社レクリー
- 27 株式会社ワークアカデミー
- 28 A Biz School 株式会社
- 29 株式会社 Every
- 30 株式会社 HUG
- 31 株式会社 INDUSTRIAL-X
- 32 株式会社 LIG
- 33 MeRISE 株式会社
- 34 株式会社 pacebox
- 35 SHE 株式会社
- 36 株式会社 VUILD management

3-2. 採択された事業者の特徴

ここからどのような特徴があるかをまとめていく。

事業者所在地について、東京都 59 件（一次 36 件、二次 23 件）、大阪府 13 件（一次 8 件、二次 5 件）、北海道 3 件（一次 2 件、二次 1 件）、愛知県 2 件（一次 2 件、二次 0 件）、香川県 2 件（一次 1 件、二次 1 件）、埼玉県 1 件（一次 1 件、二次 0 件）、広島県 1 件（一次 1 件、二次 0 件）、茨城県 1 件（一次 0 件、二次 1 件）、山梨県 1 件（一次 0 件、二次 1 件）、栃木県 1 件（一次 0 件、二次 1 件）、神奈川県 1 件（一次 0 件、二次 1 件）、福岡県 1 件（一次 0 件、二次 1 件）、青森県 1 件（一次 0 件、二次 1 件）となり、

東京都が 67.8%で全体の 3 分の 2、大阪府が 14.9%を占めている。

事業者の会社形態について、株式会社 83 件（一次 49 件、二次 34 件）、一般社団法人 3 件（一次 2 件、二次 1 件）、有限会社 1 件（一次 0 件、二次 1 件）となり株式会社が 95.4%を占めている。

特徴的なのは所在地が東京都と大阪府に集中し、会社形態は株式会社がほとんどである。これは企業数の分布が多いところと一致するものの地方も含まれるのは、オンラインでの対応も可能であることがあり全国で可能であることを示していると考えられる。

4. デジタル時代の人材

次にこれからのデジタル時代に必要となる人材について公開されている情報を確認した。

4-1. デジタル時代のスキル変革等に関する調査（2022 年度）

独立行政法人情報処理推進機構では、以下の調査方法を用い、分析結果を公開している。

(1) 企業調査

IPA にて毎年調査している IT 人材動向の経年変化を追うと同時に、デジタル事業を推進していく上での組織や人材のマネジメントのあり方、スキル変革等に関する調査として、国内の IT 企業 5,000 社および事業会社 10,000 社の計 15,000 社を対象にアンケート調査を行い、計 2,017 社（IT 企業：792 社、事業会社：1,225 社）から回答いただいた。

(2) 個人調査

上記企業調査と呼応する内容に関し、いわゆる IT エンジニアだけでなく、IT をビジネスに活用する人材も含む個人向け調査として、企業に所属する IT 人材 1,500 名、特定の企業に属さない IT 人材（フリーランス）397 名の計 1,897 名から回答をいただいた。

IT人材の状況

IT人材の量・質の不足感

事業会社ではIT人材が量的にも質的にも「大幅に不足している」と回答した企業が2021年度調査から増加している。

IT企業では量的に大幅な不足を回答する企業は増加しているが、質的な不足の回答では変化が少ない。

従業員のデジタルリテラシー向上のための取り組み状況

事業会社では約半数の企業がデジタルリテラシー向上に関する取り組みは行っていないと回答し、2021年度調査と比べてやや増加している。

IT企業では約70%においてデジタルリテラシー向上のための取り組みを行っているとしており、2021年度調査と比べて微増している。

IT人材に対して行っているキャリアサポート（事業会社）

事業会社では半数以上の企業が「行っていない」と回答し、2021年度調査から変化は見られない。

以上のことから、IT人材不足であることは明白であるが取り組みがあまりできていないことがわかる。またIT企業に限っていえば一般企業に比べれば増えてきていることもわかる。

4-2. 第四次産業革命スキル習得講座認定制度

経済産業省で「第四次産業革命スキル習得講座認定制度の拡充に関するお知らせ」をしている。

昨今、データ活用やデジタル技術の進化により、企業が競争上の優

位性を確立するためには、常に変化する社会や顧客の課題を捉え、デジタルトランスフォーメーション(DX)を実現することが重要であり、その推進にあたっては、DXの素養や専門性を持った人材が必要不可欠です。

このような中、経済産業省においては、DXを推進する人材の役割や習得すべき知識・スキルを示し、それらを育成の仕組みに結び付けることで、リスキリングの促進、実践的な学びの場の創出等を行うことを目的として、DX推進スキル標準を策定しました。

第四次産業革命スキル習得講座認定制度において、DXを推進する人材に求められる知識・スキルを習得できる専門的・実践的な教育訓練講座を認定し、奨励することを通じて、DXを推進する人材の育成、社会人のリスキリングの促進等を図ることを目的として、DX推進スキル標準に基づき、認定講座の対象分野を拡充しました。

認定講座の対象分野の拡充に伴う申請実務の変更点、技術的審査における留意点等を説明した動画を配信しておりますので、本認定制度への申請をご検討されている方は、ご確認いただきますようお願いいたします。

5. プログラマーのリスキリング

プログラマーとしてどのようなスキルの習得がこれからのキャリア形成につながっていくかについて考えていくこととする。先述した「第四次産業革命スキル習得講座認定制度の拡充に関するお知らせ」で示されているようにデジタルトランスフォーメーション(DX)を実現することが重要となっている。つまりプログラマーは、プログラミング言語の新たな習得よりももっとDX実現のためのリスキリングが必要である。キャリアアップ支援事業者が行なっているリスキリングを吟味し、必要となる講座を選択し将来のための有望な学びを進められるのがよいと感じている。

6. まとめ

リスクリングを通じたキャリアアップ支援事業と関連したものがプログラマーに必要となるものであるかについて確認してきた。経済産業省から示されているように DX を実現するためのリスクリングの重要性を考える必要がある。これによって IT 技術者不足がすこしでも改善できるようになっていくことを願うばかりである。

7. おわりに

現在の IT 技術者不足の改善に向けていろいろな方法を考えていかなければならないのであるが、そのひとつとしてリスクリングによる個々の技術力を高め、広げていくことが可能であるか、また個々も含めチームで行うための技術力を高め、広げていくことが可能であるかという点については今後も検討の余地があると考ええる。

マイナビの調査 2023 年卒の大学生に人気の業界は？ランキングや志望業界の傾向を紹介において、ソフトウェアは就職活動を始めた頃に志望していた業界ランキングでは 3 位、エントリーしたことのある業界ランキングでは 1 位、選考を受けたことのある業界ランキングも 1 位、最終的な志望業界ランキングも 1 位、実際に就職活動をしてイメージが変わった業界は？も 1 位という結果も示されている。

現在の IT 企業の考える人材については、新卒採用が中心である。ヒューマンリソシア調べによると、世界の IT 卒業者数、日本は 3.2 万人で 6 位だが減少傾向にあるとされている。今後日本では人口の減少が進み総人口 1 億人を切ることが予想されている。

そういった中で、IT 業界を支えるために新卒採用だけでなく、会社内部でもこのリスクリングによって更なる技術向上を進められる体制が作られることを期待する。

参考文献

1. 令和4年11月10日 新しい資本主義実現会議 | 総理の一日 | 首相官邸ホームページ

https://www.kantei.go.jp/jp/101_kishida/actions/202211/10shihon.html

(最終検索日 2023年9月26日)

2. 令和4年度補正予算「リスキリングを通じたキャリアアップ支援事業」(一次公募)の採択事業を採択しました

<https://www.meti.go.jp/press/2023/06/20230620005/20230620005.html>

(最終検索日 2023年9月26日)

3. 令和4年度補正予算「リスキリングを通じたキャリアアップ支援事業」(二次公募)の事業を採択しました

<https://www.meti.go.jp/press/2023/09/20230915001/20230915001.html>

(最終検索日 2023年9月26日)

4. 令和4年度補正予算「リスキリングを通じたキャリアアップ支援事業」の三次公募について

<https://www.meti.go.jp/information/publicoffer/kobo/2023/k230915001.html>

(最終検索日 2023年9月26日)

5. プログラマー (PG) とは? 仕事内容・資格・年収・必要なスキル | マイナビ IT エージェント

<https://mynavi-agent.jp/it/jobindex/05.html#:~:text=%E3%80%8C%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%80%8D%E3%81%A8%E3%81%AF%E3%8>

0%81%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%83%94%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%BC,%E3%81%A7%E4%BD%BF%E3%82%8F%E3%82%8C%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82

(最終検索日 2023年9月26日)

6. 「リスキリング」とは | 用語集 | 人材育成・研修のリクルートマネジメントソリューションズ

<https://www.recruit-ms.co.jp/glossary/dtl/0000000244/>

(最終検索日 2023年9月26日)

7. リスキリングとは何か？企業の取り組み事例と、個人にできること

<https://www.projectdesign.co.jp/knowledge/reskilling/>

(最終検索日 2023年9月26日)

8. 【事例あり】リスキリングとは？定義から導入時のポイントまで徹底解説

<https://www.persol-group.co.jp/service/business/article/8287/>

(最終検索日 2023年9月26日)

9. リスキリングとは？DX時代に求められる理由や導入のポイント、事例を解説！

https://www.jmam.co.jp/hrm/column/0070-dx_reskilling.html

(最終検索日 2023年9月26日)

10. デジタル時代のスキル変革等に関する調査 (2022年度)

<https://www.ipa.go.jp/jinzai/chousa/skill-henkaku2022.html>

(最終検索日 2023年9月26日)

11. 第四次産業革命スキル習得講座認定制度の拡充に関するお知らせ

<https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/reskillprograms/reskillwebinar/dougahaishin.html>

(最終検索日 2023年9月26日)

12. 世界のIT卒業生数、日本は3.2万人で6位だが減少傾向 = ヒューマンリソシア調べ = | ICT教育ニュース

<https://ict-enews.net/2022/12/16resocia-2/>

(最終検索日 2023年9月26日)

13. 2023年卒の大学生に人気の業界は？ランキングや志望業界の傾向を紹介

https://mcs.mynavi.jp/column/2022/12/popular_industry_ranking/

(最終検索日 2023年9月26日)

「とまる」の多義分析¹

梶川 克哉

1. はじめに

本稿は現代日本語における「とまる」の複数の語義（以降、「別義」と称する）および別義間の関連性を描き出すことを目的としている²。「とまる」は自動詞であり、対応する他動詞として「とめる」がある³。

両語は以下のように用いられる。

(1) 店の前で車をとめた⁴。

(2) 店の前で車がとまった。

また、一見、例(1)、(2)の意味とは同音異義語のように感じられる下記の用法も、後述するように意味的な関連性が認められる⁵。

(3) この旅館に親戚をとめた。

(4) この旅館に親戚がとまった。

例(1)と例(3)の「とめる」、例(2)と例(4)の「とまる」は前者が他動詞、後者が自動詞として意味的に対応関係にある場合が多い。しかし、次のように対応しない用法も存在する。

(5) 庭の木にセミがとまっている。

(6) *庭の木にセミをとめている⁶。

また、例(2)は「停止した」が類義表現として考えられ、例(4)は「宿泊した」が類義表現として考えられる。したがって、「とまる」は少なくとも2つ以上の別義を有する多義語とすることができる⁷。多義分析の課題として、靛山（2019: 34、2021: 15）は以下を示している。本稿はこの手順に沿って分析を行う。

①何らかの程度の自立性を有する複数の意味（多義的別義）の認定

②プロトタイプの意味の認定⁸

③複数の意味の相互関係の明示

④複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明

①については、4 節において用例を観察して記述する。②と③は、①で得られた記述をもとに、5 節で意味的関連性を考察する。最後に④として、「とまる」の意味ネットワークをモデル化して明示する。

2. 先行研究

従来、「とまる」は辞書においてどのように記述されているか、確認しておきたい。

『明鏡国語辞典』（第三版）

とまる【止まる・留まる（停まる・駐まる）】

〔自五〕

- ①活動しているもの（特に、移動しているもの）の動きがやむ。「心臓〔洗濯機〕が一」「横綱の快進撃が一」「車が玄関先に一」「ストで電車が―」
- ②作業や歩行を続ける手・足の動きがやむ。「ペンを走らせる手が一」「銅像の前で観光客の足が一」
- ③起こっていた生理現象がやむ。「痛み〔咳・息〕が一」「おかしくて笑いが一・らない」
- ④規則的・連続的に流れ動いていたものの動きがやむ。「大地震で電気が―」「物流〔円高の流れ〕が一」
- ⑤飛んでいた鳥・虫が物につかまって静止した状態をとる。「梅にウグイスが一」「かくれんぼする者、この指一・れ」
- ⑥動かないように固定される。また、固定することによって合わせ目がしっかりとふさがる。「この壁掛けは画鋲では一・らない」「太りすぎでボタンが一・らない」
- ⑦印象づけられ（て心に残）る。「街頭演説が通行人の目の一」「心に一・名演奏」「目にも一・らぬ早業」

とまる【泊まる】

〔自五〕

- ①自分の家以外の所で夜を明かす。宿る。宿泊する。「ホテル [友人宅] に一」
- ②船が停泊する。「船が浦賀に一」

およそ「とまる」の用法は網羅されていると思われるが、類義表現による記述が目立つ（たとえば、「とどまる」「やむ」「宿泊する」など）。また、辞書の性質上、やむを得ないことであるが、語義間の関連性が明示的ではないという点も検討の余地があるだろう。

3. 理論的背景

多義語の別義というのは、基本義を基点に、メタファー、メトニミー、シネクドキーという3つの比喻によって意味が拡張し、それが慣習化したものである。以下、靱山（2019: 39）から、これらの比喻の定義を引用する。

メタファー：2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喻。

メトニミー：2つの事物の外界における隣接性、さらに広く2つの事物・概念の思考内、概念上の（類似性を除く）関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喻。

シネクドキー：より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すという比喻。

このうち、5節において語義間の意味的関連性を検討する際に採用する比喻は、メタファーとシネクドキーである。メタファーは、よりプロトタイプ的な意味から新奇の意味（X）への拡張であり、両義からは抽象的共通性（スキーマ）が抽出できる。シネクドキーは、一般性の高い意味（スキ

一マ) と、より特殊化・具体化した意味との拡張関係である。この二つの比喩は、スキーマティック・ネットワークモデルとして図式化される⁹。

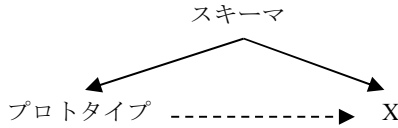


図 1 スキーマティック・ネットワークモデル

(靱山 2021 : 156)

4. 意味分析

この節では、用例をもとに、「とまる」の別義として7つ認められることを示す。

4.1. 別義 1 〈それまで続いてきた物事の活動や生理現象が〉〈ある時点でなくなる〉¹⁰

ここではまず、〈それまで活動が続いていた物事〉が〈ある時点でなくなる〉という特徴が見られる例を観察していく。

- (7) とうとう最後の一通を封筒に入れ、上書きを書いた。署名するときに手がとまる。(泡坂妻夫『湖底のまつり』)
- (8) ここでエンジンがとまってしまえば、逮捕されかねない。

(北方謙三『傷だらけのマセラッティ』)

例(7)の「手」は筆記作業を指している。したがってこの例は、それまで続けてきた筆記作業が行われなくなることを表している。例(8)は起動状態にあったエンジンが、その動きをなくすことを表している。このことから、〈それまで続いてきた物事の活動がある時点でなくなる〉という特徴が導かれる。ただし、次の「雨」(=降雨)のようなものは「落下」という自然現象であり、物事の活動ではない。例(9)が表現する事態は、水滴が空中で静止することであり、現実的には不可能である。したがって、特殊な文脈がない限り、「とまる」を用いることができない。

(9) *雨がとまった。

(10) 雨がやんだ。

類例として「風」や、現象のように捉えた「拍手」についても同じことが言える。

次に、生理現象についても、〈ある時点でなくなる〉という特徴が見出されるため、ここに挙げる。

(11) 「…先生、来週の土曜日で学校をやめるのよ」心臓がとまりそうだった。息までとまってしまった。

(高樹のぶ子『マイマイ新子』)

(12) 怖ろしいのにけたけた笑いがとまらない。

(別所真紀子『残る蜚』)

例(11)の「心臓」「息」は、鼓動と呼吸を指している。むろん、この2つの生理現象は生命維持にとって絶えず行わなければならないことであるが、この例では、ある時点でそれがなくなる、あるいはなくなりそうになることを表す。例(12)は、主体自身の「けたけた笑い」が制御できなくなってしまったということを表している。いずれの「とまる」も、〈それまで続いてきた生理現象〉が〈ある時点でなくなる〉という事態を表していることがわかる。しかし、一見、生理現象のように感じられる以下の例は、「とまる」で表現することはできない。

(13) *歯茎の腫れがとまる。

(14) 歯茎の腫れがひく。

(15) *怒りがとまらない。

(16) 怒りがおさまらない。

「とまる」とともに用いられる生理現象とは、「痛み」など、身体的に感じられる現象である。例(13)の「腫れ」は、生理現象ではなく、歯茎に生じた隆起現象を指すため、「とまる」を用いることができない。また、例(15)の「怒り」は生理現象ではなく、心理状態を指している。したがって、これも「とまる」で表現することはできない。

以上、これらの例における「とまる」の語義は〈それまで続いてきた物事の活動や生理現象が〉〈ある時点でなくなる〉と記述できる。

4.2. 別義2 〈一方向的な動きをしていた人や物が〉〈ある地点の先に進まなくなる〉

別義1では、主体の位置変化とは関わりがなかったが、ここで取り上げる用例は、いずれもある地点（時点）に至るまで主体が位置を変化させていたことを前提としている。

(17) 十時頃、深い森のただ中にある集落でバスがとまった。

(福田明男『西アフリカ放浪』)

(18) 水量の多いときは、水の流れがとまり、ゴミも流れず、水質も悪い。

(水と文化研究会『みんなでホタルダス』)

(19) このまま時がとまってくれればいい、と古畑は願った。

(高野裕美子『サイレント・ナイト』)

(20) 好局を失ったばかりでなく、挑戦者リーグ以来の破竹の勢いがとまった点からも土居にとって痛い敗戦だった。

(斎藤哲男『将棋戦国史』)

例(17)はそれまで走行運転をしていた「バス」が「ある集落」という地点でその動きをやめ、その先に進まないことを表している。例(18)は、「水(川)の流れ」という一方向的な動きが、ある地点において見られなくなり、そこに停滞することを表している。例(19)の主体「時」は物理的なものではなく、概念的なものである。そもそも、「時」とは、不可逆的な流れとして捉えられているものであるが、それがそれ以上先に進むことがないよう、「古畑」は願っているのである。例(20)の「破竹の勢い」も物理的なものではなく、「連勝状態」を表す。その、「勝ち続ける」という一方向的な動きが、ある一戦でなくなることを表している。

なお、この語義における〈地点〉というのは、ある移動線がベースとしてあり、その途中地点がプロファイルされたものである¹¹。

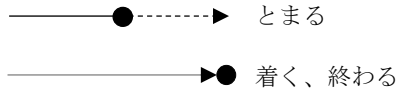


図 2

したがって、「とまる」には必ず「先に進むこと」が想定されている。ゆえに、次のように、それが「終点」である場合は「とまる」を用いることができない。

(21) *もうすぐ地下鉄が終点にとまる。

(22) もうすぐ地下鉄が終点に着く。

同じ理由で、飛行機の場合の「空港」や、船の場合の「港」も「とまる」を用いることはできない。

以上見てきたように、これらの例における「とまる」の語義は〈一方向的な動きをしていた人や物が〉〈ある地点の先に進まなくなる〉と記述できる。

4.3. 別義3 〈一方向的な変化をしている事象が〉〈それ以上変化しなくなる〉

ここで検討する例は、ある時点まで一方向的に変化してきた事象が、その時点を境に、変化が認められなくなるものである。

(23) 常緑性は開花前の4月か新梢の成長がとまる7月から8月上旬でもよいでしょう。 (『趣味の園芸』)

(24) この不況期が終わり94年1～3月期から好況に転じたにもかかわらず、失業率の上昇がとまったのは2年後(8四半期後)の9.6年1～3月期である。 (白石栄司『高失業社会への移行』)

(25) 自己の内面の充実、自己実現の欲求については、足るを知ったとたんに、自己満足となり、進歩がとまってしまうだろう。

(樋口恵子『私の古い構え』)

例(23)の「新梢の成長」、例(24)の「失業率の上昇」、例(25)の「進歩」はいずれも、ある時点（「7月から8月上旬」、「96年1～3月期」、「足るを知った（時）」）までの一方向的な変化を表している。その変化が、その時点を以てなくなることを表している。

なお、この語義も別義2における〈地点〉の制約同様、さらに先へと変化が進行することが想定されていなければならない。そのため、一方向の変化を表すとしても、その意味に終局が含まれている場合、「とまる」で表すことはできない。

(26) *政府への要求が受け入れられ、デモ隊の沈静化はとまった。

(27) 政府への要求が受け入れられ、デモ隊の沈静化は成った。

例(26)の「沈静化」はそれまで昂っていたデモ隊の氣勢が低下し、完全になくなることを意味している。したがって、このような終局が語彙化されている変化については「とまる」を用いることはできない。

以上、これらの例における「とまる」の語義は〈一方向的な変化をしている事象が〉〈それ以上変化しなくなる〉と記述できる。

4.4. 別義4 〈それまである物の内部から出ていた物事が〉〈外に出なくなる〉

別義1から別義3は、主体自体の移動や変化に関わる語義であったが、ここでは、〈あるものの内部〉という特徴的な要素が加わる用法を確認する。

(28) 小さな傷でも出血がとまらないし、転んだくらいの打撲でも、内出血して打ち身の箇所が紫色に腫れ上がり、長い間腫れが退かないのである。 (石田敦士『歩いて書いたヨーロッパの歴史』)

(29) 一体、どうして、どうして私の事を置いてったのよ。涙がとまると怒りがこみ上げてきた。 (金原ひとみ『蛇にピアス』)

(30) リモコンを頭上に高く上げて、ピ、とオフのスイッチを押すと、冷風を送り出す低い稼働音がとまった。

(綿矢りさ『蹴りたい背中』)

例(28)の「出血」は人体の内部から血が出ることである。そして、この例では、血が出ないように処置をしても効果がないということを表している。例(29)も同様に、「涙」というのは人体の内部から出る水分である。それが、ある時点で出なくなることを表している。例(30)においては、エアコンの内部から外部に出ていた「低い稼働音」が、ある時点で出なくなったことを表している。

なお、この語義の特徴〈ある物の内部から出ていた物事〉は、もともと「ある物」の内部に存在、あるいは備わっているものでなければならない。したがって、例(31)の「火」のように突発的に発生したものについては「とまる」を用いることができない。

(31) *隣家から出た火はようやくとまった。

(32) 隣家から出た火はようやく消えた。

同じように、例(33)の「湯気」ももともと内部にあったものとは考えられず、表面の水分の気化を表しているため、「とまる」では不自然となる。

(33) ?ラーメンが冷めてしまって、湯気がとまった。

(34) ラーメンが冷めてしまって、湯気がなくなった。

以上、「とまる」の語義として、〈それまである物の内部から出ていた物事が〉〈外に出なくなる〉という語義が認められることを確認した。

4.5. 別義5 〈ある面にある物を重ねて〉〈そこに何かが突き通されること によって〉〈その面から離れないようになる〉

ここでは、あるものを突き通すことによって、ある物がある面に固定され、離れない状況が作られることを表す語義を検討しよう。

(35) 今年はウェストまわりがきつくなってボタンがとまらない。

(C.ビクター『ダブル・シークレット』)

(36) 昆虫標本を作るとき、うまくとまらなかつたら、ピンを中心からずらして打つといい。

(37) 鬚のくせが強く、ヘアピン一本ではとまりそうにない。

例(35)における「とまる」は、ズボン等のボタンの付いたウエスト面に、ボタン穴のあるウエスト面を重ね合わせ、ボタンを突き通すことで両者が離れないようになることを表している。例(36)においては、標本の平面と、昆虫の両者が、「ピン」を刺し通すことで固定されることを表している。例(37)の場合は、〈面〉に当たるものが頭部だと考えられる。そして、「ヘアピン」を突き通すことによって固定しようとしているのが、髪の毛の束である。

この語義において、〈突き通す〉という特徴は重要である。この点を次の例で確認しよう。

(38) *壁に時計がとまっている。

(39) 壁に時計がかかっている。

これは時計の背面にある穴に壁面から出ているピン等を差し入れ、それとの接触によって壁面に安定させることを表そうとしたものである。この場合、ピンを突き通すことによって安定するわけではないため、例(38)のように「とまる」で表現することはできない。

以上から、「とまる」には〈ある面にある物を重ねて〉〈そこに何か突き通されることによって〉〈その面から離れないようになる〉という語義があることを確認した。

4.6. 別義6 〈人が〉〈宿泊地で〉〈夜を過ごす〉

「とまる」には、以下のように人が何らかの施設で夜を過ごす場合にも用いられる。

(40) 私は、今仕事で関西のホテルにとまっている。

(室井滋『まんぷく劇場』)

(41) その夜、成沢係長は葛巻町の遠藤の家にとまった。

(中野清見『回想・わが江刈村の農地解放』)

(42) アパートへ戻るよりも会社にとまったほうが近いし、明日の朝も楽だ。

(江川紹子『冤罪の構図』)

例(40)の「関西のホテル」、例(41)の「葛巻町の遠藤の家」、例(42)の「会社」は、いずれもそこで人が安全に夜を過ごすことができると考えられる場所である。特に宿泊専用の施設である必要はなく、例(41)や例(42)のように、本来、宿泊専用ではない場所であっても、人がそのように捉えれば「とまる」を用いることができる。ただし、例(43)の「道端」のように施設ではないものは「とまる」で表現することはできず、「寝る」などを用いる。

(43) *昨夜は酔っぱらって、道端にとまってしまった。

(44) 昨夜は酔っぱらって、道端で寝てしまった。

また、この用法はそこで生活を営むわけではなく、単に夜を過ごすことを表す。したがって、その場所を生活の場所として定めるのであれば、例(47)のように「住む」を用いなければならない。

(45) *今日からこのアパートにとまることになりました。お世話になります。

(46) 今晚だけこのアパートにとまることになりました。お世話になります。

(47) 今日からこのアパートに住むことになりました。お世話になります。

以上、これらの例は〈人が〉〈宿泊地で〉〈夜を過ごす〉という語義として記述されることを確認した。

4.7. 別義7 〈飛行する動物が〉〈物の上まで飛んで来て〉〈そこに安定する〉

1 節で他動詞「とめる」に対応しない自動詞「とまる」の例として、例(5)「庭の木にセミがとまっている (*とめている)」を挙げた。ここで検討するものは、この用法である。

(48) 庭の木に数羽の鳥がとまっている。 (童門冬二『鍋島直茂』)

(49) 目を凝らすと、大きな賽銭箱の縁に確かに脱皮をしかけた蟬がとまっていた。 (天樹征丸『金田一少年の事件簿』)

(50) 草のはに 大きないもむしがとまっています。

(『幼年版・フェアブルこんちゅう記』)

例(48)における「数羽の鳥」、例(49)の「蟬」で示されるように、この用法における主体は基本的には〈飛行する動物〉と考えられる。それが、〈飛行〉の末、「庭の木」や「賽銭箱の縁」といった〈物の上部〉に着地し、そこで安定した状態になることを表している。ただし、例(50)の「いもむし」のように、決して〈飛行〉しないものであっても、その吸着性により安定した状態にあることが認められるものであれば「とまる」で表現できる。

なお、この用法では〈飛行する動物〉か、〈吸着性を持つ動物〉に限られるため、たとえ空中を移動する場合であっても、以下の例のように〈跳躍〉と捉えられる移動については、「とまる」を用いることはできない。

(51) *テーブルからジャンプした猫が私のひざにとまった。

(52) テーブルからジャンプした猫が私のひざに乗った。

また、〈飛行する動物〉であっても、例(53)の「コウモリ」の場合のように着地点が〈物の上〉ではない場合も通常、「とまる」は用いられない。

(53) *コウモリが木の枝にとまっている。

(54) コウモリが木の枝にぶら下がっている。

さらに、着地点は〈物〉である以上、当然、ある程度の高さや幅などをもち、特定される必要がある。そのため、例(55)の「プール」のような多くの物の集合体である施設の場合、着地点が特定できず、「とまる」の文としては容認されない。

(55) *とんぼがプールにとまっている。

しかし例(56)の場合は、「水面」という語によって、着地点が貯水部の上部であることが特定されるため、自然な文となる。

(56) とんぼがプールの水面にとまっている。

以上を踏まえ、これらの例における「とまる」の語義は〈飛行する動物が〉〈物の上まで飛んで来て〉〈そこに安定する〉と記述できる。

4.8. まとめ

以上、動詞「とまる」の意味について、用例にもとづき考察してきた。

その結果、7つの別義が確認できた。

語義間の意味的関連性については次の5節で検討する。

5. 多義構造

5.1. プロトタイプ的意味の認定

これら複数の意味の全体を1つのカテゴリーと考えた場合、より基本的な意味であると直観的に感じられる意味、すなわちプロトタイプ的意味はどのようにして示すことができるだろうか。靑山(2021: 70)に従えば、まず、他の意味に比べて用法上の制約がないものがプロトタイプの意味とされる。本稿もこの認定方法に従い、活用形等、いくつかのテストを行い、その結果を下表に示す。なお、各別義の意味を端的に示したものを〔 〕に記す。

		〔別義1〕 〔停止〕	〔別義2〕 〔制止〕	〔別義3〕 〔終止〕	〔別義4〕 〔阻止〕	〔別義5〕 〔固定〕	〔別義6〕 〔宿泊〕	〔別義7〕 〔着地〕
受身		×	△	×	×	×	○	×
使役		×	○	×	×	×	○	○
継続		×	×	×	×	×	×	×
尊敬		×	○	×	×	×	○	×
意思		×	○	×	×	×	○	×
結果・完了		○	○	○	○	○	○	○
名詞修飾		○	○	○	○	○	○	○
複合動詞	前項	-続ける	-出す	-かける	-切る		-続ける	-損ねる
	後項		行き-	下げ-				

複合名詞	前項							-込み	-木
	後項		行き-	下げ-				寝-	

上表を見ると、別義2と別義6は構造上の制約が相対的に少ないことがわかる。ただし別義6は、主体が〈人〉に限定され、また〈宿泊地〉という要素を必要とするため、意味要素の面で制約があると言えるだろう。そのため、別義2が構造的にも、意味的にも制約の少ないプロトタイプの意味と考えられる。なお、別義7は構造的にも意味的にも制約がもっとも多いと考えられ、周辺の語義と位置付けられる。

5.2. 意味的関連性

4節において、用例をもとに「とまる」の別義を示した。以下に再掲する。

別義1 〈それまで続いてきた物事の活動や生理現象が〉〈ある時点でなくなる〉

別義2 〈一方向的な動きをしていた人や物が〉〈ある地点の先に進まなくなる〉

別義3 〈一方向的な変化をしている事象が〉〈それ以上変化しなくなる〉

別義4 〈それまである物の内部から出ていた物事が〉〈外に出なくなる〉

別義5 〈ある面にある物を重ねて〉〈そこに何かが突き通されることによつて〉〈その面から離れないようになる〉

別義6 〈人が宿泊地で夜を過ごす〉

別義7 〈飛行する動物が〉〈物の上まで飛んで来て〉〈そこに安定する〉

ここでは、3節で見た比喻をもとに、各語義間の関連性を考察する。

5.1において、別義2をプロトタイプの意味と認定したが、まずこの語義と別義1の関係を検討しよう。別義2の〈一方向的な動きをしていた〉と

いう特徴は、別義1の特徴〈それまで続いてきた物事の活動〉のうち、「方向性を付した移動」に特殊化したものと言うことができる。なおかつ、別義2の〈ある地点の先に進まなくなる〉という空間的移動を表す特徴は、別義1の〈それまで続いてきた物事の活動がある時点でなくなる〉を特殊化したものでもある。以上から、別義1と別義2はシネクドキーの関係にあると考えられる。

次に別義3について見てみる。別義3の〈一方向的な変化〉及び〈それ以上変化しなくなる〉という特徴は、別義2の〈一方向的な動き〉と〈ある地点の先に進まなくなる〉という空間的な動きを変化の領域へと写像したメタファー拡張によるものだと考えられる¹²。

別義4の〈それまでである物の内部から出ていた物事が〉〈外に出なくなる〉という特徴は、別義2の〈一方向的な動きをしていた物が〉〈ある地点の先に進まなくなる〉という特徴をさらに特殊化したものだと考えられる。なぜなら、「内から外へ」という動きは、一方向的な動きの一つであるからである。したがって、別義4は別義2とシネクドキーの関係にあるということになる。

別義5は、ある物体がある面に固定されることを表している。この事態は、語義1の〈それまで動いていた物事が動かなくなる〉という特徴が、〈(落下等で)動く可能性のある物に、ある物を突き通すことによって、ある面から離れないようにする〉という、より特殊な状況を指す用法として成立している語義と考えられる。したがって、別義1とシネクドキーの関係にあると言えるだろう。

別義6は、人が、ある場所において夜を安全に過ごすことを表す。これは語義5の〈ある面にある物を重ねて、その面から離れないようになる〉という特徴を、人間活動を表す領域への写像によって、〈人が宿泊地で夜を過ごす〉という語義へメタファー拡張させたものである。

最後に、別義7について考察したい。この語義は、語義2における〈一方向的な動き〉が〈飛行移動〉に特殊化されて成立したものと考えられる。

さらに、その主体も〈飛行動物〉に限られる。そして、それがその地点の先に進まない、つまり、その場所で安定化する事態を表している。以上から、別義7は別義2とシネクドキー関係にある語義だと考えられる。

以上の関係性を下図にまとめる。

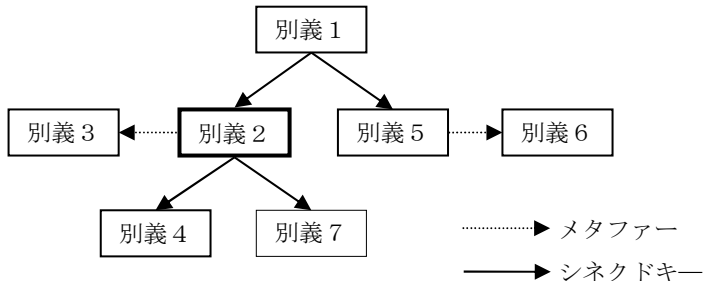


図 3 「とまる」の多義構造

図 3 に示した各別義の枠の太さは、5.1 で論じたプロトタイプ性を示している。

以上の分析により、「とまる」の各語義は、メタファーとシネクドキーに支えられたスキーマティック・ネットワークモデルによって構造化されていることがわかった。

6. おわりに

本稿では現代日本語の動詞「とまる」を用例に基づき分析し、7つの別義の詳述を行った。そして、各別義は構造的、意味的な制約の多寡により、プロトタイプ性に差があることを確認した。それから、各別義はメタファー、シネクドキーという2つの比喩によるスキーマティック・ネットワークモデルを形成し、意味的に関連付けられていることが示された。

用例の出典

用例コーパス：「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)

参照辞書

北原保雄（編）（2021）『明鏡国語辞典』第三版、大修館書店、東京。

参考文献

梶川克哉（2023）『『とめる』の多義分析』、『愛知文教大学論叢』第25巻、pp.15-33.

國廣哲彌（1982）『意味論の方法』、大修館書店、東京。

辻幸夫（編）『新編 認知言語学キーワード事典』、研究社、東京。

萩山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』、研究社、東京。

萩山洋介（2014）『日本語研究のための認知言語学』、研究社、東京。

萩山洋介（2019）「多義語分析の課題と方法」プラシャント・バルデシ他（編）『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』、pp.32-50、開拓社、東京。

萩山洋介（2021）『[例解] 日本語の多義語研究 認知言語学の視点から』、大修館書店、東京。

Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar (Vol. 1)*, Stanford University Press, Stanford.

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar : A Basic Introduction*, Oxford University Press, Oxford.

-
1. 本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明（基本動詞ハンドブック作成班）」の研究成果を報告したものである。
 2. 漢字の表記として「止」「停」「留」「泊」が充てられるが、本稿ではひらがな表記で統一する。
 3. 「とめる」の分析については梶川（2023）を参照のこと。
 4. 本稿では、分析対象語に下線を付し、考察対象以外の部分で問題とする

部分には点線の下線を付す。また、用例の出典は（ ）によって示し、出典のないものは執筆者による作例である。

5. 「同音異義語」については下記の定義に従う。

「同音異義語」とは、同一の音形に、意味的に関連を持たないふたつ以上の意味が存在する場合に生じるふたつ以上の語のことである。(國廣 1982: 97)

6. 文頭の「*」はその文が非文であることを表し、「?」は容認度が低いと判断されることを表す。

7. 多義語とは以下の2つの条件を共に満たす語である(靱山 2021: 3)。

- 1) 共時的に複数の意味を有する。
- 2) 複数の意味に関連性が認められる。

8. プロトタイプ的意味とは、「複数の意味の中で、(ある言語の母語話者(の大半)にとって)最も基本的な意味(であると直観的に感じられる意味)」である(靱山 2021: 15)。

9. 詳しくは Langacker (1987)、靱山 (2019) などを参照のこと。

10. 語の意味、あるいは意味を構成する要素は〈 〉で括って示す。

11. ベース (base) とは、ある言語表現の意味の基盤として選択する、特定の概念内容における主要となる部分を指す。そして、プロフィール (profile) とは、言語表現がベース内で参照し、指し示す対象として実際に知覚する部分として特徴づけられる (Langacker 2008: 66)。靱山 (2002: 52) は「昨日」という語の意味を「ベース」「プロフィール」を応用して記述している。すなわち、この語が直接関わる主要部分「ベース」としては「発話時点を含む日」と「その前の日」という「二日間」がある。そして、その中で直接指されている(「プロフィール」)されているのが「発話時点を含む日」ではなく、「前の日」ということである。

12. 写像とは元来「2つの集合間において、一方の集合の要素に対し、他方の集合の要素を1つ対応させる」ことを指す数学术語である。この「集合」を「(認知)領域」と読み替えて転用したのが、認知言語学・心理学で使われる「写像」である(辻(編) 2013: 156)。

翻訳 サマセット・モーム「とっておきのランチ」

川口 淑子

作者・作品紹介

サマセット・モーム (William Somerset Maugham 1874-1965) は人間関係や社会を写実的に描くことを得意とするイギリスの作家。パリに生まれたが、家族を亡くしてからイギリスに渡り、様々な人や社会を見た経験を持つ経験が作品にも反映されている。モームは有名な名言を多く残し、例えば、次のようなものがある。

私がたった一つのことだけなら断言できる。それは、断言できることなど、まずないということだ。(There is only one thing about which I am certain, and that is that there is very little about which one can be certain.)

ユーモアと皮肉を兼ね備えた、現代版オスカー・ワイルドのアフォリズムのようにも見えるこの名言が示すように、モームは、歯切れのよいユーモアを持つのが特徴であり、作品には面白さと深い洞察の両方が備わっている。

「とっておきのランチ」(“The Luncheon” 1924, Nash’s Magazine) では、語り手の若い男を手玉に取り、巧妙に高価な食事をご馳走させる女性が描かれる。表面的には社交マナーに反していない行儀のよい会話のやり取りがあるものの、当時40歳だったと設定されている女性のしたたかさがうまく描かれている。

作品では、ある程度の階級の人たちの中では、女性は親切に扱うべきだという当時の慣習を盾に欲しいものを手に入れる一癖ある女性が読者の目前に晒されるが、直接的に女性を批判しているというより、社会の中でこざかしく慣習を利用し、うまく立ち振る舞う人間と、そのような人間を容認する社会を描き出している。

モームは、社会の中の望ましくない要素を直接批判するのではなく、ユーモアのオブラトをかけ、読者にはしたたかな小市民の不快な行動を示すことで社会悪ともいえる慣習や人付き合いの難しさを伝えるという表現方法を取っている。

「とっておきのランチ」

シアターであの女を見かけたら、手招きされてしまったものだから、休憩時間にはあの女のそばに行って腰を下ろした。ずいぶん長く会っていなかったから、彼女の名前を教えてくれる人がいなかったら、あの女だとはまったく気づかなかつたろう。彼女は、はきはきと口を利いた。「最初にお会いしてから一体何年経ったのかしら。本当に時間が流れるのはあつという間ね。お互い、年を取るのは避けられませんね。初めてお会いした日のことを覚えていらっしゃる？あの時、昼食に誘ってくださったわね」

覚えているかだつて？

それは20年も前のことで、私はパリに住んでいた。私は、墓地を見下ろすラテン・コーナーのアパートに住んでいて、心が体から抜け出さないように押さえておけるぎりぎりの収入しかなかった。彼女は私の本の読者で本について手紙をよこしていた。私はお礼の手紙を書き、それから、彼女はパリをうろうろしているから会って話がしたいという内容の別の手紙が届いた。ただし彼女はあまり時間がないので次の木曜日しかなかった。彼女は午前中はリュクサンブール公園で過ごすので、その後、私がフォワイヨでちょっとしたランチをごちそうするというのはいかがでしょうか？というご提案だつた。フォワイヨは、フランスの上院議員が食事するような場所で、私には分不相応だから、そんなところに行こうと思ったことはなかった。しかし、私は機嫌が良かったし、若造だつたので、女性にノーと言える術はなかった。（ごくわずかな男だけが、何を言っても女性に相手

にされないほどの年寄りになってしまう前に、この技を身につけるのだと言いつけておこう。) 私はその月いっぱいやっていくための 80 フラン (金貨のフラン) なら持っていたし、そこそこのランチなら 25 フラン以上かかることはまずない。これから 2 週間コーヒーを飲むのをやめれば、十分払える金額だと思われた。

私は手紙で、木曜の 12 時半にお会いしたいと答えた。彼女は期待していたほど若い女性ではなく、見た目は、魅力的というより堂々としていると言った方がしっくりくる感じだった。実際のところ彼女は 40 歳で (悪い年齢ではないけれど、一目見て身を亡ぼすような情熱を抱かせる年齢でもないだろう) 彼女の白くて大きくて揃った歯は、食事の際にもものを噛むだけに使うには、本数が多すぎるかもしれないという印象を私に与えた。彼女はおしゃべりだったが、話す内容は大体私に関する事だったので、飽きずに注意を向けておくことはできた。

食事の料金表が運ばれてくると、思っていたよりずっと高かったので私は驚いた。だが、彼女は問題がないと保証した。

「昼食には何も食べないことにしているんです」そう彼女は言った。

「ああ、そんなこと言わないでください」私は寛容にもそう答えてみせた。

「私は、料理を一つ以上食べることはないんです。近頃では、みんなもっとたくさん食べるようですけど。お魚でもちょっといただくかしら。この店にサーモンはあるのかしらね」

サーモンの季節には早すぎて、料金表には載っていなかったが、出せるのかとウエイターに聞いてみた。はい。きれいなサーモンをちょうど入荷したところでございます。初物でございます。そう聞くと、私は私のお客のためにサーモンを注文してあげた。ウエイターは、サーモンを料理している間に、何か他のものを召し上がりますかと彼女に聞いた。

「いいえ」彼女は答えた。「私は、料理を一つ以上食べることは絶対ないのよ。お店でキャビアをちょっとだけ出せるって場合以外はね。キャビア

だったらいいのよ」

私は少々気が滅入った。私などではキャビアはとても注文できるものではなかったが、彼女に事実をうまく伝えられそうになかった。私はウエイターに、なにがなんでもキャビアを持ってくるようにと言った。私は自分用には、最も安い料理を選び、マトン・チョップを注文した。

「お肉なんか召し上がるのはよくないわ」彼女は言った。「マトン・チョップみたいな重たい食事をした後で仕事ができるものかしら。私は、胃に食べ物を詰め込みすぎないようにしているですよ」

その後、飲み物の問題を解決しなければならなかった。

「私は、ランチの時には何も飲みませんの」彼女は言った。

「私もそうなんですよ」すかさず返答した。

「白ワインは例外ね」彼女は、私の言葉は耳に入らなかったかのように続けて言った。「フランスのワインならとっても軽いわ。消化の助けにもなるのよ」

「何を飲まれますか？」私はなんとかこらえて、もてなしの気持ちが出るように言うことはできたが、もてなしたくてうずうずしていると伝わるような口調ではなかった。

彼女は白い歯を人懐こい感じに、ちらと見せた。

「私の医者にはシャンパンは以外飲んではいけないと言うんです」

多分、私は少し顔色が変わったと思う。ハーフボトルを注文し、私は医者にはシャンパンは絶対に飲んではいけないと言われていると、さりげなく伝えた。

「じゃあ、何をお飲みになるの？」

「水を」

あの女はキャビアを食べ、サーモンも食べた。そして、芸術と文学と音楽について陽気に語った。しかし、私が考えていたのは食事代は一体いくらになるのかということだった。私が注文したマトン・チョップがテーブルに運ばれてくると、彼女は食事について批判した。

「あなたは、いつもこってりしたランチを召し上がる方なのね。それは、いけませんわ。私みたいに、一品だけ召し上がってはいかが？ そうすれば、体が軽くなると思いますよ」

「私だって一品しか食べないんですよ」私がそう言った時、ウエイターが再び料金表を持ってやってきた。

彼女は、軽く手を振って、ウエイターを脇にやった。

「いえ、いえ、私はランチには何にも食べないんですよ。一口つまむだけ。それ以上はいらなんですよ。それもお喋りのおつまみにしたいだけなんですけど。とてもじゃないけど、これ以上は食べられません。お店にジャイアント・アスパラガスの用意があるっていうのでなければね。ジャイアント・アスパラガスも食べずにパリを去るなんてみじめ過ぎますもの」

私は気が重くなった。ジャイアント・アスパラガスは店で見かけたことがあるから、とんでもなく高いことを知っている。見かけると、よだれが出そうだった。

「こちらのご婦人が、ジャイアント・アスパラガスはあるのかとお尋ねなんですが」

私はウエイターに聞いた。

私は体中に力を込めて、ウエイターが「ない」と言ってくれることを願った。満足そうな笑みが、ウエイターの大きくて司祭みたいな顔に広がり、とても大きくて、上質で、びっくりなさるようなジャイアント・アスパラガスが店にあると答えた。

「私は、全然お腹はすいてませんのよ」私の客はため息をついた。「でも、あなたがぜひともとおっしゃるなら、少しアスパラガスをいただいてもいいかしら」

私は望みの物を注文した。

「あなたは召し上がらないんですか？」

「いません。アスパラガスは食べないんです」

「お好きじゃない方がいるのは知ってます。あなたは、お肉ばかり召し

上がるから、味覚が駄目になってしまったんじゃないかしら」

私たちはアスパラガスが料理されるのを待っていた。私はパニックに襲われた。

既に、今月いっぱい、なんとかやっていくために、いくら残しておくべきかという問題ではなくなっていて、食事代を払えるかどうか怪しくなっていた。10フラン足りなくて、自分の客から借りなくてはいけないなんてことになったらかっこ悪すぎる。そんなことは、絶対したくなかった。私は自分がいくら持っているか正確に把握しているから、もしも食事代がそれを上回ってしまったら、ポケットに手を入れて、大げさに叫び、財布を盗まれたと書いてやろうと決心した。もちろん、彼女も十分なお金を持っていなかったらみっともないことになる。唯一できることと言ったら、腕時計を店に残して、後で払いに来ると私が言うことだけだろう。

アスパラガスがテーブルに運ばれて来た。大きくて、水分たっぷり、食欲をそそった。溶けたバターの匂いが、誠実なセム人が差し出すグリルされた捧げものにヤハウエの鼻がくすぐられたように、私の鼻腔をくすぐった。私は、破廉恥な女が、大きく肉感的な口にいっぱいのアスパラガスを飲み込むのを見て、私なりに礼儀正しく、バルカン諸国の状況について語った。ようやく、彼女は食べ終えた。

「コーヒーでも？」と私は言った。

「そうですね。アイスクリームとコーヒーだけでいいです」と彼女は答えた。

もはや、あれこれ気にする段階は過ぎてしまったので、自分にはコーヒーだけ、彼女にはコーヒーとアイスクリームを注文した。

「確信していることがありますのよ」彼女はアイスクリームを食べながら言った。「食事が終わる頃になると、もうちょっと食べられる気がしてくるものですよ」

「まだお腹がすいているんですか？」弱々しい声で私は聞いた。

「いいえ、いいえ、お腹なんかすいてません。私はランチは食べないって

おわかりでしょう。朝食にはコーヒーを一杯だけ飲んで、それから夕食です。だけど、ランチには一品しか食べないんです。そう言いましたでしょう」

「ええ、わかってますよ！」

その後、ぞっとすることが起こった。コーヒーを待っている間に、ウェイター頭が、嘘くさい顔に愛想のよい微笑をのっけて、大きな桃がたっぷり入った籠を抱えながらこちらへやってきた。桃にはあどけない娘のような赤みがあり、それはイタリアの豊かな地形みたいだった。しかし、桃はまだ収穫時期ではないはずだ。とんでもなく高値だとおわかりだろう。とんでもない値段だと私だって思い知らされることになった。その後、私の客と会話を続けていると、あの女は、さりげなく桃を一つ手にしていた。

「あなたはお肉でお腹いっぱいなんだから」——たわいのない羊肉一品だけだったが—— 「もう何も召し上がれないでしょう。でも、私は軽いものしか食べてないから、桃くらいならおいしく食べられるわ」

勘定書きがテーブルに届けられ、支払いをすると、店にはふさわしくないチップしか払えないことがわかった。彼女の目は、私がウェイターのために残した3フランをじっと見て、けち臭い男だと判断されたのがわかった。レストランから出ると、これからまだたっぷり一ヶ月あるというのに、ポケットには小銭一つさえなかった。

「私の真似をされたら良いと思いますよ」別れの握手をしていると彼女が言った。「ランチには一品だけしか食べないようになさったら」

「もっといい食べ方がありますよ」私は皮肉っぽい口調で言った。「今夜は、夕食を摂らないことにします」

「面白い方ね！」彼女はタクシーに飛び乗りながら、陽気に言った。「あなたは、とっても面白い方だわ」

だが、最後には私は復讐をやり遂げた。私は根に持つ人間ではないが、人が動かなくても不滅の神が手を貸してくれる時には、満足して事の成り行きを見守るのもいいだろう。今日では、彼女はどっしりとした体を引き

づっている。

キャリア科目における PBL の実施

小川 現樹

1. はじめに

大学における「キャリア教育」とは、平成 21 年 7 月の中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会の「審議経過報告」において、「社会的・職業的自立に向け、必要な知識、技能、態度をはぐくむ教育。より詳しくは「一人ひとりのキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な知識、技能、態度をはぐくむ教育」。

（このうち高等教育においては、平成 12 年の大学審議会の答申「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」が、キャリア教育を「学生が将来への目的意識を明確に持てるよう、職業観を涵養し、職業に関する知識・技能を身に付けさせ、自己の個性を理解した上で主体的に進路を選択できる能力・態度を育成する教育」と整理している。）と用語解説がなされている。

2023 年現在、本学においては 1 年次から 3 年次まで「キャリア形成分野」科目が必修科目として設置されており、上記に則って授業運営を実施している。科目の構成についてはそれぞれの年次により内容は異なるが、一貫して「キャリア発達」・「自己概念の形成」・「主体性を発揮し、自律した行動」を促すための教育を行っている。中でも 2 年次一般学生の必修科目である「キャリアデザインⅠ・キャリアデザインⅡ」、2 年次留学生の必修科目である「キャリアデザイン A・キャリアデザイン B」においては、課題解決とチームワークを通じてキャリア発達と主体性を発揮することを主眼に置き、PBL (Project Based Learning) 型授業を取り入れた。

一般社団法人日本経済団体連合会 (2022) では「大学の教育面での役割は、幅広い知識や技能、専門能力の学修を通じて探究力 や社会課題の解決

能力を涵養することで、新たな時代を牽引する人材や、社会の中核で活躍する人材を育成・輩出することである。」と、大学教育に対しての期待感があることから、筆者はこれらの能力が社会に有用な人材足りうるものであるという認識を持つに至っている。

本稿は、学生たちの課題解決への取り組みからキャリア発達と主体性の発揮について、2年次一般学生の必修科目である「キャリアデザインⅠ・キャリアデザインⅡ」、2年次留学生の必修科目である「キャリアデザインA・キャリアデザインB」授業内での取組報告を、株式会社マイナビの協力の下で実施した、課題解決プロジェクトでの「振り返りシート」の結果を踏まえて報告するものである。

2. 実施対象の授業について

本学の2023年度現在の開設科目のうち、教養教育科目群のキャリア形成分野について、筆者が担当している科目は以下のとおりである。

【一般学生】

- 1年次 秋期 (必修) キャリア形成論
- 2年次 春期 (必修) キャリアデザインⅠ
- 秋期 (必修) キャリアデザインⅡ
- 3年次 春期 (必修) キャリアプランニング
- 秋期 (選択) ネゴシエーションスキル

【留学生（国際日本コース）】

- 1年次 春期 (必修) 大学の学びとキャリア設計
- 秋期 (必修) キャリア入門
- 2年次 春期 (必修) キャリアデザインA
- 秋期 (必修) キャリアデザインB
- 3年次 春期 (必修) プレゼンテーションスキル

(必修) キャリアプランニング A

(選択) SPI 特別講座 A

秋期 (必修) キャリアプランニング B

(選択) SPI 特別講座 B

このうち対象にしたのは、2022年度「キャリアデザインⅠ・キャリアデザインⅡ」、「キャリアデザインA・キャリアデザインB」である。

「キャリアデザインⅠ」は2年次一般学生の春学期開講の必修科目であり、3クラス(クラス1、クラス2、クラス3)に分かれて合計74名が履修した。「キャリアデザインA」は2年次留学生の春学期開講の必修科目であり、2クラス(クラス1、クラス2)に分かれて合計18名(科目等履修生3名含む)が履修した。

「キャリアデザインⅡ」は2年次一般学生の秋学期開講の必修科目であり、3クラスに分かれて合計64名が履修した。「キャリアデザインB」は2年次留学生の秋学期開講の必修科目であり、2クラスに分かれて合計18名(科目等履修生3名含む)が履修した。

これらの一般学生クラスと留学生クラスは同時開講されており、それぞれのクラスの構成人数は17名から40名である。なお3年次以上の再履修者も含んでいる。(2クラスは同時開講、1クラスは一般学生のみ開講)

本科目においてのディプロマポリシーの到達目標は「社会人としての基礎的な能力を習得する」であり、学修到達目標は、

- ①キャリアポートフォリオの継続的活用。
- ②社会と自分とのつながりを知り、就職に向けての準備を出来るようになること。
- ③社会人に必要なICTリテラシーの向上。
- ④社会から求められるコミュニケーション力を身につけること。

の4点を挙げている。キャリアデザインⅠの一般学生のみクラス(クラス3)においては、企業からの外部講師を招聘し企業の課題解決を主眼に

置いた授業構成をしていることもあり、

- ①キャリアポートフォリオの継続的活用。
 - ②社会と自分とのつながりを知り、就職に向けての準備を出来るようになること。
 - ③実際のビジネス現場を通じた企業様との関わり合いの中で、ビジネスの視点を養う。
- の3点を挙げている。

3. 春期授業内容とワークの実施

次頁の図1に2022年度春期のシラバスのうち、授業実施内容を示す。前述のとおり、春期は3クラス構成になっており、2クラスは一般学生と留学生の合同授業であり、残る1クラスは一般学生のみで別カリキュラムとなっている。(ここでは残る1クラスについての記述は避ける)

春期のコンセプトとしては、大きく2つある。1つ目は「社会人基礎力の習得」であり、2つ目は「仕事と自分自身のことを知ること」である。このカリキュラム構成にした理由は、就職活動の実質的な早期化により、低学年時から上記の2点について押さえておく必要があるためである。中でも、企業や社会の問題点を洗い出すことによって、「課題発見と課題解決」へのプロセスを学ぶことが出来ると考えたためである。そして個人ワークとグループワークを交えて実施することにより、社会人基礎力の3つの能力を意識しつつ授業に参加することができる。これらは秋期のPBL型授業の実施につなげていく目的がある。

春期の授業内容のうち、第8回から第10回については「企業研究」「合意形成」をテーマにした講義とグループワークを実施し、第10回にはグループでのプレゼンテーションを実施した。第12回と第13回についても「企業研究」をテーマにしているが、その中でも社会人基礎力の能力要素の一つである「課題発見力」「計画性」「創造性」の3点について、特に注

目した内容として実施した。これらは秋期 PBL 型授業に直結している。

1	オリエンテーション 2年次からの目標設定	・授業のすすめ方とキャリアポートフォリオ・月間PDCA実践シート・Classroom活用について ・キャリアデザインの考え方
2	職業興味と自己理解	・ジョン・L・ホランドの「ホランドタイプ」を参考にし、職業興味についての自己理解を進める ・職業レディネステストを実施し、結果に基づいたグループワークを行う
3	社会に出て働くということを知る	・ジョン・Dクレンボルトの「計画された偶発性」をスティーブ・ジョブズの講話から読み解く ・上記を踏まえて、目標設定と働くことについて考える
4	社会人基礎力を理解する	・経済産業省による「社会人基礎力」「新社会人基礎力」を学ぶ ・自身の社会人基礎力を知るためのワークを実施する ・今後の大学生活で、社会人基礎力をいかに高めるかのディスカッションを行う
5	コミュニケーションの重要性を知る	・アルバート・メラビアンの「メラビアンの法則」をもとに、コミュニケーションについて考える ・上記を活かしたグループワークを実施する
6	職業選択のあり方を考える	・エドガー・H・シャインの「キャリア・アンカー」を参考に、自身のキャリアにおける不動点について知る ・そのほか様々な職業選択の視点について知る
7	インターンシップについての概説	・大学生の企業への職業体験（インターンシップ）の歴史や、考え方を知る ・様々なインターンシップについての内容を知る ・夏以降のインターンシップ参加に向けての準備を行う
8	企業を知る①	企業研究の手法について学ぶことで、インターンシップ参加に向けた準備を行う。
9	企業を知る②	チームプレゼンテーションの準備として、SWOT分析・3P分析等のフレームワークを体験する
10	企業を知る③	・企業調査の結果についてのチームプレゼンテーションを実施する ・フィードバックを通じて、企業研究の進め方を深く知る
11	さまざまな職種を理解する	・アルバイト・ボランティア・その他の課業分析を通じて、職業についての構造的な知識・理解を深める。 ・自身のアルバイトや課外活動での職務から、職種への理解を深める
12	事業企画ワーク①	・これまでの授業の内容を参考にし、自分たちでビジネスを立ち上げることを学ぶ ・グループワークを通じて、新たに事業を計画する
13	事業企画ワーク②	事業企画ワーク①で計画した事業について、グループ発表を行う
14	ライフプランニングをする	カードゲームを通じて、将来のマネープランを考え、ライフプランニングについての重要性を共有する
15	総括、夏休みの過ごし方	・春学期全体の振り返りと、学びの共有を行う ・夏季休暇の過ごし方と、月間PDCA実践シートの活用について考える

図 1. 2022 年度春期 キャリアデザイン I ・キャリアデザイン A

まずは第 8 回から第 10 回に実施した「企業を知る①～③」について、授業の展開方法と個人ワーク・グループワークについて言及したい。

サブタイトルとして「企業研究の手法について学ぶことで、インターンシップ参加に向けた準備を行う」としている。

今回のワークでは、「2社を比較し、1社に新たなサービスや商品の提案」をテーマに実施している。まずは個人としての企業選択と調査を個人ワーク（課題）として実施し、それらの情報をもとにしてグループとしての企業選択と分析、新たなサービスや商品の提案についての話し合いをするようにした。話し合いにおいてはチームとしての「合意形成」することを前提にし、教員も関わりながら、学生それぞれが積極的に参画することを求

めている。

・第8回「企業を知る①」

(1) 導入

就職活動を行う上での先輩たちがしてきたこと。

株式会社ディスコの調査資料を参考に、2020卒の先輩たちがどのような準備をしてきたのかを知る。

自己分析と業界・企業研究は両輪であり、双方をバランスよく進めることの重要性について講義を実施した。

(2) 企業研究手法

実際の企業情報を参考に、企業のビジネスモデルを知るための基本的なフレームワークについての講義を実施した。

加えて次週への課題として、自身の「興味のある企業とライバル企業」の2社について、企業のIR情報からビジネスモデルを理解するためのワークシートの提出を課した。

(3) グループワークの解説

グループワークを実施するうえでの注意点、今回のグループワークの目的についてを伝えた。加えて、次週への課題を踏まえてワークを実施すること。そのためにも個人で実施する課題の重要性についても伝えた。

注意点は以下の4点のとおりである。

- ①意見を出し合うこと
- ②合意形成すること
- ③時間内に結果を出すこと
- ④効果的なプレゼンテーションを実施すること

(4) チーム分けと役割分担

今回のワークのチーム分けについては教員よりランダムに指名し、4名から6名でチームを構成した。またそれぞれのメンバーで次週までに役割分担を実施することを課した。チーム構

成は以下のとおりである。

クラス 1 7チーム（一般学生・留学生混合、再履修生別）

クラス 2 7チーム（一般学生・留学生混合、再履修生別）

・第9回「企業を知る②」

(1) 導入

第8回のふりかえりと、グループ内の役割分担等の話し合いの進捗について確認（GoogleClassroom 内での報告は課している）した。

(2) マーケティング基礎の解説

企業研究を実施する際の足掛かりとなるフレームワークは第8回で共有しているが、それに加えて2社を比較した場合のそれぞれの強みと弱みの洗い出し、さらに提案に向けての視点として、SWOT分析とクロス分析の手法を中心に講義。更に実際の企業情報を参考にしてグループごとに確認を実施した。

(3) グループワーク

役割分担に沿ってワークを実施。ここでは対象とする企業の選択と、フレームワークに当てはめた分析。そして1社に対しての提案を求めている。なおグループワークについては授業内だけで完結するものではなく、授業外（オンライン・オフライン）も積極的に集まるようにし、自分たちが立てたスケジュールに沿って進行するよう求めている。

(4) 役割分担

本ワークでは、チームを会社組織として規定。個々の役割を全うすることで、仕事が円滑に進むことの体験にもなるようにしている。役割は以下の通りである。

①リーダー（社長・代表取締役・CEO）

②司会（事業部長・COO）

③タイムキーパー（スケジュール管理責任者）

④資料作成責任者（総務部長）

リーダーは全体を把握しながら、自社が所属するグループのトップである教員への連絡もここに一元化した。出来上がったプレゼンテーション資料についても、資料作成責任者が取りまとめたうえでリーダーが精査し、GoogleClassroom上で教員まで期日中に提出することを課した。プレゼンテーション資料の提出については、授業実施日の前日までとした。

・第10回「企業を知る③」

(1) 導入

プレゼンテーションの実施マナーについて、簡単な振り返りを行い共有をした。発表順の決定方法については、ブラウザで稼働する「3Dあみだくじ」を活用。スクリーンに投影することで、不公平感を少なくする工夫をしている。

(<https://exe.tanidaiz.com/3D-Amida.php>)

(2) プレゼンテーションの実施

発表用PCに全チームのプレゼンテーションデータを用意し、各チーム7分から10分間でプレゼンテーションを実施した。発表で登壇する学生はリーダーに一任しており、ほぼ全てのチームが全員そろって登壇となった。発表についての質問および教員からのフィードバックも実施した。

(3) ふりかえり

GoogleClassroom上で、当日締め切りの振り返りシートを課題として実施した。振り返りシートの内容については、後述する秋期授業とほぼ共通のため、ここでは省く。本ワークの目的としては「企業研究の手法について学ぶこと」と「合意形成」であり、グループとして授業外での取組に慣れていただく事が大切であるため、ワークに対してどのように係わることができたのか。を問うものである。

次に第12回から第13回に実施した「事業企画ワーク①～②」について、授業の展開方法と個人ワーク・グループワークについて言及したい。

サブタイトルとして「これまでの授業の内容を参考にし、自分たちでビジネスを立ち上げることを学ぶ」としている。

今回のワークでは、文部科学省（2022）の「未来につなごう「みんなの廃校」プロジェクト」を参考にし、おもに中部地方に散在する「廃校の有効活用について考える」をテーマに実施している。廃校の選択および提案内容については、グループワークによって決定したうえで翌週のプレゼンテーションにつなげる。少子高齢化に伴う児童生徒の減少は、全国で毎年約450校程度とも言われる廃校施設の誕生も指摘している。今回のグループワークにおいては、課題発見力や計画性も重要視する。さらにチームとしての「合意形成」することを前提にすることはもとより、社会人基礎力の能力要素の一つでもある「創造性」を発揮することを狙いとしている。

・第12回「事業企画ワーク①」

(1) 導入

グループワークを実施するうえでの注意点のふりかえり。加えて今回のグループワークの目的についてを伝えた。あわせてクラスの共通認識としての廃校問題についての講義を行った。

(2) グループワーク

前回のグループワークと同様に役割分担に沿ってワークを実施。ここでは対象となる廃校の選択と、その中でどんな取り組みができるか。なおグループワークについては授業内だけでなく、授業外（オンライン・オフライン）も積極的に集まるようにし、自分たちが立てたスケジュールに沿って進行するよう求めている。

なお本ワークのワークシートとして、文部科学省のプロポーザルに利用されている「学校跡地ヒアリングシート」をもとに実施し、臨場感を高める工夫をした。

(3) チーム分けと役割分担

チーム分けについて前回と異なる点は、なるべく近くに着席している学生同士で構成したことである。4名から6名でチームを構成した。またそれぞれのメンバーで次週までに役割分担を実施することを課した。チーム構成は以下のとおりである。

クラス1 7チーム（一般学生・留学生および再履修生別）

クラス2 7チーム（一般学生・留学生および再履修生別）

本ワークでは、チームを会社組織として規定。個々の役割を全うすることで、仕事が円滑に進むことの体験にもなるようにしている。あくまでも会社として、廃校を抱える各地方自治体への提案を念頭にすることを規定しており、役割は以下の通りである。

①リーダー（社長・代表取締役・CEO）

②司会（事業部長・COO）

③タイムキーパー（スケジュール管理責任者）

④資料作成責任者（総務部長）

⑤営業・企画（5人チームが出来た場合の措置で企画責任）

プレゼンテーション資料の提出については、授業実施日の前日までとした。

・第13回「事業企画ワーク②」

(1) 導入

発表順の決定方法については、前回同様ブラウザで稼働する「3Dあみだくじ」を活用。スクリーンに投影することで、不公平感を少なくする工夫をしている。

(<https://exe.tanidaiz.com/3D-Amida.php>)

(2) プレゼンテーションの実施

発表用 PC に全チームのプレゼンテーションデータを用意し、各チーム7分から10分間でプレゼンテーションを実施した。

発表で登壇する学生はリーダーに一任しており、ほぼ全てのチームが全員そろって登壇となった。発表についての質問および教員からのフィードバックも実施した。

(3) ふりかえり

GoogleClassroom 上で、当日締め切りの振り返りシートを課題として実施した。振り返りシートの内容については、後述する秋期授業とほぼ共通のため、ここでは省く。本ワークの目的としては、特に「創造力の発揮」と「合意形成」であり、グループとして授業外での取組に慣れていただく事が大切であるため、ワークに対してどのように係わる事ができたのか。を問うものである。

4. 秋期授業内容とワークの実施

次頁の図 2 に 2022 年度秋期のシラバスのうち、授業実施内容を示す。春期同様 3 クラス構成になっており、2 クラスは一般学生と留学生の合同授業であり、残る 1 クラスは一般学生のみで春期は別カリキュラムとなっていたが、秋期は同様のカリキュラムで進化した。

春期の授業内容のうち、第 8 回から第 10 回については「企業研究」「合意形成」をテーマにし、第 10 回にはグループでのプレゼンテーションを実施した。第 12 回と第 13 回についても「廃校活用」の方策を探る中で社会人基礎力の能力要素の一つである「課題発見力」「計画性」「創造性」の 3 点について、特に注目した内容として実施した。過去 2 回の大規模なグループワークでの反省点を踏まえ、株式会社マイナビ主催の「課題解決プロジェクト」に参画するものである。本企画はビジネスコンテストのような意味合いがあり、グループ内での意見を戦わせさらに新たなアイデアを生み出す必要があることから、授業内の実施期間については第 2 回・第 5 回・第 8 回を活用し、長期にわたるため授業外の取組も重要になる。

キャリア科目におけるPBLの実施

1	オリエンテーション、前期の振り返り	・授業の進め方、月間PDCA実践シート ・春期の振り返り ・次週からのPBL企画のグループ分けを行います。
2	Project Based Learning①	①企画導入 産業構造の劇的な変化に伴い、重要性が高まっているPBL(問題解決型学習)。この科目では株式会社マイナビの提供する「課題解決プロジェクト」を活用する。企業から出された課題に授業内で取り組みます。
3	自己分析	・自分の過去の経験を振り返り、現在の自分の長所と短所を探ります ・自己分析をもとに、アピールポイントを見つけ「自己PR」づくりにつなげていきます。
4	自己PR作成	#3で実施した自己分析をもとに「自己PR文」の作成をします。 作成した自己PRは、グループ間でアウトプットし相互にフィードバックします。
5	Project Based Learning②	②中間発表(ワークの進捗状況の確認)
6	インターンシップと業界企業研究の手法	「1日職業体験」等の対応と、インターンシップの概略について振り返ります。 この單元ではおもに情報の集め方や、業種・職種・企業研究についてアプローチします。
7	企業の採用選考手法	企業はなぜ人を採用するのか？ 採用する際にはどんな視点で学生を判断しているのか？ 企業側の立場に立って考えるワークを実施します。 また、資料請求(プレエントリー)から採用内定に至るまでのプロセスを洗い出します。
8	Project Based Learning③	③グループプレゼンテーション(1グループ7分程度のプレゼンテーションを実施)
9	筆記試験対策①	採用選考の中でも、近年その重要性が増しているのが「筆記試験」です。 筆記試験にはどんなものがあるのか？その種類と傾向についてお伝えします。
10	筆記試験対策②	筆記試験の中で最もメジャーな「SPI3」について解説します。 また中間試験として、SPIの模擬テストを受験いただきます。
11	企業へのアプローチ①	エントリーとはなんだろう？エントリーシートはいつ出すもの？ エントリーとエントリーシートの概略についてお伝えします。
12	企業へのアプローチ②	エントリーシートの設問対策をします。 出題傾向によって、どのような回答があるのか。練習問題を通じて学びます。 作成したものはグループ内で共有とフィードバックを行います。
13	履歴書作成と進路登録	愛知文教大学指定履歴書の作成と、進路登録票の記載をします。
14	さまざまな就職活動について知る	就職活動は画一的なものではなく、いまは非常に多様化しています。 多様化する就職活動の実態とを知り、次年度につなげます。
15	総括、2年間の振り返り	これまで2年間の学びの総括と、次年度以降の目標設定について確認します。

図 2. 2022 年度秋期 キャリアデザインⅡ・キャリアデザイン B

はじめに株式会社マイナビによる「課題解決プロジェクト」について、その概要について触れていきたい。本学でプロジェクトに参画を始めたのが 2018 年度秋期の「キャリアプランニング」授業内においてであり、参画 5 年目にあたる節目の年となった。2021 年度には初の入賞チームを輩出したこともあり、筆者としてはその取組に期待を持ったものである。

■株式会社マイナビ「課題解決プロジェクト」概要

課題解決プロジェクトは、株式会社マイナビが実施しているオンライン完結型の企画アイデアコンテストの名称である。各企業の出題テーマ（課題）にチームで取り組み、企画書（提案資料）を提出し出題企業の審査を受ける。チーム編成は1～4名で応募が可能であり、応募対象は全国の大学・大学院・短大・高専・専門学校在学中の学生に限定される。本稿は本学が参画した2022年度シーズン2であり、対象企業は「ニトリホールディングス」であった。

以下に本ワークの取り組み内容について記載する。

本ワークの導入にあたっては、夏季休暇中（9月1日）に出題企業（ニトリホールディングス）がマイナビより公開されたため、指定のワークシートを個人で休暇中に取り組むように指示した。チーム分けについては、第2回授業までに2名～4名のチームを編成するように指示し、決められない学生については、その中でのチーム編成になる旨を確認した。

・第2回「Project Based Learning①」（企画導入）

（1）導入

株式会社マイナビより担当者様をお招きし、課題解決プロジェクトについての概要説明とニトリホールディングスのテーマについての説明を受けた。さらにコンテスト応募についての注意事項についての通達があった。

テーマは「ニトリのリソースを最大限活用し、世の中に貢献するための新規事業を立案してください」である。

（2）チーム分け

春期終了時点と対象企業発表のタイミングで、チーム分けについての注意をしたため、ほとんどのチームは学生たちの主体性が発揮されたチーム編成となった。ただし各クラス共に2チーム程度はメンバーが決まっておらず、教員からの指示でのチーム編成となった。チーム編成は以下の通りである。

- ・クラス1 9チーム（一般学生、留学生・再履修生混合）
- ・クラス2 9チーム（一般学生、留学生別）
- ・クラス3 5チーム（一般学生のみ）

あわせてリーダーの選定と連絡手段の共有を行い、今後のスケジュールと役割分担の指示をおこなった。

(3) ニトリホールディングス（株式会社ニトリ）調査結果の共有

夏季休暇中に学生に課したワークシートの課題内容は以下のようなものである。

- ①ニトリの取材記事のまとめ
- ②暮らしの中で「これ、もっと良くならないかな」「こうだったらいいのに」を抽出
- ③ニトリがもつりソース
- ④課題解決のために活用できそうなリソース
- ⑤具体的な解決策
- ⑥導入した場合の効果（ニトリ、顧客の双方）

・第5回「Project Based Learning②」（中間発表）

中間発表については、これまでの進捗状況の報告を5分程度で求めており、プレゼンテーション資料を用意しているチームについては、その場でフィードバックを実施し、第8回のチームプレゼンテーションに備えることとした。

学生に課した中間発表の内容は以下の通りである。

- ①どんなテーマか
- ②どんな意見が出たか
- ③どんな話し合いをしているか
- ④今時点での提案は何か

全チームの中間発表後はグループワークの時間とした。

・第8回「Project Based Learning③」（グループプレゼンテーション）

(1) 導入

発表順の決定方法については、春期同様ブラウザで稼働する「3D あみだくじ」を活用。スクリーンに投影することで、不公平感を少なくする工夫をしている。

(<https://exe.tanidaiz.com/3D-Amida.php>)

また、プレゼンテーション資料については、前日までに教員宛てに提出するものとし、ほとんどのチームが出そろった。最終プレゼンテーションでもあるため、株式会社マイナビより審査員を招へいし、教員とともに各チームにフィードバックを実施。「課題解決プロジェクト」本選へのエントリー方法について再度周知を行った。

(2) プレゼンテーションの実施

発表用 PC に全チームのプレゼンテーションデータを用意し、各チーム 7 分から 10 分間でプレゼンテーションを実施した。発表で登壇する学生はリーダーに一任しており、ほぼ全てのチームが全員そろって登壇となった。発表についての質問および教員・株式会社マイナビ担当者からのフィードバック。

さらに、学生同士での評価も同時に実施した。項目は以下の 10 項目について 5 段階評価とした。

1、テーマ理解度

- ・ニトリへの理解を深められているか
- ・客観的な事実・データ・比較などを用いて、本質的な課題を発見できているか

2、分析 課題の原因を突き詰めて、打ち手に至るまでのストーリーを論理的に示しているか

3、持続可能性 社会課題を解決しお客様の生活を豊かにできるか企業の成長にも繋がり持続できる内容か。

4、革新 ・ニトリでの実現可能性はあるかどうか

- ・事業の目新しさやオリジナリティがあるか

- 5、表現 考えたアイデアが誰にでもわかりやすく伝わるようにできているか
- 6、実現可能性 企業のリソースをうまく活用でき、すぐにも提案することが出来る内容か。
- 7、定義づけ チームとしての定義づけができており、議論された形跡が見られるか。
- 8、発表態度 表情、発声、視線、姿勢などプレゼンの態度に好感をもつことができたか。
- 9、チームワーク
ワークやプレゼンテーションの役割分担が明確になっているか。メンバー間のフォローができているか。
- 10、伝わったか 発表者の提案がしっかりと伝わったか。
また共感をすることができたか。

(3) ふりかえり

GoogleClassroom 上で、当日締切りの振り返りシートを課題として実施した。シートの内容については、以下の通り。

- ①自分の考えを言う事が出来たか
- ②メンバーの考えを聴く事が出来たか
- ③メンバーと協力して活動出来たか
- ④良いアイデアを出した人とその内容
- ⑤良い動きをした人とその内容
- ⑥グループワークを通じて気づいたこと・学べたこと

振り返りシートを提出した学生は、クラス1は14名（履修者33名、出席者28名）、クラス2は22名（履修者32名、出席者24名）、クラス3は15名（履修者17名、出席者17名）であった。

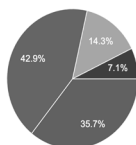
(4) クラスごとの結果

(3) の各項目について、集計した結果をクラスごとに見て

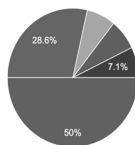
みる。①から③についてはグラフを表示し、④から⑤について個人名が表示される都合割愛する。

・クラス 1 の①から③の結果は以下の通りである。

自分の考えを言うことが出来ましたか？ (1つ選んでください)
14件の回答

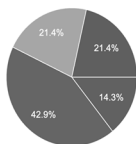


メンバーの考えを聞くことが出来ましたか？ (1つ選んでください)
14件の回答



- よくできた
- できた
- ふつう
- できなかった
- まったくできなかった

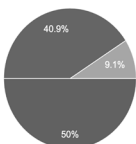
メンバーと協力して活動出来ましたか？ (1つ選んでください)
14件の回答



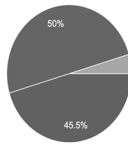
- よくできた
- できた
- ふつう
- できなかった
- まったくできなかった

・クラス 2 の①から③の結果は以下の通りである。

自分の考えを言うことが出来ましたか？ (1つ選んでください)
22件の回答

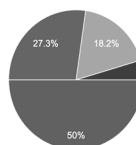


メンバーの考えを聞くことが出来ましたか？ (1つ選んでください)
22件の回答



- よくできた
- できた
- ふつう
- できなかった
- まったくできなかった

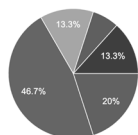
メンバーと協力して活動出来ましたか？ (1つ選んでください)
22件の回答



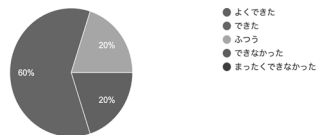
- よくできた
- できた
- ふつう
- できなかった
- まったくできなかった

・クラス3の①から③の結果は以下の通りである。

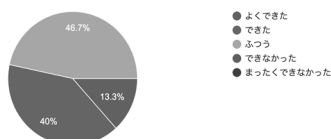
自分の考えを言うことが出来ましたか？（1つ選んでください）
15件の回答



メンバーの考えを聞くことが出来ましたか？（1つ選んでください）
15件の回答



メンバーと協力して活動出来ましたか？（1つ選んでください）
15件の回答



項目①から③の質問は主にチーム内でのコミュニケーションについて言及したものである。ワークとプレゼンテーションを通じて得られた、各クラスの印象とほぼ一致した内容であった。

クラス1について見てみると、自分の考えはメンバーに伝えられたと考えている学生が78.6%を占め、メンバーの話を聴く事が出来たと答えている学生も78.6%を占めた。これだけ見るとコミュニケーションは上手く進められたかのように見えるものの、メンバーと協力出来たかの問いでは、できたと考えている学生は57.2%に留まっている。このことからチームワークは十分に発揮できたとは言えない結果となった。加えて「できなかった」「まったくできなかった」のいずれかを回答した学生も一定数存在する。

クラス2について見てみると、自分の考えはメンバーに伝えられたと考えている学生が90.9%を占め、メンバーの話を聴く事が出来たと答えている学生も95.5%を占めた。この2項目については「できなかった」「まったくできなかった」と回答した学生はゼロであり、クラスの雰囲気の中から感じられた印象とも一致する。ただしこのクラスにおいても、メンバーと協力出来たかの問いでは、できたと考えている学生は77.3%にとどまっている点は気になる。

クラス3について見てみると、自分の考えはメンバーに伝えられたと考えている学生が66.7%にとどまったものの、メンバーの話を聴く事が出来たと答えている学生は80.0%を占めた。春期に企業様を招いてのPBLを実施したクラスであったが、話す力より聴く力を重視した結果が現れた様である。メンバーと協力出来たかの問いでは、できたと考えている学生は63.3%にとどまっている。

グループワークを通じて気づいたこと・学べたことについて、各クラスの提出者についてはほとんどが記入いただいている。おおむね春期のワークと比較しての「学び」や「気づき」について言及されていた。ただし、いわゆる「苦情」に相当するコメントも一定数見られることもあり、ワークへの導入や教員の介入を考慮する必要性を感じるとともに、社会生活に向けての学生たちの意識改革の必要性も痛感するものである。

5. 今後の授業運営に向けて

2年次のキャリア科目でのPBL企画を導入して5年。4年目に入賞チームを出したことで授業構成と運営に隙があったのか、あるいは3クラスを同じクオリティで運営する事がそもそも困難であったのかは定かではない。秋期でのPBL型授業「課題解決プロジェクト」の取組は、学生のコミュニケーション力向上には寄与したようであるが、チームで働く力の向上には繋がらなかったようである。しかしながら、杉本（2023）によると、PBL型授業の実施はキャリア・アダプタビリティ^{*1}の形成にも寄与できると捉えており、一般社団法人日本経済団体連合会（2020）は、Society 5.0に求められる能力を育成するには、大学において、少人数、双方向型のゼミや実験、産学連携の実践的な課題解決（Project Based Learning:PBL）型の教育、海外留学体験などを拡充することが有効である。と述べている。

いずれにしても、大学として学生のキャリア発達や主体性の育成を通じて社会に貢献するためには、PBLの継続的な取組は必要であると考える。ワークの運営方法やクラス編成なども含めて、今後改善を繰り返していき

たい。2023年度の授業に関しては既に取り組み方法を変えているが、ここでもまた新たな問題が生じている。次年度への課題として、春秋30コマを通じての授業内容の再構成を検討するものである。

*1 ドナルド・E・スーパーが提唱し、マーク・L・サビカスがまとめたキャリア理論。時代や環境の変化に合わせて自身のキャリアを適応するスキルをあらわし、キャリア・アダプタビリティを持つ人（適応力の高い人）の要件として「Concern（関心）・Control（統制）・Curiosity（好奇心）・Confidence（自信）」が挙げられている。

参考文献

1. 一般社団法人日本経済団体連合会（2022）「新しい時代に対応した大学教育改革の推進 - 主体的な学修を通じた多様な人材の育成に向けて -」
https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/003_honbun.pdf（最終閲覧：2023年8月21日）
2. 杉本英晴（2023）「大学低年次生を対象とした PBL 型キャリア支援プログラムの効果検証 - 興味探究活動の変化とキャリア・アダプタビリティ形成との関連 -」『関西大学高等教育研究』第14号, pp57-67
3. 一般社団法人日本経済団体連合会（2020）採用と大学教育の未来に関する産学協議会・報告書「Society 5.0に向けた大学教育と採用に関する考え方」
http://www.keidanren.or.jp/policy/2020/028_honbun.pdf（最終閲覧：2023年8月21日）
4. 文部科学省（2022）～未来につなごう～「みんなの廃校」プロジェクト
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyosei/1296809.htm（最終閲覧：2023年8月21日）

研究室ノート

(本学専任教員 abc 順、2022 年 12 月～2023 年 11 月)

- ①論著
- ②翻訳
- ③研究発表
- ④社会活動
- ⑤教育改善に関わる業績
- ⑥その他

江口 直光

①

1. 日本ワーグナー協会編『年刊ワーグナーシュンポジション 2023』(共著)
(アルテスパブリッシング、2023 年 7 月 25 日)

④

1. 公益財団法人日本高等教育評価機構大学機関別認証評価評価員 (団長)
(2023 年 4 月より 1 年間)
2. 高大連携事業講座「多文化社会ヨーロッパ」(伊那西高等学校: オンライン、2023 年 10 月 12 日)

⑤

1. 愛知文教大学副学長兼人文学部長として学長の補佐および人文学部の業務統括に携わるとともに、運営委員会、教授会、木曜ミーティングの議長を務め、教学のさまざまな問題に主導的な立場でかかわった。
2. 2022 年度に導入を決定したティーチング・ポートフォリオの本格的な導入に主導的な立場で取り組んだ。
3. アカデミアゼミ担当 (ゼミコーディネーター) として、アカデミアゼミ発表会の実施計画、および来年度以降のアカデミアゼミの運営計画につ

いて議論を主導した。

遠藤 康

④

1. 東海印度学仏教学会理事・幹事
2. 学会コメンテーター Nguyen Thanh Nhon 「ベトナム仏教復興運動—アン・ナム仏教を中心として—」、東海印度学仏教学会第 69 回学術大会、於：名古屋大学東山キャンパス、2023 年 7 月 1 日
3. 伊那西高等学校高大連携授業 「史料でたどる古代日本の仏教」、2023 年 9 月 21 日オンライン実施

⑤

1. 愛知文教大学大学院国際文化研究科長として大学院の教育活動を統括
2. 愛知文教大学大学院国際文化研究科長として大学院学生指導資料の改善を担当

畠山 大二郎

①

1. 「古典文学における「衣更え」とその様相」（針本正行編『平安女流文学論攷』翰林書房、2023 年 3 月）
2. 「『紫式部日記』における「三重」「五重」（河添房江・松本大編『源氏物語を読むための 25 章』武蔵野書院、2023 年 9 月）
3. 「衣装表現を読むということ」（『日本文学研究ジャーナル』第 27 号、2023 年 9 月）

④

1. 「平安から続く装束 十二単と東帯」、2023 年 2 月 25 日、於・ホテルオークラ
2. 令和 5 年度前期岩倉市生涯学習講座「源氏物語のよそおい」第 1 回「平安時代の服装概説」、2023 年 6 月 12 日、於・岩倉市生涯学習センター

3. 令和5年度前期岩倉市生涯学習講座「源氏物語のよそおい」第2回「平安貴族の必需品、「扇（おうぎ）」」、2023年6月26日、於・岩倉市生涯学習センター
4. 令和5年度前期岩倉市生涯学習講座「源氏物語のよそおい」第3回「装束に触れる—平安装束の着装」、2023年7月10日、於・岩倉市生涯学習センター
5. 愛知文教大学サテライトカレッジクラシック音楽講座「源氏物語—〈夕顔〉—」、2023年8月14日、於・愛知芸術文化センター
6. 愛知文教大学特別講座「デザインとしての源氏物語—夕顔を中心に—」、2023年8月14日、於・愛知芸術文化センター
7. 平安文学リレー講座第2回「夏の装束と『源氏物語』」、2023年8月26日、於・大阪府立中之島図書館
8. 「家康の衣服が語るもの」、2023年9月16日、於・NHK文化センターさいたまアリーナ教室
9. 愛知「翠曜塾」教養講座「源氏物語の色合い」、2023年9月30日、於・愛知芸術文化センター
10. 愛知県立大学公開講座「着る・触れる・学ぶ 日本古代の衣装 ～書物と復元から～」、2023年10月14日、於・愛知県立大学
11. 「『源氏物語』の装束」、2023年10月29日、於・朝日カルチャーセンター横浜教室
12. 令和5年度小牧市味岡市民センターゆうゆう学級「名古屋友禅について」、2023年11月23日、於・小牧市味岡市民センター
13. 全国大学国語国文学会 委員
14. 中古文学会 委員
15. 國學院大學國文學會 委員
16. 服飾美学会 監事
17. 中古文学会委員特定非営利活動法人〈源氏物語電子資料館〉 副代表理事

⑤

1. 授業評価アンケートに対するコメント
2. シラバス「教育成果の検証」および「今後の展望」欄
3. 2022年度秋期・2023年度春期授業公開

⑥

1. 2020-2022年度科学研究費助成事業若手研究「装束抄を用いた宮廷装束およびかさね色目の基礎的研究」（課題番号 20K12870、研究代表者）

早川 渡

①

1. 「プログラミング教育における統合開発環境の選択についての一考察」（単著）、『愛知文教大学論叢』第25巻（愛知文教大学紀要編集委員会編集、2023年2月）

④

1. 小牧市立図書館協議会 委員（2022年7月1日～）

⑤

1. 愛知文教大学人文学部自己点検・評価委員会委員長として自己点検評価書の作成、全体取りまとめおよび確認作業を担当する。

梶川 克哉

①

1. 「『とめる』の多義分析」『愛知文教大学論叢』第25巻、pp.15-33、愛知文教大学.
2. 寄稿「日本語世界で共に生きるということ」、「旭の友」編集委員会(編)『旭の友』（令和5年初秋号）、pp.36-38、長野県警察生活協同組合.

③

1. 「『～ものの』の階層性及びその逆接的意味について」第196回 現代日本語学研究会（11月4日）.

④

1. 日本認知言語学会第24回全国大会（9月2日、3日）大会実行委員
2. 現代日本語学研究会（第192回～第196回）主宰

馬 燕

④

1. 公民館講座

「中国語講座 2022」（小牧市公民館、2022.12～2023.11、全20回）

松村 美奈

①

1. 「仮名草子『浮雲物語』についての一考察—「浮雲御前」をめぐる信長・勝家—」（『愛知文教大学論叢』第25巻 2023.2）

④

1. 東海近世文学会 幹事（継続）
2. 解釈学会委員（継続）
3. 愛知大学総合郷土研究所研究員（継続）
4. 愛知文教大学公開講座「戦国武将とキリシタン音楽—豊臣秀吉の聴いた西洋の音—」（2023年1月9日実施 於 愛知芸術文化センター中リハーサル室）
5. 愛知県立春日井南高等学校評議員（2023年4月1日～継続）
6. 愛知県立瀬戸西高等学校進路説明会出張講義（模擬授業）
「江戸時代の出版文化に触れよう！もう一つの「桃太郎」を中心に」（2023年10月19日実施）

松岡 みゆき

①

1. 「『まあ』の概念的意味について」（『愛知文教大学 教育研究』第13号、愛

知文教大学教職課程研究センター, pp.13-24, 2023年3月

2. 『『さあ』が内包する概念について』『KLS Selected Papers 5』, 関西言語学会, pp.19-34, 2023年6月

③

1. 「外界事象を『受け入れる』—『あ』とその長音化形態が担うもの—」, 第1回 言語×文化研究会研究発表, 2023年8月

④

1. 「『あ』のひとことに込めるいろんな気持ち」, 小牧市東部市民センター 令和5年度東部ゆうゆう学級 第7回講座, 2023年9月

西口 智也

④

1. おおぞら高等学院岡崎キャンパス 特別授業「はじめての中国語～漢詩を音読してみよう～」 2023年2月15日
2. 日本聞一多学会 理事 (継続)
3. 全国漢文教育学会 評議員 (継続)

⑤

1. 中国語検定試験 (HSK) 対策指導担当
2. ICT ツールを活用した双方向型の自主学習支援 (HSK 自由作文問題対策) 担当

西脇 幸太

①

1. 『Vision Quest English Logic and Expression II Ace』(文部科学省検定済教科書・高等学校外国語科用) 野村恵造、山崎のぞみ、内田諭、今野勝幸、西脇幸太、Barnaby Ralph、Richard Caraker、Carl Eldridge、新興出版社啓林館編集部 (著)、新興出版社啓林館、2022年12月。
2. 『Vision Quest English Logic and Expression II Hope』(文部科学省検定済教科書)

科書・高等学校外国語科用) 野村恵造、山崎のぞみ、内田諭、今野勝幸、西脇幸太、Barnaby Ralph、Richard Caraker、Carl Eldridge、新興出版社啓林館編集部(著)、新興出版社啓林館、2022年12月。

3. “The Semantics of the Intransitive *Eat Up/Drink Up* in Imperative Sentences” 『英語語法文法研究』第29号、pp. 83-99、2022年12月。
4. 「Lemma 化の危険性：one’s を例に」 『立命館言語文化研究』第34巻第3号、pp. 27-38、2023年3月。
5. 『Vision Quest English Logic and Expression II Ace Teacher’s Manual』 Vision Quest English Logic and Expression II Ace 編集委員会・啓林館編集部(著)、新興出版社啓林館、2023年3月。
6. 『Vision Quest English Logic and Expression II Hope Teacher’s Manual』 Vision Quest English Logic and Expression II Hope 編集委員会・啓林館編集部(著)、新興出版社啓林館、2023年3月。
7. 「Check out new titles」 『英語教育』2023年6月号 第72巻第3号、p. 75、2023年5月。
8. 「Check out new titles」 『英語教育』2023年9月号 第72巻第7号、p. 78、2023年8月。
9. 「Check out new titles」 『英語教育』2023年12月号 第72巻第10号、p. 76、2023年11月。

③

1. 「他動詞 eat の目的語省略のその後の展開」現代英語談話会第98回例会、於：京都大学、2023年7月8日。

④

1. 大学英語教育学会関西支部学習英文法研究会 副代表、2019年4月～。
2. 英語語法文法学会 運営委員、2020年4月～。
3. 英語語法文法学会 事務局長、2022年4月～。
4. 「英語言語学入門」愛知啓成高校生向け愛知文教大学・愛知文教女子短期大学オープンキャンパス、於：愛知文教女子短期大学、2023年3月8日。

日.

5. 「英語による発信力を向上させるためのポイント」愛知文教大学・長野県私立伊那西高等学校 高大連携事業「オンライン大学講座」、2023年11月9日.

小川 現樹

④

1. 厚生労働省「就職ガイダンス」講師（2015年度～）
2. 岐阜市特別職非常勤職員（水防）（2018年度～）
3. 中部学生就職連絡協議会連合会 特別会員（2014年度～）
4. 人材育成研究会 主宰（2009年5月～）
5. 一般社団法人日本キャリアデザイン学会 代議員（2023年度～）
6. 茨城県産業戦略部労働政策課雇用促進対策室主催
「企業の採用力強化プログラム」講師（2023年6月～8月）
7. 愛知県立春日井東高等学校 出張授業（総合的な探求の時間）
「キャリアの考え方とキャリアポートフォリオ」（2023年11月9日）
「目標設定とPDCAサイクル」（2023年11月16日）

⑤

1. PBLの継続実施（2年次必修科目 キャリアデザイン□、□、A、B）
（文科省みんなの廃校プロジェクト・マイナビ課題解決プロジェクト）

佐藤 良太

③

1. 愛知文教大学「学び合う学び研究所」明治教育雑誌から読む〈学校〉
(2023年10月28日)

④

1. 名古屋市立山田高等学校 明治大正の怪異譚（2023年3月17日）
2. サテライト「信長学」要請された〈信長イメージ〉（2022年12月10日）

3. 日本キリスト教文学会関西支部（2014年7月～至現在）
4. 佛教大学国語国文学会（2003年4月～至現在）
5. 阪神近代文学会（2010年5月～至現在）

竹中 烈

①

1. 「不登校言説の現代的諸相—不登校各種実態調査結果をふまえて—」(『愛知文教大学比較文化研究』第16号、2022年)

③

1. 「オルタナティブスクールの学びの在り方に関する—考察—社会的ネットワークという視点から—」（日本教育社会学会第75回大会口頭発表）

④

1. NPO カタリバ「令和5年度文部科学省いじめ対策・不登校支援等推進事業『いじめ・不登校等の未然防止に向けた魅力ある学校づくりに関する調査研究』」アドバイザー
2. 一般財団法人こまき市民文化財団理事（2020年4月1日～）
3. 小牧市社会教育委員（会長）（2019年4月1日～）
4. 小牧市教育振興基本計画推進会議委員（2020年4月1日～）
5. 小牧市市民活動促進委員会委員（2017年4月1日～）

⑥

1. 2020–2022年度科学研究費助成事業基盤研究(C)「オルタナティブ教育の中間支援組織に関する横断的・縦断的研究」（課題番号 20K02440、研究分担者）
2. 2021–2024年度科学研究費助成事業基盤研究(C)「オルタナティブ教育における教育内容の質保証を見据えた官民協働モデルの開発的研究」（課題番号 21K02288、研究代表者）
3. 2022–2024年度科学研究費助成事業基盤研究(C)「「非営利型」民間フリースクールの持続可能な運営システムの解明と検証」（課題番号

22K02244、研究分担者)

富田 健弘

④

1. 羽島市国際交流協会 会長 (2019.5～)
2. 小牧市国際交流協会 理事 (2015.5～)
3. 津島北高等学校評議員 (2020.4～)
4. 小牧市文化財啓発事業調査研究受託委員会 委員 (2014.5～)
5. 羽島市社会福祉法人万灯会評議員選任・解任委員会外部委員 (2017.4～)
6. 社旗福祉法人養徳福祉会ハチスチルドレンズセンター外部委員 (2017.4～)
7. 社会福祉法人万灯会苦情対応規程に定める苦情解決第三者委員 (2019.6～)
8. はしまふるさと福祉村 村長 (2018.4～)

辻 千春

①

1. 「ポストコロナ時代のオンラインを活用したグローバル教育一科目「e-Tandem Learning 中国語」における授業改善を通して一」『教育研究』第13号、1-12p、愛知文教大学教職課程研究センター (2023年3月)

④

1. 愛知県小牧警察署国際化問題アドバイザー (2016年12月～)

⑥

『HSK 単語攻略ワークシート』(入門初級テキスト『場面で学ぶおもてなし中国語』別冊) あるむ (2023年4月)

内田 吉哉

①

1. 「『尾張名所図会』に描かれた酒」(『愛知文教大学比較文化研究』第 17 号、2023 年 2 月)

④

1. 「『尾張年中行事絵抄』に見る尾張名古屋の暮らし」(愛知文教大学連携市民講座、於：小牧市市民会館、2022 年 12 月 3 日)
2. 「身近な暮らしの歴史を学ぶ—江戸時代の尾張のお酒事情—」(愛知文教大学学び合う学び研究所セミナー、於：愛知文教大学、2022 年 12 月 3 日)

注

- (1) 二〇一六年には、早稲田大学の石川博氏、飯塚里志氏、シモセラ・エドガー氏らによって、ディープリング技術を活用した白黒画像のカラー化に関する研究成果が発表されている
(<https://www.waseda.jp/top/news/41530>)。二〇一三年一〇月一日閲覧
- (2) 以下、『尾張年中行事絵抄』の引用は、すべて東洋文庫所蔵本『名古屋叢書三編』、名古屋市教育委員会、一九八八年)による。なお引用に際しては通行字体に改め、適宜句読点・括弧・傍線等を付した。
- (3) 以下、『尾張名所図会』の引用は、すべて国立国会図書館蔵本による。
- (4) 廣庭基介「京大『大惣本』購入事情の考察」(京都大学文学部国語国文学研究室『京都大学蔵大惣本稀書集成』別巻、臨川書店、平成九年一月)
- (5) ミギー・デイルン「貸本屋大惣の改装表紙から見る文化・文政・天保年間の合巻の仕入れ」(『第41回国際日本文学研究集会会議録』、人間文化研究機構国文学研究資料館、二〇一八年三月)
- (6) 前掲注4論文、廣庭氏によると、滝沢馬琴・十返舎一九・為永春水・太田蜀山人らが来店し、また近代に入っても坪内逍遙・二葉亭四迷・尾崎紅葉・幸田露伴といった著名人が訪れた記録があるとされる。
- (7) 『東都歳時記』の引用は、すべて国立国会図書館蔵本による。
- (8) 『江戸名所図会』の引用は、すべて国立国会図書館蔵本による。
- (9) 『守貞謄稿』の引用は、すべて国立国会図書館蔵本による。なお引用に際しては通行字体に改め、適宜句読点・括弧・傍線等を付した。
- (10) 『特別展 盛り場―祭り・見世物・大道芸―』(名古屋市博物館、平成一四年九月)の解説による。

此日、未の刻頃より昼旗と号て紅白のはたを打上るなり。夜に入てはさまぐのからくりをなす。
其仕懸としていろ／＼の作りものを川中に立置て陸より綱を張たるに道火とて此つなに火をつくれば其作
り物にうつりて焼出し其火消ると忽に種々の形あらわるなり。

尾張において、川辺でおこなわれる天王祭といえは津島天王祭が有名であるが、かつては清洲でも盛大な祭礼が行われていた。川面で行われる催しとして「からくり花火」というものがある(図15)。これは、「障子を二枚張り合わせた中に導火線をめぐらせ、引火すると絵が浮かびあがるような仕掛け」であったとされる(10)。『尾張名所図会』後編巻三の十二丁裏と十三丁表にも同様のからくり花火が描かれる(図16)。『尾張年中行事絵抄』の挿絵では、ハマグリによつて蜃気楼が生み出されるという古代中国の考えに基づいて、そうしたからくり花火の様子が見られる(図17)。しかし実際にこのからくり花火がどのような構造で、どのように見えるものだったのかは判然としない。

五 小結

本稿では『尾張年中行事絵抄』という史料について、挿絵の彩色はおそらくは絵師自身の見聞に基づいたものであるという推定のもとに検討を加えてきた。『尾張年中行事絵抄』は、色彩情報の確かさという面では、モノクロでしか残らない近代の写真画像や、それをもとにしたAI技術によるカラー化を上回る史料であるといえよう。

近世の尾張名古屋については、今回扱った『尾張年中行事絵抄』の他にも高力猿猴庵の手になる彩色画の地誌類が多く残されている。これらを活用することで、より近世の色彩をよみがえらせることも可能になるのではないだろうか。

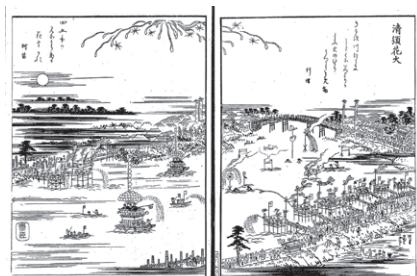


図 16 清須花火（『尾張名所図会』後編巻三、国立国会図書館所蔵）

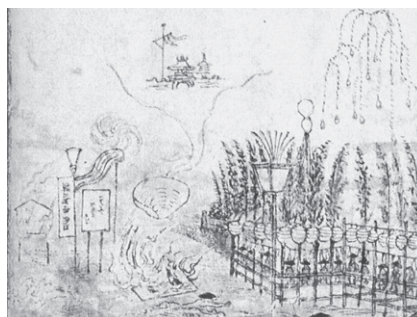


図 17 清洲天王祭花火（部分）（『尾張年中行事絵抄』六月之部下九、東洋文庫所蔵）

在では鎮皇門のあった場所で神事を行っているが、かつては楼上まで神輿を担ぎあげる形態であったことを挿絵と説明の両方から知ることができる。

ここまで、彩色画であることから得られる新しい知見についてみてきたが、一方で彩色の精密な挿絵であるがために生じる疑問もある。『尾張年中行事絵抄』「六月之部下九」の六丁裏と七丁表に描かれる「清洲天王祭花火」の情景の中に、実際の様子がどうであったのか判別しにくい不思議な光景が描かれている（図14）。

きよすずてんわうまつりはなび
清洲天王祭花火

（後略）

これは現在は五月五日に行われている神輿渡御神事の情景である。現

しんかう しだい あらましきき あらはし
神幸の次第は荒増前に著たれ
かしろがき およぼす かけはし
ばくわしく頭書に不及。棧橋へ
みこし あげたてまつ とまき がくにんさいう たち
神輿を上奉る時、楽人左右に立
むか おんがく がつさう おほうちんど
向ひて音楽を合奏す。大内人、
じんぐわん そのほかあつくはん しんじんみこし みつな
神官、其外衣冠の神人神輿の御綱
を採て閣上へ曳上奉るなり：
かくじやう ひきあげたてまつ

さらに別の例として、同じく『尾張年中行事絵抄』「五月之部下七」の十一丁裏と十二丁表に描かれる「熱田宮鎮皇門神幸」を挙げたい(図13)。これは熱田神宮の境内西側に位置する門と、そこで行われる神輿渡御神事の様子を描いたものである。この鎮皇門は旧国宝指定を受けた建造物であったが、昭和二十年(一九四五)に戦災によって焼失した。幸いにして

戦前に撮影された写真画像が残され、熱田神宮公式インスタグラムでも公開されているのだが、その画像は当然ながら白黒写真である。鎮皇門を彩色画で描いた作例は、『尾張年中行事絵抄』の他に「熱田宮全図」(西尾市岩瀬文庫蔵)があるものの、これは熱田神宮の全景を描く構図であるため、画面における鎮皇門の占める割合は小さい。『尾張年中行事絵抄』に彩色画で描かれる鎮皇門は、戦前の写真や「熱田宮全図」と比較しても、高力猿猴庵がその目で見た精度の高い色彩情報を提供してくれるものといえるだろう。この挿絵には、神輿が鎮皇門の楼上へ登る様子が描かれており、次のような説明が記される。

あつたのみやちんくはうもんへしんかう
熱田宮鎮皇門神幸

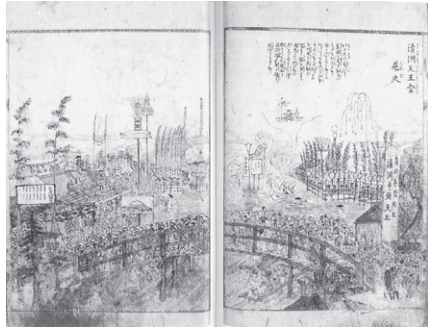


図14 清洲天王祭花火(『尾張年中行事絵抄』六月之部下九、東洋文庫所蔵)

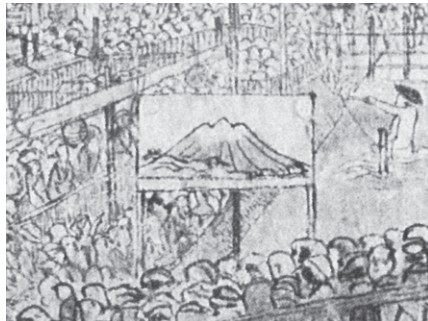


図15 清洲天王祭花火(部分)(『尾張年中行事絵抄』六月之部下九、東洋文庫所蔵)

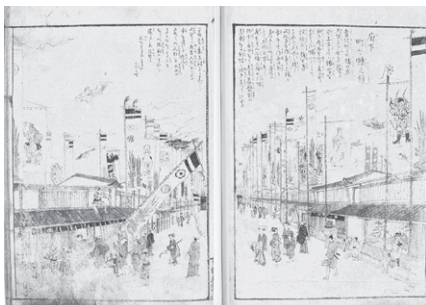


図12 府下町々幟之鏘（『尾張年中行事絵抄』五月之部下七、東洋文庫所蔵）

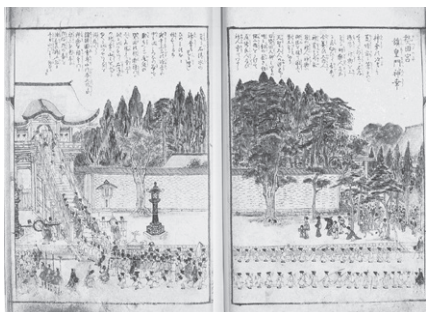


図13 熱田宮鎮皇門神幸（『尾張年中行事絵抄』五月之部下七、東洋文庫所蔵）

「京大坂にも無き」と述べられるように、各家が競うように長大な幟旗を立てる様子が描かれるが、中でも鯉のぼりがきわめて写実的な魚の形を模していることは興味深い。

「当地町々の幟は京大坂にも無き観なる由。上方にては幟竿を細き丸太を以て立る故に高からず幟小さくして縮緬或は絹を用ゆ。されば丈、巾も短く又何方も内庭に立飾る事にして、門毎の軒に立つるにはあらず。当所のごとく大竹を竿とし、唐もめん二幅、三幅の大幟は、他国は無由なり…（後略）」

（尾張年中行事絵抄）

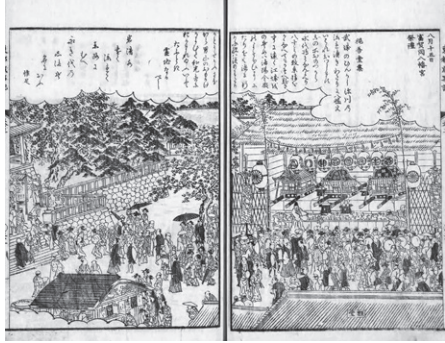


図10 八月十五日富賀岡八幡宮祭礼（『東都歳時記』四卷付録一卷、国立国会図書館所蔵）

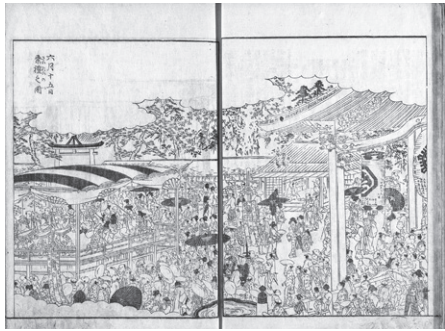


図11 六月十五日祭礼之図（『江戸名所図会』六卷、国立国会図書館所蔵）

日傘については、江戸や大坂においては文政・天保年間に幕府による禁止令が出されており、『守貞謄稿』にそのことが記されている⁹⁾。

『守貞謄稿』

天保府命ノ時、大坂ノ官命ニ男子日傘、婦女ノ羽折ヲ禁止アリ。

日傘ニ羽折
ヨキナリ

江戸ハ文政中男子日傘ノ禁止アリテ無用之。故ニ官命

ニ及ハズ 追考寛延三年青紙ノ小傘ヲ用
ユリヲ禁スト云ハ婦女ノ一也

これによると、大坂では天保

年間（一八三二〜一八四五）、

江戸では文政年間（一八一八〜一八三二）に男性が日傘を用いることが禁じられたとされる。あるいは天領である三都と尾張藩内の都市である名古屋との間で風俗統制の差異があらわれたという側面もあるかもしれない。

同様に名古屋市中の鮮やかな色彩をうかがい知ることができる挿絵として、『尾張年中行事絵抄』「五月之部下七」の一丁裏と二丁表に描かれる「府下町々幟之鏝」と題される図がある（図12）。これは端午の節句の際に市中に掲げられる幟旗の壮観を描いたものである。挿絵に付された説明には次のように記される。

なごやのまちまぢのぼりのかざり
府下町々幟之鏝

ほかに、『尾張年中行事絵抄』「四月之部上四」一〇丁裏と十一丁表に描かれる「御祭礼車引始」(図7)と、「五月之部下七」の九丁裏と一〇丁表に描かれる「熱田郷町々より献る馬頭」(図8)、さらに「四月之部五」の十九丁裏と二〇丁表に描かれる、東照宮の四月の祭礼の際の行列を見物する人々を描いた挿絵の三つを挙げる(図9)。それぞれ祭礼の様子と、それを見物する人々の賑わいを描いたものである。これらの挿絵の中で目を引くのが、色とりどりの日傘が描かれる点である。

『尾張年中行事絵抄』に制作年代の近い通俗地誌として『江戸名所図会』(天保五年〜七年(一八三四〜一八三六)刊行)および『東都歳時記』(天保九年(一八三八)刊行)に描かれる祭礼の見物人の様子を検討すると、日傘をさす人物は見られるものの、その数は『尾張年中行事絵抄』と比べて極めて少ない。(図10)は『東都歳時記』四巻付録一卷のうち、二〇丁裏と二十一丁表に描かれる「八月十五日富賀岡八幡宮祭礼」の図である⁷⁾。また(図11)は、『江戸名所図会』六巻の一〇丁裏と十一丁表に描かれる「六月十五日祭礼之図」である⁸⁾。



図8 熱田郷町々より献る馬頭(『尾張年中行事絵抄』五月之部下七、東洋文庫所蔵)



図9 東照宮の祭礼行列を見物する人(『尾張年中行事絵抄』四月之部五、東洋文庫所蔵)



図6 所外おどり (『尾張年中行事絵抄』七月之部全十二、東洋文庫所蔵)

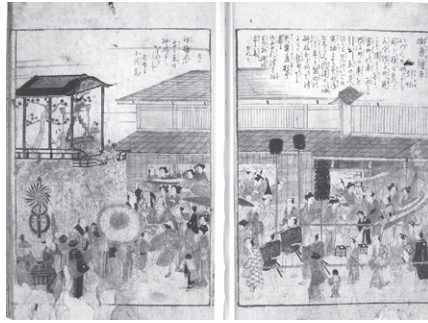


図7 御祭礼車引始 (『尾張年中行事絵抄』四月之部上四、東洋文庫所蔵)

を一興とす」と述べられるように、頬かむりの男性が揃いの着物を端折って下着もあらわにおもしろおかしく踊る様子が描かれている。ここで注目されるのは、列をなして踊る男性たちの着物の合間からのぞく「ふんどし」の色である。その色合いは赤もしくは灰色で、踊りの衣装の一部であるかのように揃えられていることがわかる。文化財として見た場合、染織品は劣化しやすいため残りにくく、加えて肌に直接身につける下着類ともなると伝存品から当時の実態を推測することは非常に困難といっている。そうした意味からは「いたって下品」と説明されるこの挿絵ですら、もたらす色彩情報は貴重なものであるといえよう。

所外おどり

此おどりは、その身ぶりもうたの

文句も至て下品なるものなり。

下賤の者たのしみにして、大げ

なる馬鹿らしきさまを

一興とす。さればそのうたも阿方

口をいふなり…(後略)

「身振りも歌の文句もいたって

下品」「大げなる馬鹿らしきさま

を画する營業方針の結果、大惣が所蔵する蔵書数は最終的には二万四千一冊にも及んだ⁽⁵⁾。こうなると大惣は単なる貸本屋ではなく、さしずめ図書館とでもいえそうな機能を備えた一大文化施設の趣きをそなえ、その存在は名古屋のみならず江戸や上方の文人にまで広く知られるところとなった⁽⁶⁾。

他に貸本屋としての大惣の特徴として、その蔵書の中に自店で独自に作らせた書写・肉筆本があることが挙げられる。こうした本の一つが『尾張年中行事絵抄』である。『尾張年中行事絵抄』の挿絵があざやかな彩色画であるのは、こうした事情によるものである。

名古屋が日本中に誇る名店であった大惣であるが、近代に入ると各地における公共図書館の設立や、洋紙を用いた本の普及にともなつて衰退し、明治三十二年には廃業することになる。廃業にともなつてその膨大な蔵書は東京帝国大学・京都帝国大学・東京専門学校・帝国図書館などに分譲されることになった。現在もつとも手軽に見ることができるのは、東洋文庫所蔵本の影印本を名古屋市教育委員会が『名古屋叢書三編』として刊行したものであり、本稿の考察もこの影印本によっている。

四 『尾張年中行事絵抄』に描かれた江戸時代後期の色彩

さて『尾張年中行事絵抄』の挿絵が彩色画である特性を活用して、近世尾張名古屋の年中行事や風俗に関する色彩について考察してみたい。

まずは近世尾張名古屋の色彩について知見を得られる事例として、『尾張年中行事絵抄』「七月之部全十」の十三裏と十四丁表に描かれる「所外おどり」の挿絵を挙げたい(図6)。この踊りは秋七月に行われるものであるが、『尾張年中行事絵抄』では、挿絵の中に次のような説明が添えられている。

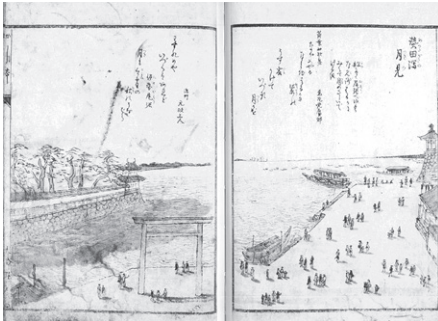


図5 熱田瀉月見（『尾張年中行事絵抄』八月之部中十二、東洋文庫所蔵）

見」と題して熱田の浜における月見の情景が描かれる（図5）。七里の渡の海際に面して尾張藩の東浜御殿が描かれており、月の明かりに照らされて海面に影が落ちる様子が描かれる。

三 近世の尾張名古屋が誇る貸本屋「大惣」

『尾張年中行事絵抄』は、もとは「大惣」という貸本屋が所蔵していたものである。大惣は名古屋の城下、長島町通六丁目（現在の名古屋市中区錦二丁目付近）に店舗を構えていた。大惣は、代々の屋号である大野屋惣八を略して名乗ったものである。明和年間（一七六四～一七七二）に開業し、明治三十二年（一八九九）まで営業を続けた。貸本屋は近世中期から盛んになった職業である。文字通り、購買料を取って書籍を貸し出す商いであり、その営業形態としては店舗をかまえて客を待つものと、新刊書籍を荷負い、得意先を回って配本するものがあつた。『誹風柳多留』に貸本屋を詠んだ川柳がいくつか収載されており、その中に「貸本屋唐と日本を背負てくる」（『誹風柳多留』四八三〇）というものがあるなど、得意先回りをするスタイルが広く親しまれていたようである。それに対して大惣は店舗を構えて営業するスタイルを取り、「顧客まわりをしない」ということは大惣の家訓として伝えられた不文律の一つだったとされる⁽⁴⁾。もう一つの家訓として、「店で所蔵した書籍は他に転売しない」というものがあり、これは当時の貸本屋事情からすると相当に特異なものであるといえよう。多くの貸本屋は顧客の要望に応えるため流行の本をそろえる必要があり、そうすると自然、要望の少ない本については次々と売却していくことになっていたのである。こうした他の貸本屋とは一線

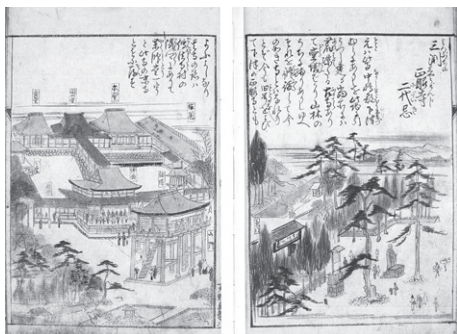


図3 三瀨正眼寺二代忌（『尾張年中行事絵抄』春之部中二、東洋文庫所蔵）

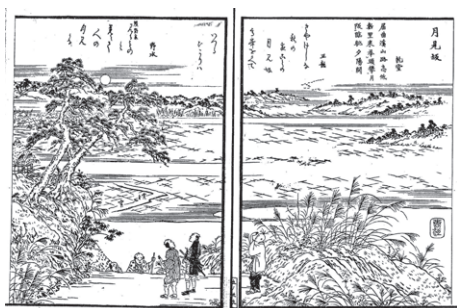


図4 月見坂（『尾張名所図会』前編卷五、国立国会図書館所蔵）

これによると、正眼寺の山門内には五百羅漢の小仏が置かれているのだが、二代忌と呼ばれる法要の日に限っては山門が地域住民に開かれ、参詣した住民は羅漢の小さな仏像をそれぞれ「盗み帰り」することが許されるというのである。こうした、現在の小牧市内に関する記事を見ると、まさに「名所」を描く『尾張名所図会』に対して『尾張年中行事絵抄』は地域住民たちの生活に根差した「年中行事」を描くことを主眼に置いていることが理解できよう。

また、『尾張年中行事絵抄』は、彩色画である利点をいかして、単色の木版摺である『尾張名所図会』等では不可能な絵画表現がなされている。例として、『尾張年中行事絵抄』『尾張名所図会』のそれぞれで、尾張における月見の情景を描く挿絵を挙げる。

『尾張名所図会』では、前編巻五の二九丁裏と三〇丁表に「月見坂」と題して名古屋郊外の名所が紹介されている（図4）。これは現在の覚王山（名古屋市千種区）付近に相当する場所とされるが、挿絵における月夜の描写は線描による表現にとどまらざるを得ない。これに対して『尾張年中行事絵抄』「八月之部中十二」では、十三丁裏と十四丁表にかけて「熱田湯月

年に一度だけ、山掃除のために近在の住民が入ることができるのが「小牧之山明」と呼ばれる年中行事である。挿絵には山掃除で働く人々が大きく描かれ、小牧山は働く人々の列の彼方にある。この小牧之山明と呼ばれる行事は、いわば尾張藩の使役に駆り出されるものであるのだが、記事によれば住民はこれを「神事か紋日のやうに」楽しみにしており、若い女性などは着飾って参加したとされる。挿絵でも画面手前では女性たちが野良作業とは思えない華やかな装いで行き交う様子が描かれる。

青松山正眼寺（小牧市三ツ泖）についても、『尾張名所図会』との違いを見て取れる。正眼寺は、『尾張名所図会』では広大な境内の挿絵とともに、曹洞宗の名刹であることを紹介することに重きが置かれた構成になっている。対して『尾張年中行事絵抄』『春之部中二』では、十九丁裏と二〇丁表にかけて挿絵で境内を見せることは同様であるが、次のような年中行事が紹介されている（図3）。

三 泖 正眼寺二代忌

みつぶちむらじょうげんじのだいいき 春日井郡に在、小 当山は曹洞派の禪家にして一宗惣録所なり。此日諸山の大家集会して
三ツ泖村正眼寺二代忌 牧山の西に當る。 大法事をなす。又、山門仏の五百羅漢を拜せしむ。（中略）此日山門に登る事を免し、五百羅漢を拜ましむ。
たいほうじ さんもんぶつ はい さんもん のほ らん おが
大法事をなす。又、山門仏の五百羅漢を拜せしむ。
きんこう さんげい しやうぶつ たい ぬす かへ わがや ちぶつどう あんち そうげう なごはし
近郷よりの参詣かの羅漢は小仏なるを一体づゝ盗み帰りて我家の持仏堂に安置して崇敬する風俗となれる。昔より寺の嘉例の様になりて是を禁せず。其年々失なへたるを、刻み補ふとぞ。
かれい きん うし おきな

後に小田切春江が秋のものとして「九月之部」を加えていることから、おおよそ文政年間（一八一八〜一八三二）から天保年間（一八三一〜一八四五）と考えられる。したがって描かれる年中行事や祭礼の様子もほぼ同時期のものと考えて良いだろう。

その内容は、同様に尾張を題材とする通俗地誌として著名な『尾張名所図会』と比較すると、より人々の暮らしに密着した、当時の息遣いが聞こえてくるようなものとなっている。

試みに現在の小牧市内に関する記事を取り上げてみよう。一つには小牧山に関する記事がある。『尾張名所図会』前編卷之三では、五九丁裏と六〇丁表にかけて小牧山について全体を鳥瞰した挿絵を載せるほか、かつて存在した小牧山城や小牧・長久手の戦いの故事についての解説が述べられる（図1）^③。対して『尾張年中行事絵抄』「春之部下三」では、小牧山に関連する年中行事として十七丁裏と十八丁表にかけて「小牧之山明」の紹介が中心に置かれている（図2）。

こまきのやまめき
小牧之山明

山あきといへるは三月節旬の前後にありて日は定まらず。これは、常に人入らず所なるを此日のみ御掃除と

て近郷十三ヶ村の男女群来りて枯木を切り落葉をも拾ふ。其かれ木などの大木は車にのせて引出し或は

釣、荷ひなどす。此辺にては神事か紋日のやうに心得たれば、若き女などは美しく粧ひ、かれ枝を束にゆ

ひて頂にのせ、あまたつらなり帰るさまは、さながら黒木うりのねり物に似たり。

近世における小牧山は、小牧長久手の合戦において徳川家康が豊臣秀吉の軍勢と戦ったことから、徳川家が天下を取るにいたる開運の地として保護され、尾張藩の管理下にあつて通常は山に入ることを禁じられていた。それが

は本名を忠近、通称を伝之丞といい、彼もまた百石取りの尾張藩士である。高力猿猴庵に画法を学んだとされており、『尾張名所図会』の絵師として知られる。

現存する『尾張年中行事絵抄』は、全十四冊からなり、年中行事を扱う内容だけにそれぞれ季節ごとに「春之部」、「夏之部」、「秋之部」となっているが、「冬之部」は残されていない。公益財団法人東洋文庫に所蔵されるほか、名古屋市蓬左文庫に「秋之部」一冊、前田育徳会尊経閣文庫に「春之部」(部分)、「夏之部」(部分)、「秋之部」各一冊、個人蔵として「夏之部」が二冊、名古屋市鶴舞中央図書館に「秋之部」(写本)一冊がある。

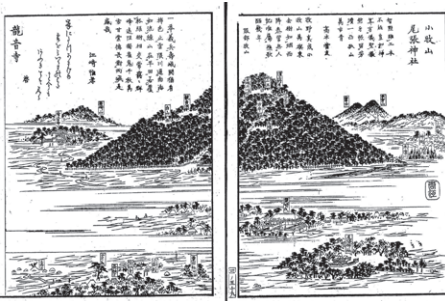


図1 小牧山 尾張神社(『尾張名所図会』前編巻之三、国立国会図書館所蔵)



図2 小牧之山明(『尾張年中行事絵抄』春之部下三、東洋文庫所蔵)

十三冊は高力猿猴庵の自筆、第十四冊は小田切春江の筆になるものである(2)。東洋文庫所蔵本の各本の題箋はそれぞれ、「春之部上一」、「春之部中二」、「春之部下三」、「四月之部上四」、「四月之部下五」、「五月之部上六」、「五月之部下七」、「六月之部上八」、「六月之部下九」、「七月之部全十」、「八月之部上十一」、「八月之部中十二」、「八月之部下十三」、「九月之部全十四」で全十四冊となっている。

『尾張年中行事絵抄』の制作年代は高力猿猴庵の最晩年にあたり、彼の没

『尾張年中行事絵抄』に見る近世尾張名古屋の色彩

内田 吉哉

一 はじめに

本稿は、近世後期に著された通俗地誌『尾張年中行事絵抄』の挿絵を検討することで、現在では失われた風俗や祭礼について考察をくわえることを目的とする。また『尾張年中行事絵抄』の挿絵はすべてが彩色画となっており、それらの色彩から得られる情報の史料価値についても言及したい。

二〇一〇年以降、過去の風俗の色彩を復元する試みとして、人工知能技術（AI）を活用したモノクロ写真のカラー化がある^①。しかしながらこうした人工知能技術による復元は、使用される技術が極めて複雑にわたるため、導き出された色彩の情報が妥当なものであるかどうか検証することが困難であるともいえる。

これに対して『尾張年中行事絵抄』の場合は、作者である高力猿猴庵（種信）が自身の見聞に基づいて施した彩色であるため、顔料による色彩表現の限界および史料の劣化による退色を考慮に入れても、その色彩の情報には十分な信頼性を認めることができると考えられる。そこで本稿では、検討の結果得られた、近世尾張名古屋の風俗と色彩についての知見について述べたい。

二 『尾張年中行事絵抄』とは

本稿で検討を加える史料『尾張年中行事絵抄』とは、その名の通り尾張国内の年中行事を挿絵付きで紹介する通俗地誌の一種である。著者は高力猿猴庵（一七五六〜一八三一）と小田切春江（一八一〇〜一八八八）である。高力猿猴庵は本名を種信、通称を新三あるいは与左衛門といい、三百石取りの尾張藩士であった。『猿猴庵日記』をはじめとして当時の世相や風俗を自筆の挿絵入りで描いた記録物など、多様な著作を残している。また小田切春江

執筆者紹介 (氏名 abc 順)

江口直光 (愛知文教大学人文学部教授)

遠藤 康 (愛知文教大学人文学部教授)

早川 渡 (愛知文教大学人文学部教授)

梶川克哉 (愛知文教大学人文学部准教授)

川口淑子 (愛知文教大学人文学部准教授)

小川現樹 (愛知文教大学人文学部准教授)

内田吉哉 (愛知文教大学人文学部准教授)

編集委員

(*編集委員長)

遠藤 康

川口淑子

*松岡みゆき

ISSN 1344 - 4433

愛知文教大学論叢 第26巻

Aichi Bunkyo University Review Vol.26

2024年2月1日発行

発行者 愛知文教大学

〒485-8565 愛知県小牧市大草5969-3

電話 0568-78-2211

F A X 0568-78-2240

代表者 富田健弘

編集者 愛知文教大学紀要編集委員会

印刷・製本 有限会社一粒社

CONTENTS

[Articles]

A Study on <i>Let Me Eat Your Pancreas</i> (1)	EGUCHI Naoaki	1
<i>Şatçakranirûpaña</i> : Japanese Translation (3)	ENDO Ko	19
An Examination of Reskilling for Programmers	HAYAKAWA Wataru	45
Analysis of the Polysemous Word ‘ <i>Tomaru</i> ’	KAJIKAWA Katsuya	59
“The Luncheon” by Somerset Maugham	KAWAGUCHI Toshiko	77
Implementation of Project-Based-Learning in Career Counseling Classes	OGAWA Utsuki	85
Research Record		105

A Study of Colors of Early Modern Owari Nagoya as seen in <i>Owari Nenchu Gyoji Esho</i>	UCHIDA Yoshiya	— (134)
---	----------------	---------

Published by

AICHI BUNKYO UNIVERSITY

5969-3 Okusa, Komaki, Aichi 485-8565 JAPAN